

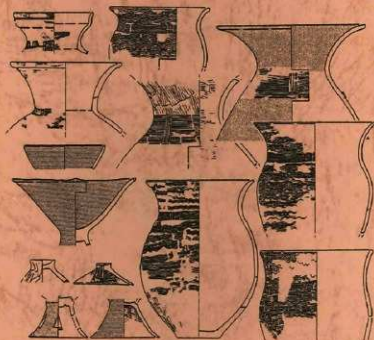
坂城町埋蔵文化財調査報告書 第4集

MINAMIJYO
南条遺跡群

TSUKADA

塚田遺跡 II

—長野県埴科郡坂城町塚田工業団地造成事業に伴う緊急発掘調査報告書—



1995. 3

坂城町土地開発公社
坂城町教育委員会

南条遺跡群

塚田遺跡II

1995. 3

坂城町土地開発公社

坂城町教育委員会

序

坂城町教育委員会教育長 西沢 民雄

坂城町家田工業団地造成事業に伴う、埋蔵文化財の発掘調査は、平成5年7月21日から同年10月27日まで行われました。

調査の結果、弥生時代後期を主体とする集落址が判明し、竪穴住居址36棟、土坑址21基、溝状遺構5条等々が調査の結果明らかにされました。注目されるものに、長軸約10m、短軸約6mの規模の大きな住居址が1棟あり、その中から、群馬県の方から持ち込まれた土器や、北陸方面から運ばれた土器が出土したことから、特別な住居と思われるものがありました。現在はもとより、原始の時代から他地方の文化と融合しながら、文化が成り立っている良い例ではないかと考えております。

調査の途上、町民のみなさんを対象に現地説明会を開催し、大勢の方にご参加願ひ、埋蔵文化財に対する関心と理解を深めていただけたことは、ありがたいことであります。

本調査にあたり、団長の森嶋稔先生、長野県教育委員会文化課には終始温かいご指導をいただき、厚くお礼申し上げます。

また、調査団の関係各位には、異例な長雨に悩まされながらの調査となりましたが、快く作業にご協力くださったことに、敬意と感謝を申し上げ序にかえる次第であります。

例 言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町塚田工業団地造成事業に伴う南条遺跡群塚田遺跡IIの発掘調査報告書である。今回の調査により、当調査区で遺構が検出されたため、塚田遺跡の範囲を拡大した。
- 2 発掘調査は、坂城町土地開発公社から委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査所在地及び面積
(南条遺跡群 塚田遺跡II) 長野県埴科郡坂城町大字南条字塚田6251番地他
2834㎡
- 4 調査期間
現地調査 平成5年7月21日～10月27日
整理調査 平成6年4月22日～平成7年3月25日
- 5 植物珪酸体の分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、第V章に掲載した。また、平成4年度実施の塚田遺跡の自然科学分析も第V章に掲載した。
- 6 本書の作成にあたり助川のほか、中村、宮尾、萩野が主な作業を行った。
- 7 本遺跡の遺物トレス業務の一部を、みすず測量設計株式会社に委託した。
- 8 本書の執筆・編集は、森嶋調査団長の指導の下、助川が行った。
- 9 遺物写真の撮影は小平が行った。
- 10 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 11 本調査及び本書の作成にあたって、下記の方や機関からご配慮を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略、50音順)

青木 一男、青木正洋、赤松 茂、飯島哲也、上原 学、白田武正、尾見智志、川上 元、兄玉卓文、小林真寿、小山岳夫、佐藤信之、坂井美蘭、堀入秀敏、白沢勝彦、新谷和孝、須藤隆司、高村博文、竹原 学、堤 隆、羽毛川卓也、林 幸彦、原 明芳、福島邦男、三石宗一、翠川泰弘、宮下健司、欠口忠良、矢島宏雄、山口 明、和田信行、和根崎剛
長野県教育委員文化課、館長野県埋蔵文化財センター、館更埴広域シルバー人材センター

凡 例

- 1 遺構の略号は下記のとおりである。

Y→竪穴住居址 D→土坑址 M→溝状遺構 Q→特殊遺構

- 2 遺構名は、時代別ではなく命名順である。

- 3 挿図の縮尺は、下記を基本としたが縮尺の異なるものもあるため、各図ごとに縮尺を明示した。

竪穴住居址・土坑址→1/80 竪→1/40 溝状遺構→1/200 遺構配置図→1/600

土器→1/4 土器拓影図→1/3 土製品→1/2、1/3 石器→1/2、1/3、1/6

- 4 挿図中におけるスクリーン・トーンは、下記のものを示す。

1) 遺構

遺構構築土→斜線 焼土→網点 炭化物→細網点

2) 遺物

縄文前期織維土器断面→網点

赤色塗彩→網点

- 5 遺物の挿図中での表記は、第1図1は1-1とした。

- 6 土層の色調及び土器胎土の色調は、『新版 標準土色帖』の表記に基づいて示した。

- 7 遺物の観察表は、第VI章の最後に掲載した。

- 8 遺物(土器)観察表の法量は、口径・底径・器高の順に記載し、-は不明、()が残存値、〈 〉が推定値、()がない場合は完存値を示し、単位はcmである。

- 9 住居址観察表の中で、面積の計測には、プランクスセブンを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

目 次

序・例言・凡例	
第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第2節 調査の構成	2
第3節 調査日誌	3
第II章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第III章 発掘調査の概要	8
第1節 調査の方法	8
第2節 基本層序	8
第3節 検出された遺構・遺物	10
第IV章 発掘調査の結果	12
第1節 竪穴住居址	12
第2節 土坑址	84
第3節 溝状遺構	94
第4節 特殊遺構	100
第5節 その他の遺物	101
第V章 自然科学分析	110
第1節 塚田遺跡II植物珪酸体からみた燃料材の推定	110
第2節 塚田遺跡における占環境復元	114
第VI章 総括	131
第1節 縄文時代出土遺物について	131
第2節 弥生時代後期の出土土器について	131
第3節 弥生時代後期の出土土器について	132
第4節 植物珪酸体分析結果から	134
第5節 塚田遺跡IIの集落構造について	135
図版	
あとがき	

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機と経緯

南条遺跡群塚田遺跡Ⅱは、坂城町南条に所在し、千曲川によって形成された沖積地の中洲と思われる微高地に位置すると思われ、谷川と前沢川によって形成された扇状地の扇端部にも位置している。平成元年度に作成された「坂城町遺跡分布図」によると当調査区は遺跡範囲外であったが、開発対象地内が南条遺跡群塚田遺跡（弥生～平安時代）、金井西遺跡群並木下遺跡（縄文～平安時代）の遺跡包蔵地となっており、遺跡の性格が不明な状態であった。隣接する塚田遺跡では、平成 4 年度に塚田工業団地取付道路建設に伴う発掘調査を実施した結果、弥生時代後期後半の集落址の一端や、平安時代の水田址が検出され、同様な遺跡の性格も予想された。

今回、坂城町土地開発公社が行う塚田工業団地造成事業が計画され、遺跡の破壊が与儀なくされることとなり、長野県教育委員会文化課、坂城町土地開発公社、地元研究者森嶋徳氏、坂城町教育委員会の 4 者による保護協議の結果、開発対象地内の遺跡の性格把握のため、平成 4 年度に試掘調査を実施した。再度の保護協議の結果、竪穴住居址の集中して検出された約 2800㎡を対象とした発掘調査を実施するよう、長野県教育委員会文化課より指導を受け、発掘調査を実施することとなった。



第 1 図 塚田遺跡Ⅱ位置図

第2節 調査の構成

(調査団)

団長	森嶋 稔（日本考古学協会、長野県考古学会会長、千曲川水系古代文化研究所主幹）
担当者	助川朋広（坂城町教育委員会学芸員）
調査員	郡山雅友（臨時職員、平成5年8月退任）
調査補助員	中村久子、宮尾美代子、萩野れい子、春原かずい（以上臨時職員）
協力者	青木清、朝倉三郎、石井和美、池田てる子、伊藤篤、上野かず江、白井かね、小林さよ子、斎藤義治、鳥谷久、鈴木敏子、鈴木猶子、田中勤、塚田智子、塚田もと子、中島さよ子、中島千津子、中村さつき、中村容民、日向正義、松本よし子、三井重子、緑川よし江、宮原ちよ子、山崎貞子、山辺ケサエ、山辺春男（以上、更埴広域シルバー人材センター） 浅野井出、赤塚淳、大橋廣司、陶山和重（高校生）、小宮山和氏、塚田明、宮原淳（以上、中学生）

(事務局) 坂城町教育委員会

教育長	西沢民雄
社会教育課長	塩野人猛
文化財係長	山崎致弘
文化財係	助川朋広、小平光一、瀬在孝子（臨時職員） 青木卓（嘱託職員、平成6年4月就任） 郡山雅友（臨時職員、平成5年8月退任） 中村久子、宮尾美代子、萩野れい子、春原かずい、天田澄子、塩野入早苗、高木和子（以上、臨時職員）

第3節 調査日誌

平成5年度

- 7月21日 中世水田址の断面観察のため、バックフォーによるトレンチ掘削開始。
- 7月26日 調査協力者を加え、結団式を行う。中世水田址の断面精査を行う。
- 7月28日 中世水田址の断面調査を終了する。
- 7月29日 弥生時代の調査開始。バックフォーによる、表土除去作業を行う。包含層からの出土遺物が多く、以下人力にて掘り下げを行うことに決定。(包含層調査)
- 8月2日 包含層掘り下げにて住居址を検出。引き続き包含層掘り下げを行う。
- 8月12日 バックフォーによる表土除去作業終了。検出住居址は10棟を数える。
- 8月18日 雨にて調査区が水没。復旧作業に手間取る。
- 8月23日 Y8住検出面から鉄斧が出土。
- 8月24日 遺物包含層の調査を一時終了し、住居址の掘り下げを開始。重複した住居址については、切り合いの把握のため、サブトレンチによる新旧関係の把握を行う。
- 8月30日 数日米残暑がひどく調査の進捗が遅れる。
- 9月10日 台風により、調査区水没。復旧作業に手間取る。
- 9月13日 Y2住掘り下げが、湧水がひどく、掘り下げが困難。
- 9月15日 雨にて調査区水没。復旧作業に手間取る。
- 9月16日 Y6住完掘し、遺物の状況から遺物が廃棄された状況が見られる。
- 9月18日 D13調査により、骨粉出土。
- 9月20日 Y14住がM2より新しいと判明。
- 9月28日 雨等による調査の難行により、10月まで調査期間延長が決まる。
- 9月29日 Y16住覆土中から、多量の土器が出土。焼失住居址と判明。
- 10月4日 Y17住から炭化材が出土。焼失住居址と判明。
- 10月5日 遺構掘り下げ、包含層掘り下げを行う。
- 10月10日 現地説明会を開催。参加者80余名。
- 10月21日 長野市立博物館講座受講者に説明を行う。
- 10月25日 D19が小型の住居址と判明する。
- 10月27日 調査終了式を行う。本日をもって現地調査を終了する。
- 11月9日 遺物整理、機材の搬出を終了する。

平成6年度

- 4月22日 土器洗いを開始する。
- 4月28日 調査のため一時土器洗いを中止。
- 8月23日 図面修正、社記を開始。
- 9月1日 土器洗い再開。
- 10月4日 遺物接合・復原を開始。
- 1月9日～3月25日 遺物実測・トレス等行い報告書刊行。

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

坂城町は、東信濃と北信濃の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。県の東部から北部を貫通する千曲川は、佐久地方を経て上川・小県盆地の北端である千曲川右岸に位置する塩尻の岩鼻と、左岸に位置する半遊の岩鼻から、坂城広谷と呼ばれる貫通谷である沖積盆地をつくりだしている。そして、坂城町の北側に位置する横吹きの岩壁をかすめて、戸倉・上山田の沖積地へと続いていく。

坂城町は、南では両岩鼻が千曲川断層面の岩壁となり、東では、太郎山・鏡台山とを南北に続く山稜が、上田・真田・更埴の市町村界となり、五里ヶ峰から葛尾山、横吹きと自在山の岩壁がネック状となり、屏風のように連なっている。西では、大林山を主峰とする山稜が連続し、上田・上山田・坂井との市町村界となって一地域を構成している。千曲川はその地域を北流しているのである。

右岸地域の坂城・中之条・南条地区と左岸地域である村上地区は、したがって摺り鉢状の盆地形をなす千曲川流域の独立した空間であり、広谷状をなしている。地域の特徴は、右岸の地域は西南する広い斜雨と、いくつかの小河川や沢によって形成された複合扇状地と千曲川沿いの沖積地であり、左岸地域は、千曲川断層面のなす岩壁と小さな沢や岩錐、小複合扇状地というように様相を異にしている。

南条遺跡群塚田遺跡は、千曲川の右岸地域の中洲と思われる微高地上に位置し、前沢川と谷川によって形成された扇状地の扇端部にあたる。標高は407m前後を測る。現在の千曲川から直線距離で約300mにあたり、この付近は恵まれた水田域、坂城町の工業の中心地としての工業団地、住居等に利用されている。

第2節 歴史的環境

坂城町の自然堤防上や小河川によって形成された複合扇状地には、いくつもの遺跡が存在し、遺跡の性格も多種多様である。

旧石器時代の遺跡では、保地遺跡(3-1)から上ヶ屋形彫刻器や小型の尖頭器が数点採集されており、これらの遺物より後期旧石器時代に所属する遺跡であると考えられている。

縄文時代の遺跡では、金井遺跡群(2)から早期と考えられる特殊磨石が出土し、坂城地区では込山A・B遺跡などで前期・中期の上器や住居址が確認されている。金井遺跡(2-1)では、



- 1 南条遺跡跡(弥一平) 1-1 東森遺跡(縄-近世) 1 2 御殿裏遺跡(弥一平) 1-3 百々斗利遺跡(弥一平)
 1-4 中町遺跡(弥一平) 1-5 田町遺跡(弥一平) 1-6 廻り月遺跡(弥一平) 1-7 塚田遺跡(弥一平) 1-8 青木下遺跡(弥一平)
 2 金井四遺跡群(縄~平) 2-1 金井遺跡(縄~平) 2-2 社宮神遺跡(縄~平) 2-3 志木下遺跡(縄~平)
 3 金井東遺跡群(縄~平) 3-1 保地遺跡(縄~平) 3-2 山金井遺跡(縄~平) 3-3 大木久保遺跡(縄~平) 3-4 酒玉遺跡(縄~平)
 4 栗ヶ谷古墳(古坟) 5 社宮神社(中世) 6 町根尾遺跡(縄~平) 7 北畑古墳(古坟後期) 8 中之条遺跡群(縄~平)
 8-1 寺前遺跡(縄~平) 8-2 上町遺跡(弥一平) 8-3 東町遺跡(弥一平) 8-4 北浦遺跡(縄~平) 8-5 川上遺跡(縄~平)
 9 荒余塚古墳(古坟後期) 10 谷川古墳群(古坟後期) 10-1 入原岡支群向山古墳(古坟後期) 10 2 入横尾支群刈塚古墳(古坟後期)
 11 入横尾遺跡(古) 13 前原塚墓群(中世~近世) 14 御堂川古墳群山口支群(古坟後期) 15 山崎遺跡(縄) 16 前堂川古墳群山崎支群(古坟後期)
 17 御堂川古墳群前山支群(古坟後期) 17-1 前山1号墳(古坟後期) 17-2 前山2号墳(古坟後期) 17-3 前山3号墳(古坟後期)
 17-4 前山4号墳(古坟後期) 17-5 前山5号墳(古坟後期) 17-6 前山6号墳(古坟後期) 18 御堂川古墳群東平支群三塚古墳(古坟後期)
 19 御堂川古墳群山田支群(古坟後期) 20 鹿籠遺跡(弥一平) 21 間敷遺跡(弥一平) 22 入原古墳(古坟後期)
 24 茂久保遺跡(古~平) 53 庚申無鉄遺跡(中世) 65 中之条石切場後(近世) 66 碓氷古墳(古坟後期) 67 中之条代官所跡(中世)
 69 観音城跡(中世) 70 南郷の月遺跡(弥一平) 71 口留番所跡(近世) 72 和倉城跡(中世) 89 上平賀岡庭塚遺跡(近世)

第2図 周辺遺跡分布図

中期の勝坂式土器や出尻土偶が採集されている。晩期では、保地遺跡（3-1、昭和42年調査）から亀ヶ洞系の土器群が出土している。また、坂城地区の込山E遺跡からは透光器土偶の頭部が採集され、古くから注目されている。これらの遺跡は、千曲川の開析による段丘地形の上部に位置している。近年では、千曲川の沖積地においても東裏遺跡Ⅱ（1-1、平成4年度調査）、青木下遺跡（1-8、平成4年度調査）において、中期～晩期にかけての土器や石器が出土している。当遺跡でも前期～晩期の土器が出土しており、住居址等が検出されない状況下ではあるが、千曲川沖積地の縄文時代の遺跡立地（更埴市、上信越自動車道調査）に大過ないものと思われるが、季節的な生業によるものとも理解できそうである。

弥生時代では、中期以前の遺跡の調査がなされていないため、不明な状態である。集落遺跡では中町遺跡（1-4）、塚田遺跡（1-7、平成4年度調査）、百々目利遺跡（1-3）から後期後半に位置する土器が出土し、千曲川の中洲に位置する遺跡と保地遺跡（3-1）のように、千曲川沖積地の段丘上に位置する遺跡、和平B遺跡のように高地性集落の遺跡も存在している。和平B遺跡は、標高1000mを越える遺跡で、季節的な生業によるものとも考えられている。弥生時代後期後半の遺跡は、南条の千曲川沖積地の中洲と思われるところに集中して検出されており、安定した生産域をもつことが立地条件になっていると考えられる。今回の塚田遺跡Ⅱの調査によって後期後半の集落の存在が明らかにされたことが重大な成果である。

古墳時代では、前期の集落遺跡が不明な状態であるが、寺浦遺跡（8-2）、坂城地区の込山E遺跡から4世紀代の土器が採集されている。中期以降の集落遺跡では、千曲川の自然堤防上と思われる東裏遺跡（1-1）からは中期末に位置づけられる手捏土器や石製模造品が出土しており、東裏遺跡Ⅱ（1-1、平成4、5年度調査）では、中期後半～後期後半の集落の一端が明らかにされ、中期末に所属すると思われる玉造り工房址が3棟検出されている。また、千曲川段丘上に位置する宮上遺跡Ⅱ（8-5、平成4年度調査）、北浦遺跡（8-4）からは、後期の集落が検出され、カマドの芯材と見られる円筒形土製品が出土している。古墳については、後期に所属する古墳が主体を占めてはいるが、5世紀前半に位置づけられる東平古墳が調査（平成5年度長野県歴史文化財センター）され、前期古墳の存在が明らかとなってきた。後期古墳については、御堂川古墳群前山支群前山1号墳（17-1、昭和49年調査）など山脚部に位置するものが多く、右岸地域では中之条・南条地区の御堂川や谷川の河川沿いに集中しており、御堂川古墳群・谷川古墳群などがある。左岸地域では、出浦沢川や福沢川の支流に位置し、石室の規模が千曲川水系最大である御厨社古墳が代表される。

奈良時代では、東裏遺跡Ⅱ（1-1）、寺浦遺跡（8-1、平成6年度調査）で集落調査が行われ、寺浦遺跡では大型の掘立柱建物址が検出され、坂城郷長あるいは単長的な施設が存在した可能性が考えられてきた。遺物では、灰釉陶器蓋、緑釉陶器などが出土し注目される。宮上遺跡Ⅱ

(8-5、平成4年度)でも在地色の濃い須恵器をもつ集落が検出されている。生産遺跡としては、坂城地区の土井ノ人窯跡がある。

平安時代では、東裏遺跡Ⅱから礎石建物址が検出され、他に金井西遺跡群(2)があり、生産遺跡として青木下遺跡(1-8)、塚田遺跡(1-7)で仁和4(888)年の千曲川の大洪水沈殿砂層に被覆された状態で水田址が検出された。9世紀初頃の寺院址である込山廃寺や他に上井ノ人窯跡の瓦窯があり、込山廃寺や上田市信濃国分寺・尼寺や更埴市正法廃寺の差し瓦が生産されたことが明らかとなっている。また、坂城地区には11世紀末に位置づけられる北日名経塚があり、銅製経筒、和鏡、白磁輪花小皿などが出土している。現在、東京国立博物館に所管されている。生産遺跡では、小山製鉄遺跡(平成5年度長野県埋蔵文化財センター調査)がある。

中世では、嘉保1(1094)年信濃国更級郡に配流された源順清が始祖と考えられている村上氏が地方豪族として成長し、戦国時代の武将村上義清が活躍した。その村上氏の城館が葛尾山頂に位置する葛尾城とその下方に位置する現在満泉寺の所在する一帯が村上氏館跡である。葛尾城は天文22(1553)年、武田信玄の攻略により脱出し自ら城を焼き放ったとされているため現存していない。天正10(1582)年に村上義清の子景国により、村上氏の先祖代々の菩提寺として満泉寺を復興したとされている。また、中之条地区には開散製鉄遺跡(53、昭和52・53年調査)があり、県内最初の製鉄遺跡調査であったが、製鉄炉址2基が検出され、村上氏末期と比定できる製鉄遺跡と判明した。千曲川の砂鉄を原料としていたことや地元産の褐鉄鉱を使用していた可能性もでてきた。中世末期に鉄の自給の必要性が高まった結果とも考えられている。南条地区には、金井・山金井という集落があり、鉄と非常に関係の深い地名が存在し、製鉄関連の遺跡の存在する可能性が高いため、注意が払われねばならない。また、社宮経塚(5)から白銅鏡や永楽通宝、金の小粒多数が発見されている。他に坂城地区の蓬平経塚、観音平経塚があり、観音平経塚(平成4年度長野県埋蔵文化財センター調査)からは、五輪塔、灰釉の蔵骨器が検出されている。

近世では、北国街道の制定により、坂木宿や松代藩の私宿である風宿がおかれたり、交通の上でも重要な位置を占める。坂木・中之条村は、幕府の直轄地で天領になり、天和元(1681)年松代藩預かりになり、天和3(1683)年坂木藩となり、元禄16(1703)年また天領にもどった経過がある。坂木には、最初坂木陣屋がおかれたが、宝暦9(1759)年中野陣屋預かりとなり、その後焼失したこともあり、安永8(1779)年中之条陣屋に移ったとされている。産業では、玄古煙草や、養蚕、生糸の生産が行われていた。

以上塚田遺跡Ⅱを中心とした、坂城町の遺跡と歴史について触れたわけであるが、古くから多種多様な遺跡が存在している状況が読みとれ、塚田遺跡Ⅱの集落が当町において重要な位置を占めていたことがわかる。

第三章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法

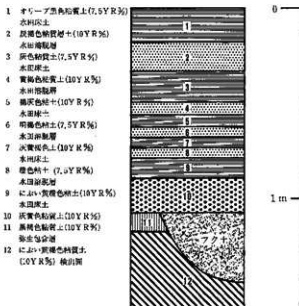
本遺跡の調査は、調査区内の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお周辺に存在が予想される遺跡の調査にも整合できるように、Ⅷ系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドは、200m×200mの大グリッドを設け区画を行った。その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定(第4図)し、北東端より、A・B・C・・・Y区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、A・B・F・G・K・L区が相当する。

さらに、その中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分割し、南北列を北から五十音順であ・い・う・・・こ、東西列を東から算用数字で1・2・3・・・10とし、各グリッドの北東交点を小グリッドとし、遺構外出土遺物の取扱いおよび遺構の検出位置は、この小グリッド単位で行っている。調査は、平成4年度に実施した試掘調査の結果をふまえ、調査区が決定され、中世の水田址も存在しているため、トレンチによる断面調査を行い、さらに下層に検出された弥生時代後期後半の集落址の調査を行うという2段階の方法を採用した。

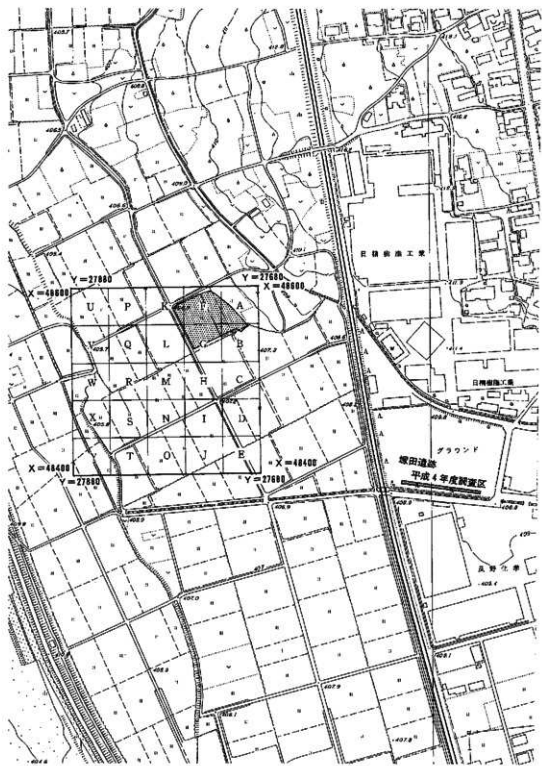
遺構の実測方法は、簡易遺り方測量で1/20を基本として行い、炬については、1/10で行ったものもある。

第2節 基本層序

塚田遺跡Ⅱの調査区内では、あまり大きな堆積変化の差異は見られない。第3図が調査区内の基本的な堆積土層のあり方である。1層は現代の水田の床土であり、2層は水田層の溶脱層である。3層は近世?の水田床土、4層は溶脱層、5層は中世?の水田床土、6層は平安時代と思われる水田床土、7層は溶脱層、8層は奈良時代と思われる水田床土、9層は溶脱層、10層は炭化粒子を少量含む粘質土である。11層は弥生時代の遺物包含層で、遺構の検出は12層の粘質土からの確認が容易と判断し、検出を行った。



第3図 基本層序模式図

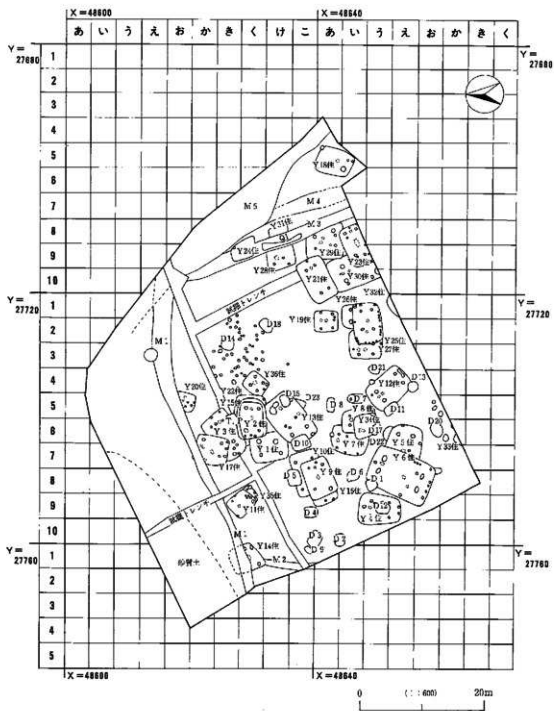


第4図 家田遺跡II発掘調査区設定図 (1:4000)

第3節 検出された遺構・遺物

原田遺跡IIより検出された遺構は以下のとおりである。

遺構	弥生時代後期後半	竪穴住居址	36棟
		土坑址	21基
		溝状遺構	4条
		特殊遺構	1基
遺物	土器	縄文時代前期～晩期	深鉢
		弥生時代後期後半	壺・甕・台付き甕・小型甕・鉢・高坏・広口壺・手捏土器
		奈良時代	須恵器坏(僅少量)
石器	縄文～弥生時代		打製石鏃、打製石斧、打製石鏃、磨製石斧、磨製石包丁、敲石、台石、凹石、磨石
	土製品	弥生時代	土製スプーン、土製勾玉、紡錘車、土器片円盤
	鉄製品	弥生時代	鉄斧



第5図 遺構配置図

第IV章 発掘調査の結果

第1節 竪穴住居址

1) Y1号住居址

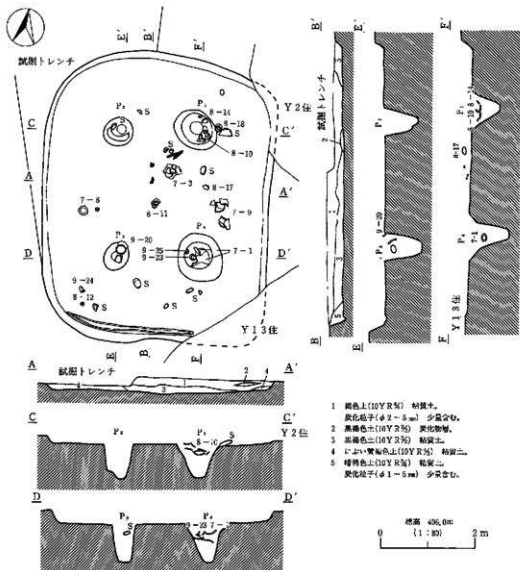
遺構 (第6図)

検出位置 F<6・7、Fけ6・7グリッド。重複関係 Y2・3号住居址に東壁、南壁の一部を破壊される。平面形態 長軸5.74m、短軸4.52mの隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-8°-Wを指す。壁残高は、12~33cmを測る。床面の状態 平坦で堅固な床面であった。ピットは4基検出され、P1~P4が主柱穴で、整然と長方形に配置されている。対角線上に1:2:1の割合で主柱穴、竅穴がプランニングされている。P1、P3、P4内部に赤色塗彩の施された壺、甕が覆土上層から検出された。P1は深さ約60cm前後、P2はテラスを有し、深さ70cm前後、P3は深さ約80cm前後、P4は深さ約82cm前後を測る。南壁下に深さ約2~6cmの壁溝が確認された。炉址 検出されなかった。遺物の出土状態 比較的散漫な状態であったが、主柱穴のピット覆土から1、5、10、14、16、23、25の壺、甕、広口壺、甌が出土した他は、覆土中からの出土遺物が多い。主柱穴からの出土遺物が多くP1、P4からの出土遺物が多いことより、主柱穴の柱材を抜きさった後に廃棄されたものと考えられる。

遺物 (第7・8・9図)

覆土中やP1、P4から弥生土器が出土し、壺・高坏・鉢・甕・小型甕・甌・蓋の器種があり、総体的に出土量も多く、器種組成がバラエティに富んでいる。

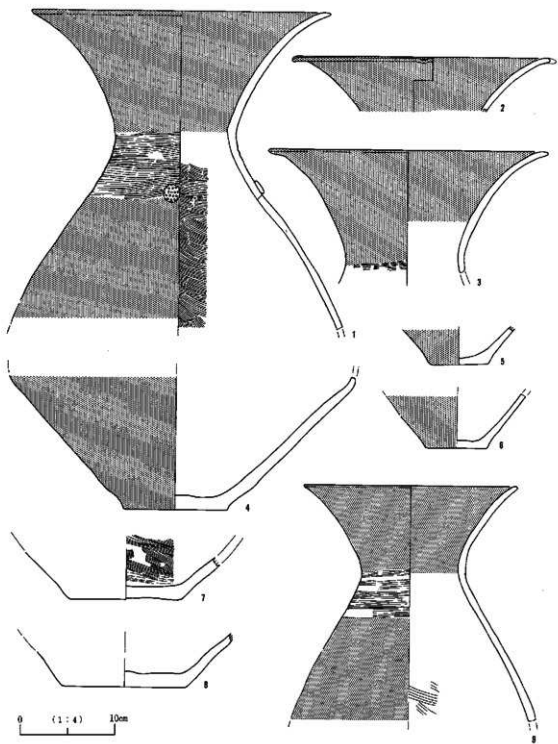
貯蔵形態には壺があり、頸部に櫛描きT字文が施されるもの(10)、施されないもの(1、3、9、11)の2者があり、後者の中には、ボタン状貼付文が貼付されるもの(1)がある。壺では比較的大型のものが多く、ほとんどのものは、後期後半の箱清水期の特徴を持ち、頸部文様体が赤色塗彩の施されないものが主体を占める。供献形態では広口壺、高坏があり、14は広口壺で外面に赤色塗彩が施される。高坏には13、15があり、15は坏部中位で破を持っているが赤色塗彩が施されない。13は小型の高坏の脚部で坏内面、外面に赤色塗彩が施される。16は赤色塗彩の施される什器形態の鉢である。摩耗が激しく、赤色塗彩が剥落している。煮沸形態の甕には頸部に櫛描き腹状文が施されるものと施されないものがあり、前者には頸部に櫛描き波状文を施した後、口縁部に櫛描き波状文を施すもの(17、18、19)がある。18は櫛描き波状文が摩滅している。櫛描き腹状文の施されない20は、頸部から口縁にかけて緩やかに外反し胴部はやや膨らむものと思われる。22、23は台付き甕と思われ、22は櫛描き腹状文が2段に施文された後、櫛描き波状文を



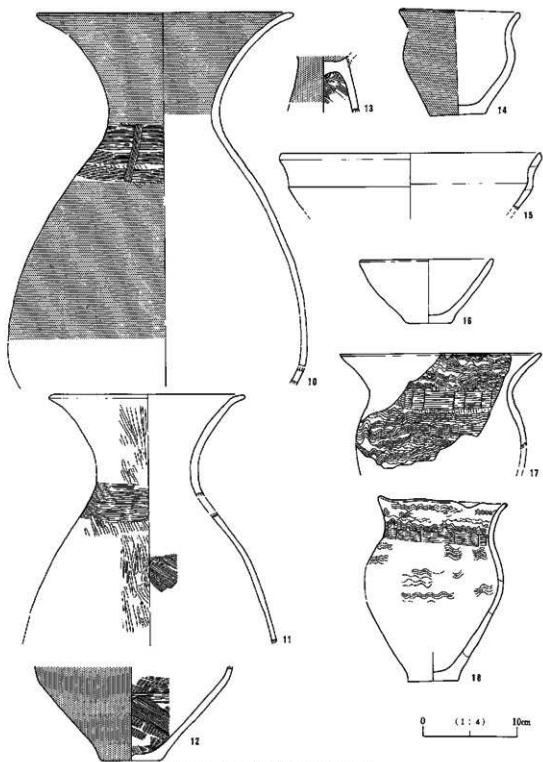
第 6 図 Y 1 号住居址実測図

施している。24は小型甕で、胴部上半に施文され縞描き蓋状文が等間隔止めとなっている。25は甕で外面に篋磨きされている。26、27は蓋のつまみ部である。28は上製品で、スプーンと思われる。

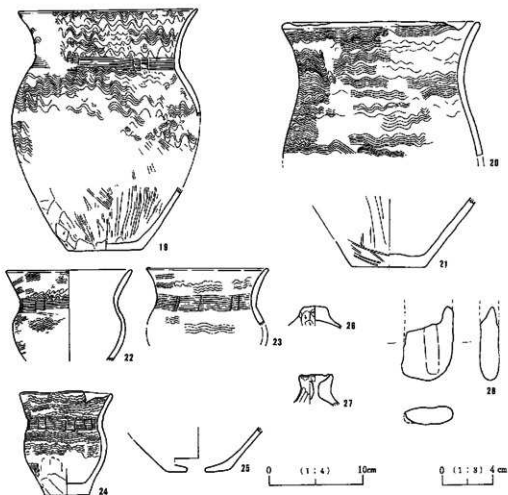
時 期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第7图 Y1号住居址出土器物实测图



第8图 Y1号住居址出土物实测图

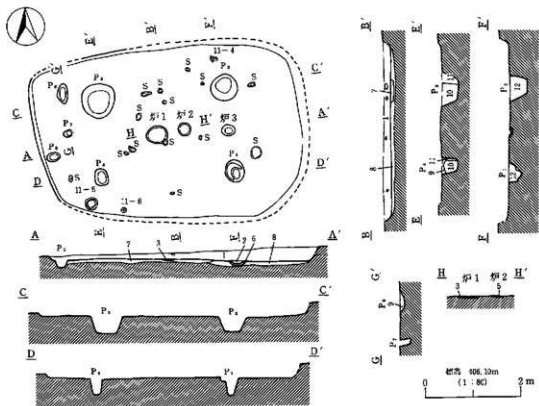


第9図 Y1号住居出土遺物実測図

2) Y2号住居址

遺構 (第10図)

検出位置 Fき5・6、Fく5・6グリッド。重複関係 Y15・22号住居址を破壊している。本住居址は掘り下げ段階で、後述するY15号住居址が住居廃絶後焼失した住居址であったことやY22号住居址より、Y15号住居址の床面が深かったことから、重複関係が判明した。平面形態 長軸5.48m、短軸3.56mの隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N-87°-Eを指す。Y15号住居址の床面において検出したため、壁残高は2~11cmである。床面の状態 平坦で堅固な状態であった。ピットは7基検出され、P1~P4が柱穴と思われる。P1はテラスを持ち深さ40cm前後を測る。P2は深さ40cm前後を測る。P3は深さ37cm前後を測る。P4はやや小型で36cm前



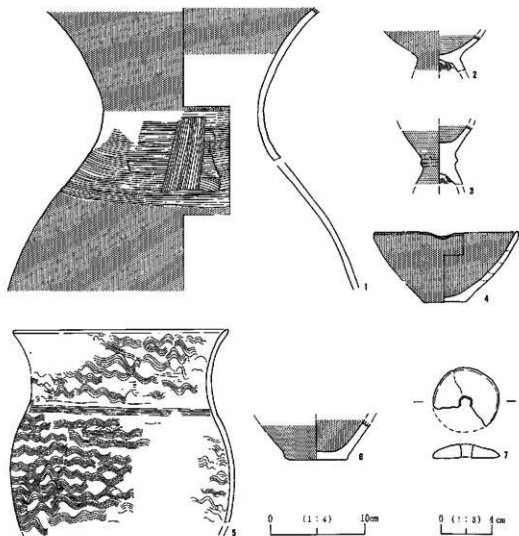
- 1 灰青褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。炭化粒子 (φ2-5mm) 含む。焼土粒子少量含む。
- 2 灰褐色土 (7.5Y R 5/6) 粘質土。焼土粒子含む。砂塵土。
- 3 におい黄褐色土 (5 Y R 5/6) 砂土。炭化粒子 (φ1-3mm) 含む。焼土粒子含む。
- 4 暗褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。炭化粒子 (φ5mm) 含む。焼土粒子含む。
- 5 におい赤褐色土 (5 Y R 5/6) 伊2焼土。焼土粒子含む。炭化粒子 (φ1-2mm) 含む。
- 6 赤褐色土 (5 Y R 5/6) 雑土。
- 7 灰青褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。掘り方焼土。炭化粒子 (φ5mm-1cm) 含む。焼土粒子含む。
- 8 におい黄褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。掘り方焼土。炭化粒子 (φ2-4mm) 含む。
- 9 暗褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。炭化粒子 (φ5mm) 含む。焼土粒子含む。
- 10 灰褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。炭化粒子 (φ3-5mm) 含む。
- 11 暗褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。炭化粒子 (φ3-5mm) 含む。焼土粒子含む。
- 12 におい黄褐色土 (10Y R 5/6) 粘質土。炭化粒子 (φ2-3mm) 含む。焼土粒子含む。

第10図 Y2号住居址実測図

後を測る。P5は西壁下にて検出され、深さ5cm前後を測る。P6はP3の西側に位置し、深さ8cm前後を測る。P7はP6の南側に位置し、深さ20cm前後を測る。P6・P7は住居の入口施設の可能性があると思われる。炉址 3基検出され、住居の中央に炉1・2が並んで検出され、P1・2の主柱穴間に炉3が検出された。炉1・2は掘り込みを持たない地床炉で、炉3は5cm前後のくぼみを有する地床炉である。炉1は長軸40cm、短軸30cmの楕円形で、炉2は28cmの円形である。炉3は長軸30cm、短軸21cmの楕円形である。遺物の出土状況 比較的散漫な状態であり、覆土中からの出土が多く遺物量は少ない。

遺物 (第11・98図)

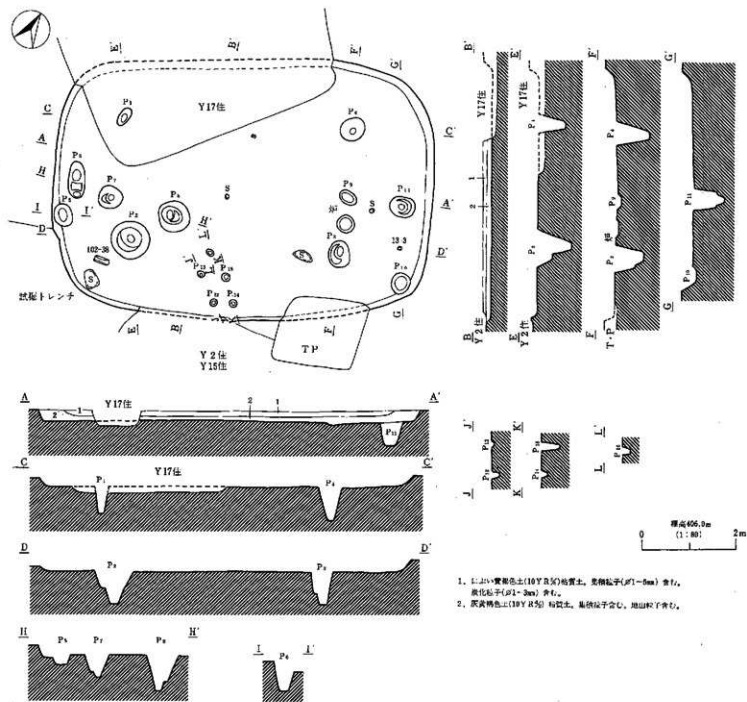
覆土中から壺・甕・高坏・鉢の弥生土器が出土しており、1の壺は頸部に横描きT字文を持ち、



第11図 Y2号住居址出土遺物実測図

口縁と胴部に赤色塗彩が施される肩の張る器形である。高坏では2・3があり、内外面に赤色塗彩と瓦磨きが施される。4は片口を有する鉢である。5は口縁部が伸長化したので肩の張で櫛描き葉状文が等間隔で施される。6は壺の底部、7は上製の紡錘車である。98-1は石鏝である。

時 期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第12図 Y3号住居址実測図

3) Y 3号住居址

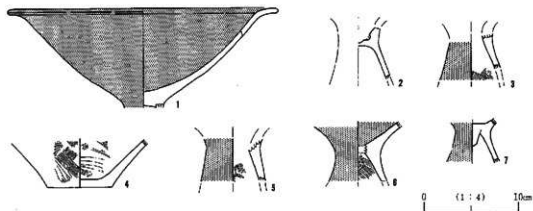
遺構 (第12図)

検出位置 Fか5・6・7、Fき5・6・7、Fく6・7グリッド。**重複関係** Y2・15・17号住居址に北壁、南壁の一部を破壊される。**平面形態** 長軸7.76m、短軸5.22mの隈丸長方形を呈する。主軸方位はN-56.5°-Eを指す。壁残高は12~26cmを測る。**床面の状態** 平坦で堅固な状態であった。ピットは16基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は深さ43cm前後を測る。P2はテラスを有し、深さ70cm前後を測る。P3はテラスを有し、深さ61cm前後を測る。P4は深さ70cm前後を測る。P5は西壁下に位置し、テラスを有し、深さ19~38cmを測る入口施設であると思われる。P11はテラスを有し、深さ68cmを測る棟持ち柱と思われる。P12~P16の小ピットが、並んでいるが棚等の施設になるのであろうか、詳細は不明である。**炉址** P3、P4の主柱穴内に位置し、深さ4cm前後を測る地床炉である。長軸40cm、短軸28cmの楕円形を呈する。深さ5cm前後のP9の存在を考慮すると、炉址がP3側に寄りすぎているため、当初P9に炉を想定していたものが何らかの理由により、使用されることなく、作り替えられたとも思われる。**遺物の出土状況** 散漫な状態で、覆土中からの出土が主体を占める。

遺物 (第13・102図)

供飲形態では高坏、貯蔵形態では甕が実測可能個体で、大型の高坏(1)と小型の高坏(2、3、5~7)があり、1は口縁部が強く外反する器形を呈する坏部で、内外面に赤色塗彩が施される。3、5、7は外面に赤色塗彩が施されており、6同様坏部内面に赤色塗彩が施される。4は甕の底部であり、ハケ調整の後筥磨きが行われている。102-38は台石と思われる。

時期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第13図 Y3号住居址出土遺物実測図

4) Y 4号住居址

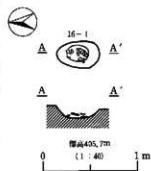
遺構 (第14・15図)

検出位置 Gい8・9・10、Gう8・9・10、Gえ9・10グリッド。重複関係 D12号上坑址に破壊されている。**平面形態** 長軸6.6m、短軸4.8mの隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N-4°-Eを指す。壁残高は2~34cmである。**床面の状態** 平坦で中央は堅固な状態であったが、壁際は軟質な状態であった。ピットは7基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1はテラスを有し、深さ26cm前後を測る。P2は深さ40cm前後を測る。P3は小型で深さ32cm前後を測る。P4も小型でテラスを有し、38cm前後を測る。P5はテラスを有している棟持ち柱と思われ、深さ26cm前後を測る。P6・7は南壁下中央にて2基対で検出され、深さ40cm前後を測る入口施設と思われる。**炉址** P1、P2の主柱穴間に位置し、赤色塗彩の施される壺の頸部から胴部にかけての破片を敷いた、土器敷き炉である。**遺物の出土状況** 比較的散漫な状態であり、覆土中からの出土が大半で南西壁側にやや集中していた。

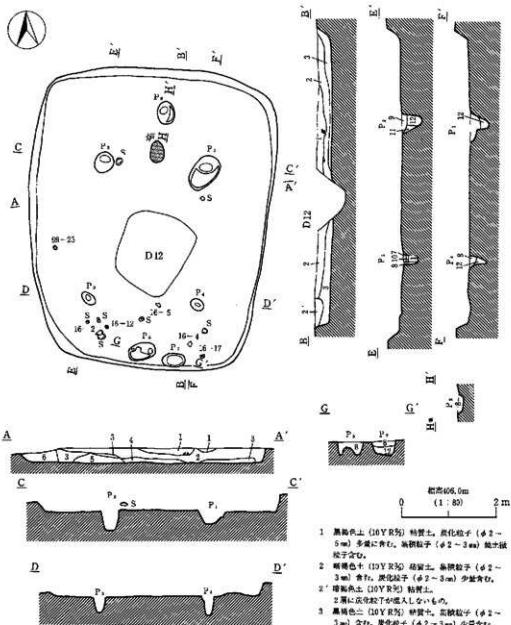
遺物 (第16・99図)

本住居址からは壺・甕・鉢・甌・甑等の遺物が出土しているが、完形個体は出土していない。貯蔵形態の壺には1~4があり、1は頸部に櫛描きT字文を施した後ボタン状貼り付けが行われる赤色塗彩の施される壺で、土器敷き炉に使用されたものである。2は外反する口縁部で、3・4は頸部から肩部にかけてのもので頸部に櫛描きT字文が施され、なで肩で赤色塗彩の施されるものである。煮沸形態の甕には5~10があり、5は口縁部の伸長化が見られる。7は櫛調整後、頸部に櫛描き簾状文が施された後、口縁部に3連止め櫛描き簾状文が施される。8は等間隔止めの施される甕、9は口唇部が受口状を呈する甕である。什器形態では11の鉢があり、片口を有する。12は甌である。13は手捏の壺と思われ、指頭痕が残る。16は2連止め櫛描き簾状文を有する台付壺と思われる。17・18は蓋で17には内外面ハケ調整が施される。99-23は凹石である。

時期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

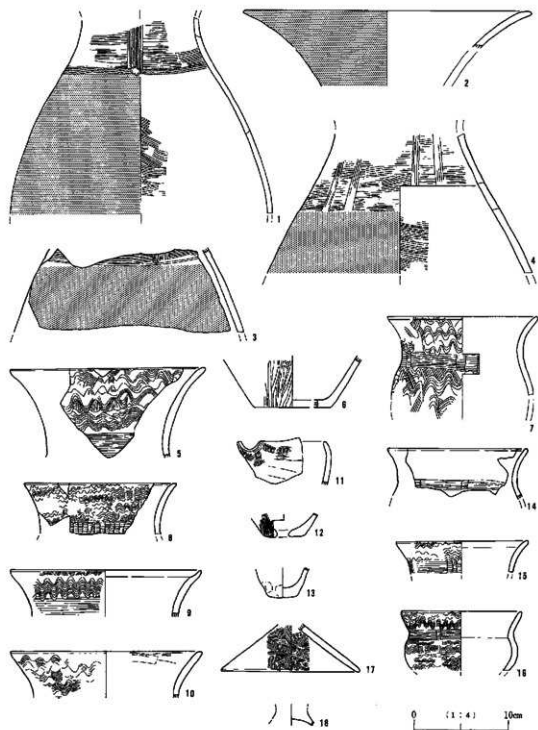


第14図 Y 4号住居址炉址実測図



- 4 暗褐色土 (10Y R 3) 粘質土。炭粒 (φ 2-5mm)、炭化角 (φ 2-3mm) 含む。
- 5 暗褐色土 (10Y R 3) 粘質土。4層に黄褐色粒が混入したものを。
- 6 褐色土 (10Y R 5) 粘質土。炭粒 (φ 2-3mm) 含む。
- 7 暗褐色土 (10Y R 3) 粘質土。炭粒 (φ 2-3mm) 少量含む。
- 8 暗褐色土 (10Y R 3) 粘質土。炭粒 (φ 2-3mm) 極少量含む。
- 9 灰黄色土 (10Y R 5) 粘質土。細砂粒含む。炭化角 (φ 2-3mm) 炭粒 (φ 2mm) 僅少量含む。
- 10 灰黄色土 (10Y R 5) 粘質土。細砂粒含む。
- 11 灰黄色土 (10Y R 5) 粘質土。炭粒 (φ 1-2mm) 少量含む。
- 12 灰黄色土 (10Y R 5) 粘質土。炭化角 (φ 2-3mm) 炭粒 (φ 1-3mm) 少量含む。

第15図 Y4号住居址実測図

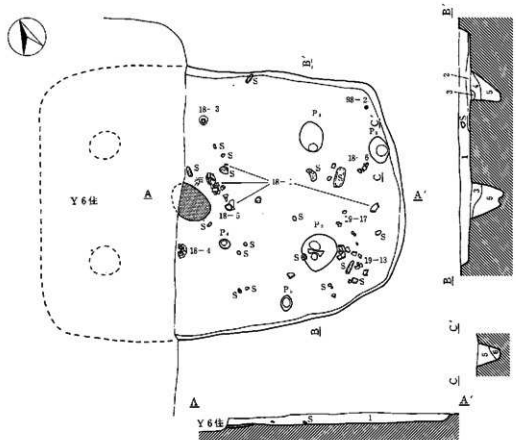


第18图 Y4号住居址出土遗物实测图

5) Y 5 号住居址

遺構 (第17図)

検出位置 Gう6・7、Gえ6・7、Gお6・7グリッド。**重複関係** Y 5号住居址に西壁、北壁・南壁の一部を破壊されている。D22号土坑址を破壊する。**平面形態** 短軸5.34mを測ると思われ、隅丸長方形を呈すると考えられる。主軸方位は、N-73.5°-Wを指すものと思われる。壁残高は12~25cmである。**床面の状態** 平坦で堅固な状態であった。ピットは5基検出され、P 1、P 2が主柱穴と思われる。他の主柱穴についてはY 6号住居址に破壊されるため、検出できていない。P 1は深さ67cm前後を測る。P 2はテラスを有し深さ73cm前後を測る。P 3は東壁中央付近に位置し、深さ52cm前後を測る。棟持ち柱の可能性もあるが詳細については不明である。P 4は小型で7cm前後を測る。P 5も小型で6cm前後を測る。**炉址** 住居中央付近に位置するも



- 1 赤褐色土 (10Y R 5) 粘質土。黒粒砂 (φ1-3mm)、炭化粒子 (φ1-3mm) 少量含む。
- 2 黒褐色土 (10Y R 5) 粘質土。黒粒砂 (φ1mm) 含む。全体的に粒子細かい。
- 3 暗褐色土 (10Y R 5) 粘質土。黄褐色粒子 (炭粒子) 含む。炭化砂 (φ1mm) 少量含む。
- 4 正褐色土 (10Y R 5) 粘質土。炭化粒子 (φ1-3mm) 少量含む。砂子集めて硬かい。
- 5 灰黄褐色土 (10Y R 5) 粘質土。炭化粒子 (φ2-5mm) 含む。黄褐色粒子 (炭粒) 含む。
- 6 暗褐色土 (10Y R 5) 粘質土。黄褐色ブロック (φ1-2cm) 少量含む。

第17図 Y 5号住居址実測図

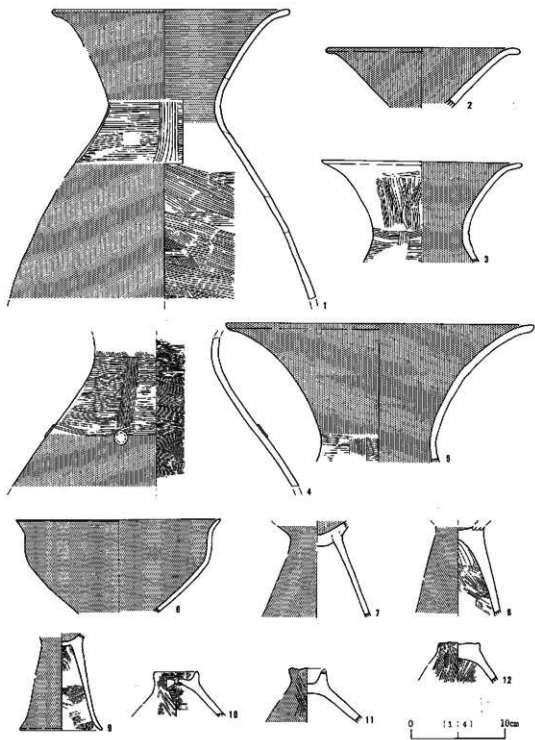
北西400.1m
1:100
0 2m

のと思われるが、Y 6号住居址に一部破壊されている。床面を掘りくぼめない地床炉で楕円形を呈するものと思われる。遺物の出土状況 比較的散漫な状態であり、覆土中からの出土が大半で中央付近や南東隅にやや集中していた。

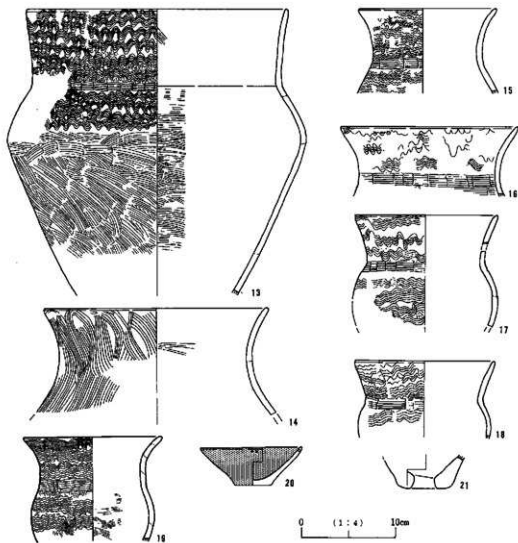
遺物 (第18・19・98図)

本住居址からは壺・甕・鉢・甌・蓋等の遺物が出土し、バラエティに富んでいる。貯蔵形態の壺には1、3～5があり、1は大型の壺で、頸部に横書きT字文を施し、口縁部が外反し、胴のはる器形を呈し、口縁から頸部にかけて内外面に赤色塗彩を施す。3は口縁部が外反し、口縁から頸部にかけて丁寧に鏡磨きが施されるが、赤色塗彩が摩滅しているものと思われる。4は頸部に横書きT字文を施した後、ボタン状貼り付けが行われる赤色塗彩の壺で、内面にハケ調整される。供献形態の高坏には、2、6～9があり、大型のものや小型のものがある。2、6は内外面赤色塗彩された高坏の坏部で、6についてはなだらかな稜を持ち、口縁部で外反する。7～9は高坏脚部で赤色塗彩が施される。蓋には10～12があり、11には外面赤色塗彩が施されている。10には天井部に3mmの穿孔を有する。煮沸形態の土器として13～18の甕があり、大型のもの(13、14)と小型のもの(15～19)がある。13は頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、胴部上半に最大径を持つ器形で、頸部に横書き簾状文の等間隔止めの後、口縁部と胴部上半に横書き波状文を丁字に施す。胴部以下は横調整が残っている。14は口縁部がゆるく外反する器形で、口縁から頸部にかけて横書き斜走文が、J字状あるいは、くの字状に施される。15は2連止め簾状文の甕で、乱雑な横書き波状文が施される。16は摩滅が激しく、横書き波状文がはっきりしない。頸部の横書き簾状文は2連止めである。17は胴部に最大径を有し、丸みを帯びている。台付き甕になるものと思われる。19は頸部横調整後、横書き簾状文の2連止めが施され、口縁部と胴部に横書き波状文が施される。什器形態として20の鉢があり、内外面に鏡磨きと赤色塗彩が施される。口縁部に2孔一対の緊縛孔を有する。21は甌である。98-2は石織である。

時期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第18图 Y5号住居址出土器物实测图

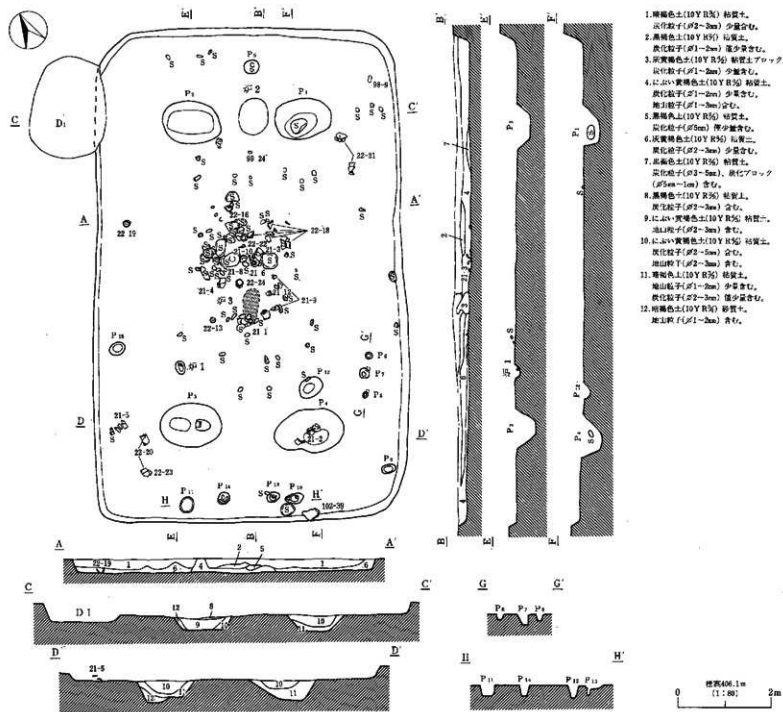


第19図 Y5号住居址出土遺物実測図

6) Y6号住居址

遺構 (第20図)

検出位置 Gい8、Gう6・7・8、Gお7・8・9グリッド。重複関係 D1号土坑址に西壁の一部を破壊される。Y5号住居址を破壊する。**平面形態** 長軸10.18m、短軸6.24mを測る大型の住居址で塚田遺跡IIの中で最大規模の住居址で、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-27°-Eを指す。壁残高は11~37cmである。**床面の状態** 平坦で堅固な状態であった。ピットは15基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は大型で深さ32cm前後を測る。P2は大型で深さ28cm前後を測る。P3は大型でテラスを有し、深さ44cm前後を測る。P4は大型で40cm前



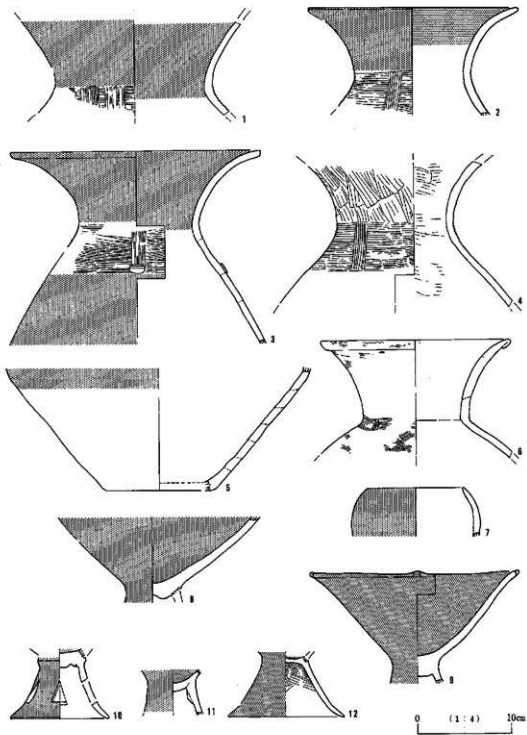
第20図 Y 6号住居址実測図

後を測る。P 5は北壁下の中間部に位置し、樺持ち柱と思われ深さ34cm前後を測る。P 6～P 8は東壁下やや南よりに3基並んで検出され、いずれも小型である。P 5は深さ13cm前後を測る。P 7は深さ22cm前後を測る。P 8は深さ20cm前後を測る。P 7とP 8は東側にオーバーハングしており、支柱穴の補助的な施設が想定できるかもしれない。P10、P11、P13、P14は南壁下に2基ずつ対になっており、入口施設と思われる。深さはP10がテラスを有し22cm前後、P11が23cm前後、P13がテラスを有し46cm前後、P14がテラスを有し44cm前後を測る。P11とP14で対になるというより、ピットの形態及び深さ等から勘案すると4対で入口を想定した方が良いのかも知れない。P12はP4の北側に位置し、深さ17cm前後を測る。P15は西壁下南よりに位置し、深さ23cm前後を測る。炉址 3基検出され、炉1はP3の北側に位置し、長軸30cm、短軸20cmで4cmのくぼみを有する楕円形の地床炉である。炉2はP1、P2の支柱穴間に位置し、長軸76cm、短軸60cmの楕円形を有する地床炉、炉3は中央付近に位置し、長軸70cm、短軸30cmの床面を張りくぼめない地床炉である。遺物の出土状況 比較的豊富な遺物量を持ち、住居址の中央床面にて廃棄された状態で出土している。土器の集中箇所にて、河原石がまとまったかたちで検出された。

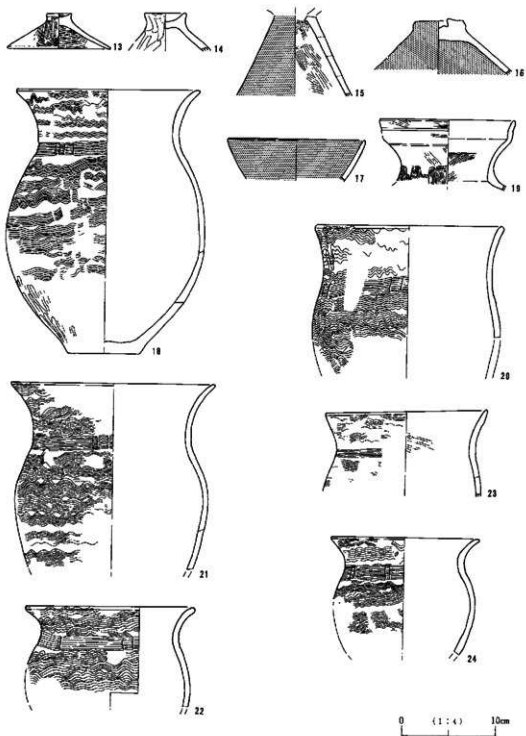
遺物（第21・22・98・99・102図）

本住居址からは多量の土器が出土しているが、復原個体としては多くはない。壺・甕・鉢・蓋等の遺物が出土している。貯蔵形態の壺には1～6があり、1、2は頸部に櫛描きT字文を施し、口縁部が外反し、口縁から頸部にかけて内外面に赤色塗彩を施す。3は口縁部が外反し、肩がはり、胴部が球状を呈すと思われる。頸部には櫛描きT字文を施した後、ボタン状貼り付けが施される。4は頸部に櫛調整がなされ赤色塗彩が見られない。5は胴部下半から底部の壺で、胴部下半の屈曲部より上位に赤色塗彩が施される。6は搬入品と思われる樽式の壺で、摩滅が激しいが口縁に折り返し口縁、頸部に櫛描き籠状文が施されている。7は広口壺と思われる。供献形態の高坏には、9～12、15があり、8、9は大型の坏部、10～12、15は小型の脚部である。10は三角透かし孔を有する。蓋には13、14、16があり13には丁寧な磨きが施されている。17は鉢で内外面ともに赤色塗彩されている。煮沸形態の土器として18～24の甕があり、18、20、21は口縁部がゆるく外反する箱清水式の典型の甕である。19は北陸系の法仏式の甕で胎土に石英粒子を多く含んでおり、色調も他の土器と異なるため搬入品と考えられる。成形は口縁部に横方向のハケ調整、頸部には縦方向のハケ調整が施される。20は頸部の屈曲が少なく、櫛描き籠状文の2連止めの後口縁部、胴部に櫛描き波状文が施される。22は胴部が球形を呈すと思われる甕で、台付き甕になるものと思われる。右上がりの櫛描き波状文が口縁部、胴部に施される。23は摩滅が激しい甕で頸部の籠状文や、口縁部・胴部の櫛描き波状文が不明な状態である。24は口縁部がゆるく外反する器形で胴部がやや球状を呈するものである。打製石鍬、凹石も出土している。

時期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第21图 Y 8号住居址出土文物实测图



第22图 Y6号住居址出土遗物实测图

7) Y 7号住居址

遺構 (第23・24図)

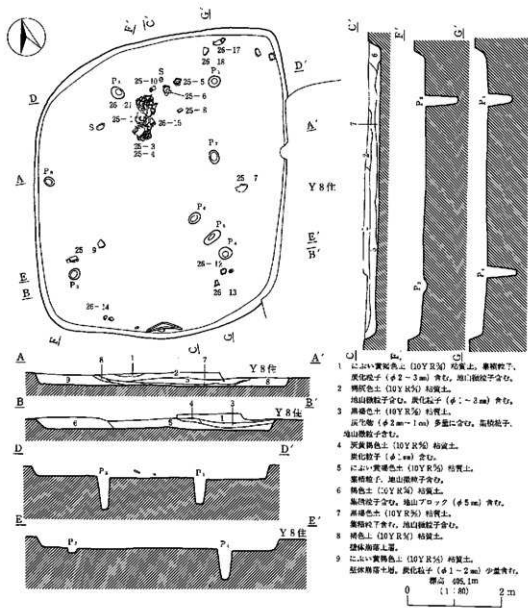
検出位置 Gあ6・7、Gい6・7、Gう6・7グリッド。**重複関係** Y 8・34号住居址に東壁、南壁の一部を破壊される。**平面形態** 長軸6.18m、短軸5.14mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-17°-Eを指す。壁残高は18~40cmである。**床面の状態** 平坦で堅固な状態であった。ピットは8基検出され、P 1~P 2、P 4が支柱穴と思われる。P 1は深さ50cm前後を測る。P 2は深さ28cm前後を測る。P 3は南西隅に位置し、深さ6cm前後を測る。P 4は深さ61cm前後を測る。P 5は深さ28cm前後を測る。P 6は深さ13cm前後を測る。P 7はP 1とP 4の中間に位置し、深さ28cm前後を測る。P 8は西壁中央に位置し、深さ15cm前後を測る。南壁下中央に位置し、深さ4cm前後を測る落ち込みがあり、入口施設に関連するものと思われる。支柱穴は床面を精査した結果3基のピットが検出されたのみであった。**炉址** P 1とP 2の支柱穴間に位置する。長軸40cm、短軸30cmで7cmのくぼみを有する楕円形の埋竈炉である。25-6の壺の底部が正位に埋設された状態であった。**遺物の出土状況** 比較的豊富な遺物量を持ち、炉の周辺にて床面上に完形に近い土器が集中していた他は覆土からの出土である。

遺物 (第25・26図)

本住居址からは壺・甕・高坏・鉢・蓋・紡錘車等の遺物が出土しており、バラエティに富んでいる。貯蔵形態の壺には1、2、4~9があり、1、2、4、5は外面の赤色塗彩が摩滅により剥落していると思われる。頸部に栴描き丁字文を施し、口縁部が外反する器形を早する。4は口縁部が外反し、折り返し口縁となっている。壺の底部には6~9があり、外面全体に赤色塗彩を施す7、8と胴部下半の屈曲部以下は、赤色塗彩が施されない9がある。6は埋竈炉のが体土器として使用されていたもので、赤色塗彩が剥落したものと思われる。供獻形態として高坏と広口壺があり、11は外面と内面頸部まで赤色塗彩が施される。14は小型の高坏脚部で、外面赤色塗彩が施されている。13、14はやや大型の高坏脚部で、外面に赤色塗彩が施される。13には輪積み痕が残っている。煮沸形態の土器として3、16、17、22の甕があり、16は外面に縦方向にハケ調整を施し、頸部に栴描き簾状文の2連止めの後、口縁部と胴部に栴描き波状文を施す大型の甕である。胴部下半は栴描き波状文は施されない。17は摩滅が激しく調整が不明であるが、頸部に栴描き簾状文、口縁部と胴部上半に栴描き波状文を施す口縁端部が内湾する甕である。胎土が白みがかかり搬入品のように思われる。19、23は甕で外面にハケ調整が施される。21は焼成後に穿孔されたもので、甕に転用されたものと思われる。内外面に荒磨きが施されている。20は蓋で



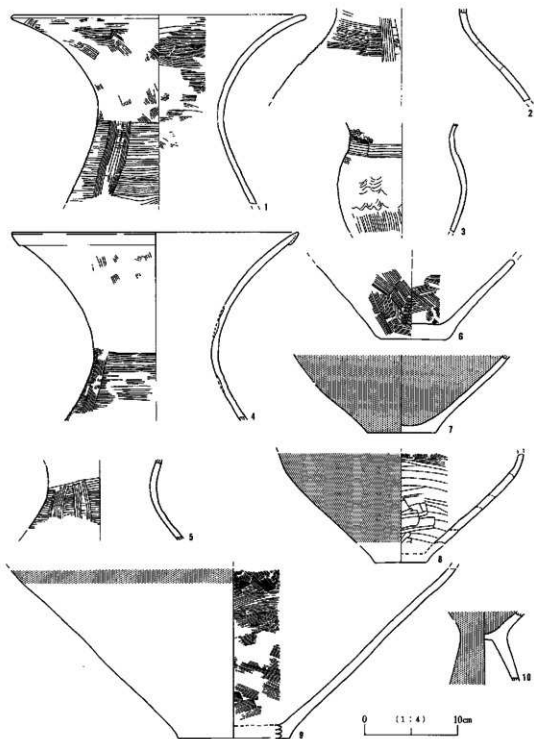
第29図 Y 7号住居址炉址実測図



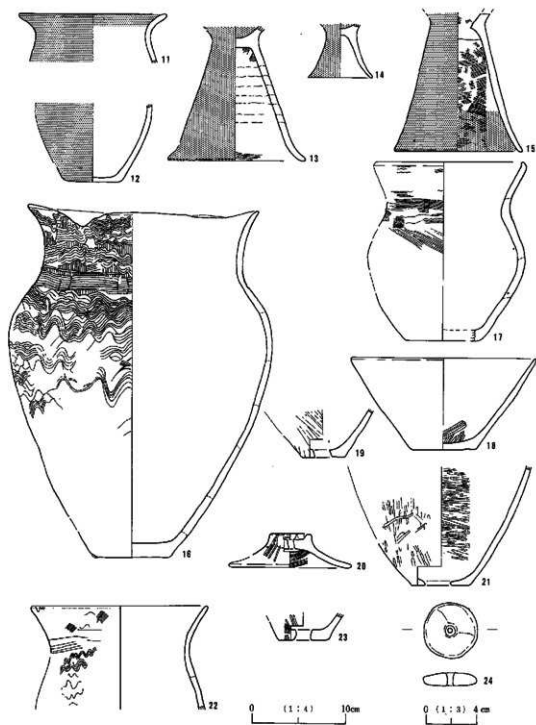
第24図 Y 7号住居址実測図

天井部に孔を有する。24は土製の紡錘車である。重量は21.5gを測る。

時期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第25图 Y7号住居址出土遗物实测图

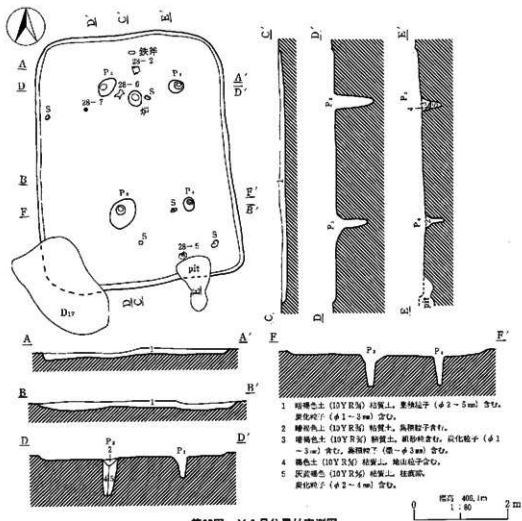


第26图 Y7号住居址出土物実測图

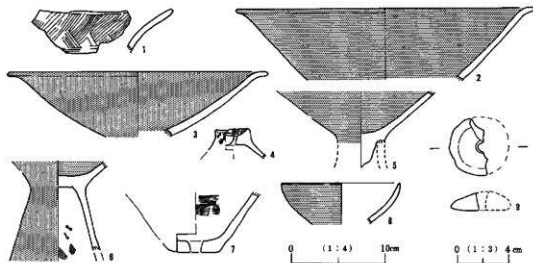
8) Y 8号住居址

遺構 (第27図)

検出位置 GⅡ5・6、GⅢ5・6・7グリッド。重複関係 Y34号住居址、D17号土坑址に西壁、南壁の一部を破壊される。Y7号住居址を破壊する。平面形態 長軸5.1m、短軸3.88mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-6.5°-Eを指す。壁残高は7~14cmである。床面の状態 平地ではあるが堅固な面は部分的に見られただけで、全体的に軟質な状態であった。ピットは4基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は深さ45cm前後を測る。P2は深さ68cm前後を測る。P3は人型で、深さ64cm前後を測る。P4は深さ56cm前後を測る。P5から柱穴跡が確認された。炉址 P1とP2の主柱穴内側に位置する。長軸35cm、短軸25cmで3cmのくぼみを有する楕円形の地床炉である。遺物の出土状況 比較的散漫な状態で、遺物量は少な



第27図 Y 8号住居址実測図



第28図 Y8号住居址出土遺物実測図

く覆上中からの出土遺物が主体であり、住居址の検出段階で鉄斧が出土した。

遺物 (第28・101図)

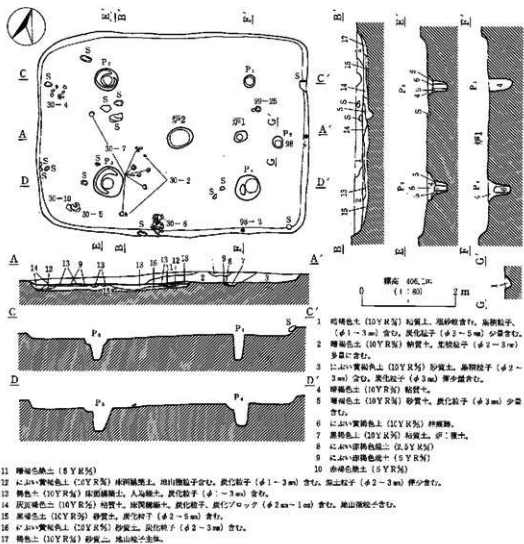
本住居址からは甕・壺・高坏・鉢・甌・紡錘車等の遺物が出土している。実測可能個体となるものは、非常に少ない。煮沸形態では、1の甕の口縁があり、衝描き斜走文が施される。供献形態として2、3、5、6の高坏があり外面に赤色塗彩が施され、坏部内面にも赤色塗彩される。2、3は坏部に稜を持たず外反し、口縁が水平に屈曲する。5は坏部と脚部がソケット結合になると思われる。7は甌で、外面になでの後、寛磨きが施され、内面にはハケ調整の後、寛磨きが施される。8は什器形態の鉢で、摩擦が激しいが外面に赤色塗彩が残っている。内面は、赤色塗彩が剥落したものと思われる。9は土製の紡錘車で、半分が失われている。

時期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

9) Y 9号住居址

遺構 (第29図)

検出位置 Fこ8・9、Gあ7・8・9グリッド。重複関係 Y10・16号住居址を破壊する。
平面形態 長軸5.54m、短軸4.06mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-73°-Eを指す。壁残高は9-18cmである。**床面の状態** 平坦で全体的に叩き占めた状態で、堅固な床面であった。ピットは5基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は他の主柱穴と異なり、小型で深さ50cm前後を測る。P2はテラスを有し深さ41cm前後を測る。P3はテラスを有し、深さ48cm前後を測る。P4はテラスを有し、深さ49cm前後を測る。対角線上に1:2:1の割合で主柱穴、竪穴がプランニングされている。P5は東壁下中央付近に位置し、深さ49cm前後を測る

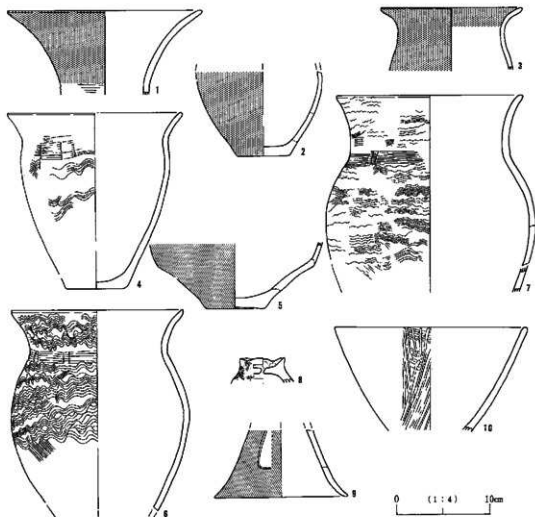


第29図 Y 9号住居址実測図

様持ち柱と思われる。炉址 2基検出され、P1とP4の主柱穴間内側に位置する炉1と中央付近に位置する炉2がある。炉1は長軸30cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さ8cmの地床炉であった。被熱により焼土が厚く堆積する。炉2は長軸60cm、短軸50cmの楕円形を呈し、掘り込みを持たない地床炉であった。遺物の出土状況 比較的散漫な状態で、覆土中からの出土遺物が多く、住居址床面上上の遺物は多くはない。

遺物 (第30・98・99図)

本住居址からは壺・甕・高坏等の遺物が出土している。実測可能個体となるものは、非常に少ない。貯蔵形態では、1、5があり1は外反する口縁の甕で、頸部が細い。5は外面が赤色塗彩される壺の胴部下半から底部である。供献形態では2、3、9があり、2、3は広口壺で内面頰



第30図 Y9号住居址出土遺物実測図

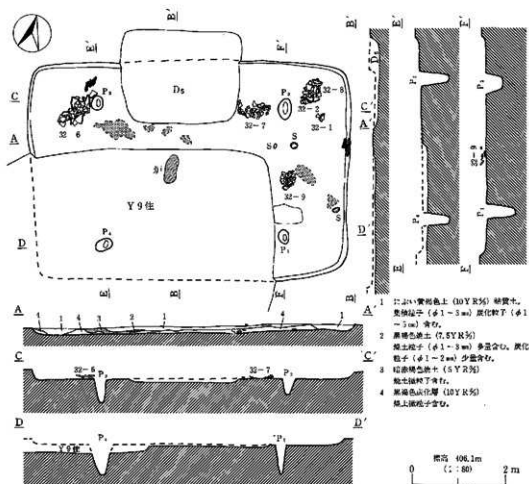
部上半に赤色塗彩される。9は三角透かし孔を持つ高坏脚部で、外面に赤色塗彩される。煮沸形態では6、7の甕があり、7は胴部が球状を呈する。8は蓋のつまみ部で天井部に孔を有する。10は鉢形を呈し、内外面に構調整された後鏡磨きが施される。甕の可能性もある。

時 期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

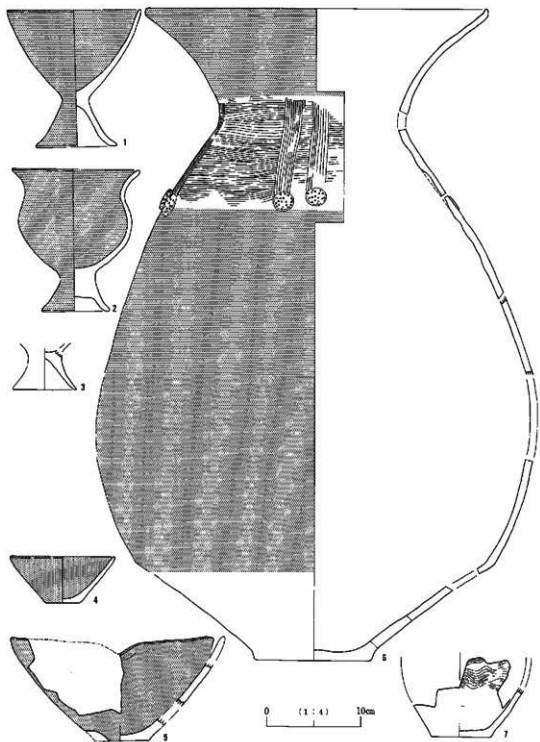
10) Y10号住居址

遺 構 (第31図)

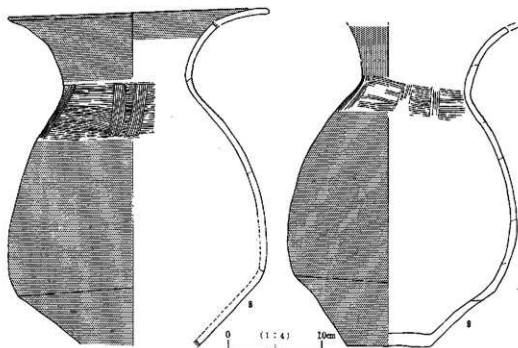
検出位置 Fけ7、Fこ7・8・9、Gあ7・8グリッド。重複関係 Y9・16号住居址、D5号土坑址に東壁、南壁の一部を破壊される。平面形態 長軸6.58m、短軸4.52mを測るものと思われ、長方形に近い隅丸長方形を呈するものと考えられる。主軸方位は、 $N-72^{\circ}-E$ を指すものと思われる。壁残高は6~12cmである。床面の状態 平直な状態で全体的に堅固な床面で



第31図 Y10号住居址実測図



第32图 Y10号住居址出土遗物实测图



第33図 Y10号住居址出土遺物実測図

あった。ピットは4基検出され、P1～P4が支柱穴と思われ、全体的に小型である。P1は深さ61cm前後を測る。P2は深さ50cm前後を測る。P3は深さ57cm前後を測る。P4はY9号住居址の床面下より検出されたため、深さ45cm前後を測る。P1～P4は整然とした長方形配置を呈している。床面上に焼土が何箇所か検出され、覆土中に炭化物や焼土粒子が混入し、住居廃絶後に焼失したものと考えられる。炉址 住居址中央付近に検出され、Y9号住居址に破壊されているため、火床の焼土のみ検出した。詳細は不明であるが、長軸60cm、短軸20cmの楕円形を呈する地床炉である。遺物の出土状況 比較的住居址の支柱穴付近の床面上に、大型の壺などが集中して出土した。

遺物 (第32・33図)

本住居址からは煮・甕・高坏・鉢等の遺物が出土している。供献形態では、1～3の高坏、台付き鉢があり、1、2は内外面赤色塗彩が施されている。什器形態では、4、5があり、4は内外面に赤色塗彩される鉢、5は内外面赤色塗彩され、片口を有する大型の鉢である。貯蔵形態では、6、8、9があり6は受け口状の口縁、頸部に横描きT字文が2対の後、ボタン状貼り付けがなされる大型の甕である。胴部が球状を呈する。8、9は外面に赤色塗彩され、頸部に横描きT字文を有する壺である。

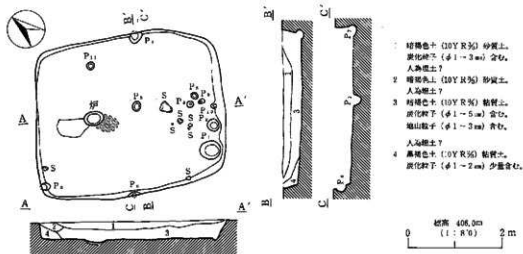
時期 本住居址の所属時期は、以上の遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

11) Y11号住居址

遺構 (第34図)

検出位置 Fき8・9、Gく8・9グリッド。**重複関係** Y35号住居址を破壊する。平面形態長軸3.7m、短軸3.22mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-48°-Wを指す。壁残高は22~35cmである。床面の状態 平坦で全体的に堅固な状態ではあるが、北側はやや軟弱な状態。ピットは11基検出され、P1は南東隅に位置し、深さ22cm前後を測る。貯蔵穴かと思われる。P2は南壁下中央付近に位置し、深さ16cm前後を測る。P3は住居中央付近に位置し、深さ14cm前後を測る。P4は小型で南壁側に位置し、深さ10cm前後を測る。P5は小型でP4の脇に位置し、深さ7cm前後を測る。P6は西壁中央に位置する張り出しピットで、住居址検出面から26cmを測る。P7は東壁中央に位置する張り出しピットで、検出面から深さ47cmを測る。P8は北西壁隅下に位置し、深さ14cmを測る。P9は南壁下に位置し、深さ14cmを測る。P10は南壁中央下に位置し、深さ10cmを測る。P11は深さ16cmを測る。P2、P10が入口施設に関連するものと思われる。**炉址** 北偏中央部に位置し長軸40cm、短軸30cmの楕円形を呈し、深さ7cmの地床炉であった。被熱により焼土が堅くなっている。**遺物の出土状況** 非常に散漫の状態で、出土遺物が少なく、図示できるものはない。

時期 出土遺物は少なく、時期決定できるものはないが、弥生時代後期後半と思われる。

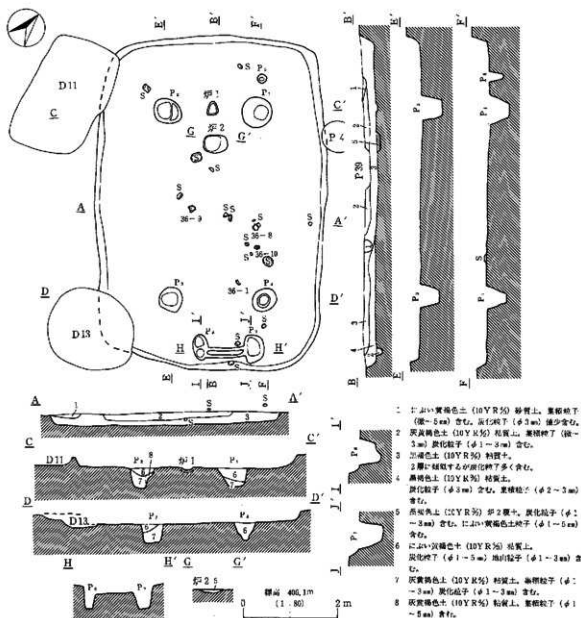


第34図 Y11号住居址実測図

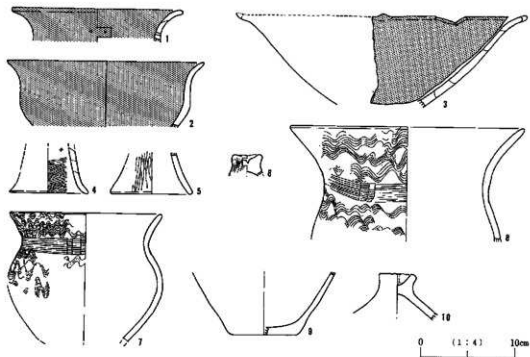
12) Y12号住居址

遺構 (第35図)

検出位置 Gう3・4・5、Gえ3・4・5グリッド。重複関係 D11・13号土坑比、P4、P39に破壊される。平面形態 長軸6.76m、短軸4.68mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-43°-Wを指す。壁残高は0~34cmである。床面の状態 平坦で堅固な状態。ピットは



第35図 Y12号住居址実測図



第36図 Y12号住居址出土遺物実測図

7基検出され、P1～P4が主柱穴と思われる。P1は深さ38cm前後を測る。P2はテラスを有し、深さ39cm前後を測る。P3は深さ40cm前後を測る。P4は深さ43cm前後を測る。P5は小型でP1の北側に位置し、深さ30cm前後を測る。P6とP7は溝によって連結されたもので、南壁下中央に位置する入口施設と思われ、P6はテラスを有し、深さ44cm、P7は深さ49cmを測る。

炉址 2基検出され、P1とP2の主柱穴間に位置する炉1とその南側に位置する炉2である。炉1は長軸28cm、短軸21cmの楕円形を呈し、深さ3cmのくぼみを有する地床炉で、被熱により変色している。炉2は長軸52cm、短軸40cmの楕円形を呈し、深さ2cmのくぼみを有する地床炉である。

遺物の出土状況 散漫な状態で、出土遺物が多いが、ほとんどが覆土中からの出土であり、図示できるものは少ない。

遺物 (第36図)

本住居址からは、壺・甕・高坏・蓋等の弥生土器が出土している。1は貯蔵形態の壺、2～5は供献形態の高坏、7～9は煮沸形態の甕である。7は胴部球形を呈し、台付き甕になるものと思われる。10は蓋で外面に指頭痕がある。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

13) Y13号住居址

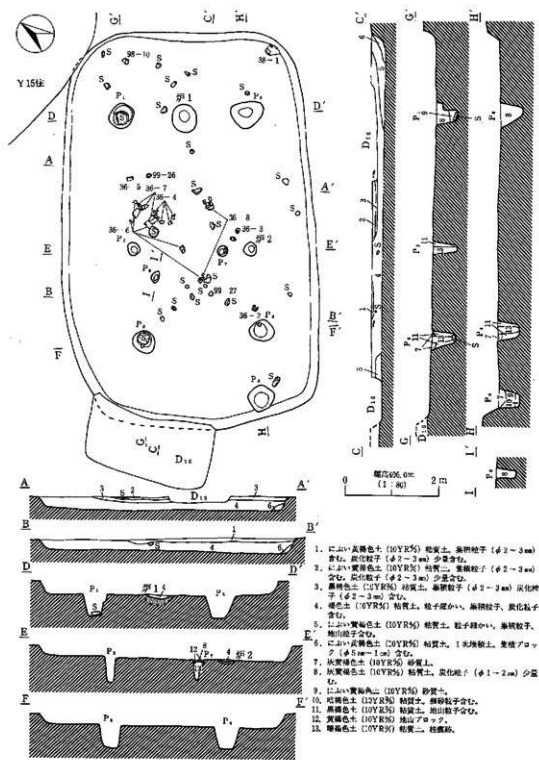
遺構 (第37図)

検出位置 Fく5、Fけ4・5・6、Fこ5・6グリッド。**重複関係** Y15号住居址、D10・15・16号土坑址に北東隅、南壁の一部を破壊される。Y1・22号住居址を破壊する。**平面形態** 長軸7.96m、短軸4.98mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-51°-Eを指す。壁残高は0~34cmである。**床面の状態** 平坦で堅固な状態。ピットは8基検出され、P1、P3~P5が主柱穴と思われる。P1はテラスを有し、深さ45cm前後を測る。P2はP1とP3の主柱穴の中間に位置し、小型で深さ48cm前後を測る。P3は深さ47cm前後を測る。P4は深さ43cm前後を測る。P5は深さ48cm前後を測る。P6はP2の南側に位置し、小型で深さ45cm前後を測る。P7は炉2の西側に位置し、小型でテラスを有し、深さ41cm前後を測る。P8は南壁下に位置し、深さ44cm前後を測る。P2とP7は間仕切りの施設、P8は貯蔵穴と思われる。P1とP10の底面には河原石が据えられていた。P2、P3、P4からは、柱痕跡が確認できた。**炉址** 2基検出され、P1とP5の主柱穴間に位置する炉1とP7の東側に位置する炉2である。炉1は長軸60cm、短軸48cmの楕円形を呈し、深さ5cmのくぼみを有する地床炉で、被熱による焼け込みが強い。炉2は24cmの円形を呈し、深さ3cmのくぼみを有する地床炉で、炉1同様に焼け込みが強い。**遺物の出土状況** 散漫な状態で、出土遺物が多いが、ほとんどが覆土中からの出土で、住居址中央付近から比較的まとまって出土している。

遺物 (第38・98・99図)

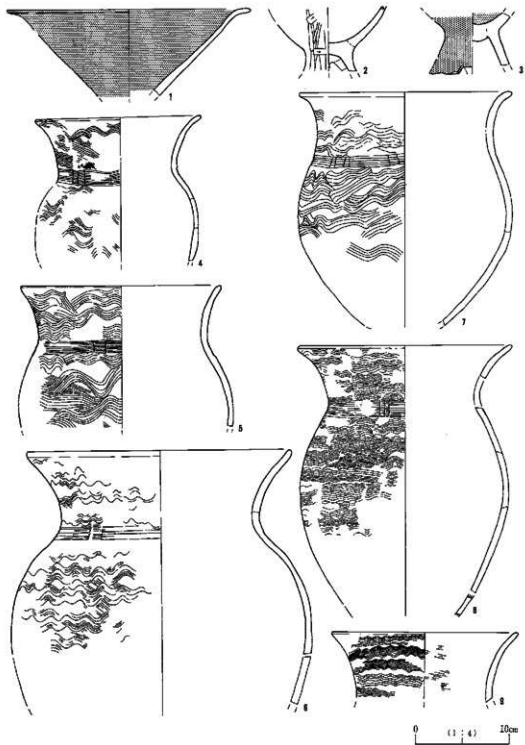
本住居址からは、壺・甕・高坏等の弥生土器が出土している。1~3は供獻形態の高坏で、1は稜をもたず口縁部が外反し、水平口縁を呈する。2は赤色塗彩の見られない高坏、3は内外面に赤色塗彩の施される高坏である。4~9は煮沸形態の甕で、4は胴部が球状を呈し、口縁は外反する。胎土は白みを帯びている。5は胴部が球状を呈し、口縁部と胴部に櫛描き波状文の施文後に頸部櫛描き篋状文が施される。6は球形胴を呈している磨滅が激しい大型の甕である。7は胴部球状を呈し、乱雑な櫛描き波状文が口縁部と胴部に施される。8は口縁部と胴部に櫛描き波状文が施されるが、断続的に施されている。9は口縁部が伸長化した甕である。石器では98-10、98-13、99-26、99-27があり、磨製石包丁、凹石などが出土している。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。



1. 上より黄褐色土 (10YR5/6) 粘質土、炭灰粒子 (φ2-3mm) 含む。炭灰粒子 (φ2-3mm) 少量含む。
2. 上より黄褐色土 (10YR5/6) 粘質土、炭灰粒子 (φ2-3mm) 含む。炭灰粒子 (φ2-3mm) 少量含む。
3. 黒褐色土 (10YR3/6) 粘質土、炭灰粒子 (φ2-3mm) 炭化粒子 (φ2-3mm) 含む。
4. 褐色土 (10YR5/6) 粘質土、粒子細かい、炭灰粒子、炭化粒子含む。
5. 上より黄褐色土 (10YR5/6) 粘質土、粒子細かい、炭灰粒子、炭山粒子含む。
6. 上より黄褐色土 (10YR5/6) 粘質土、1cm厚粘土、炭灰アロップ (φ5mm-1cm) 含む。
7. 灰黄褐色土 (10YR5/6) 砂質土。
8. 灰黄褐色土 (10YR5/6) 粘質土、炭化粒子 (φ1-2mm) 少量含む。
9. 上より黄褐色土 (10YR5/6) 砂質土。
10. 灰褐色土 (10YR3/6) 粘質土、黒砂粒子含む。
11. 黒褐色土 (10YR3/6) 粘質土、炭山粒子含む。
12. 黄褐色土 (10YR5/6) 地山アロップ。
13. 黒褐色土 (10YR3/6) 粘質土、粒状砂。

第37図 Y13号住居址実測図

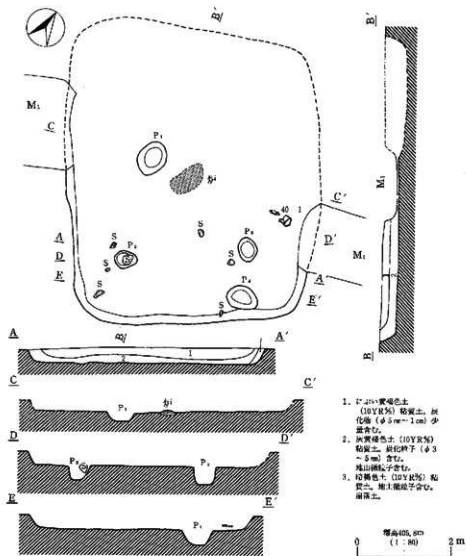


第38图 Y13号住居址出土遗物实图

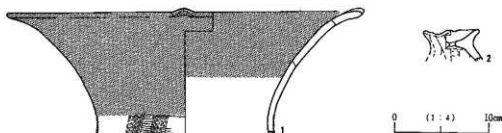
14) Y14号住居址

遺構 (第39図)

検出位置 Kき1、Kく1・2、Fく10グリッド。**重複関係** M1号溝状遺構に東壁、西壁の一部を破壊される。M2号溝状遺構を破壊する。**平面形態** 短軸4.98mを測るものと思われる。隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位は不明である。壁残高は0～31cmを測る。**床面の状態** 平坦で堅固な状態であるが、住居中央から北側は軟質な状態で、平面プラン及び北壁、東壁・西壁の一部は確認できていない。ピットは4基検出され、P2、P3が主柱穴配置を呈すが、対面する主柱穴は確認できなかった。P1は深さ16cm前後を測る。P2は深さ28cm前後を測る。



第39図 Y14号住居址実測図



第40図 Y14号住居址出土遺物実測図

P3は深さ36cm前後を測る。P4は深さ25cm前後を測る。P4は貯蔵穴の可能性もある。炉址住居中央付近に位置すると思われる、長軸78cm、短軸32cmの楕円形を呈し、くぼみのない地床炉である。遺物の出土状況 散漫な状態で、出土遺物は少ない。

遺物 (第40・100図)

壺・甕等の弥生土器が出土し、1は山形突起を有する壺、2は蓋のつまみ部である。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半と思われる。

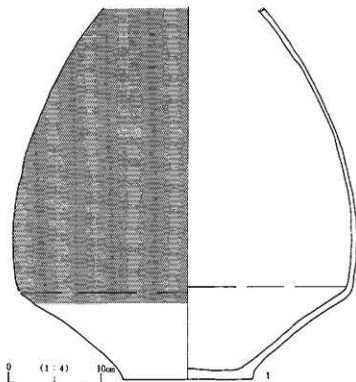
15) Y15号住居址

遺構 (第42図)

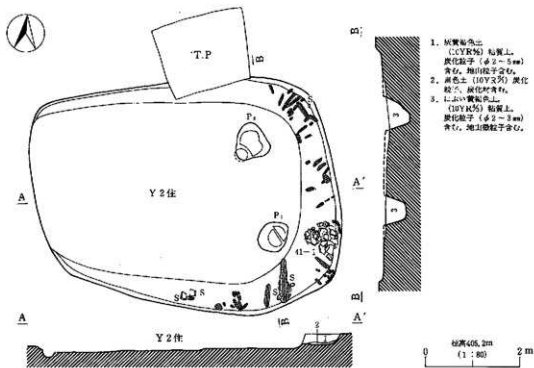
検出位置 Fき5・6、Fく5・6グリッド。重複関係

Y2号住居址に住居中央部を破壊される。Y13・22号住居址を破壊する。平面形態

長軸6.32m、短軸4.62mを測る。隅丸長方形を早する。主軸方位は、N-87°-Eを指す。壁残高は5-13cmを測る。床面の状態 平坦でやや堅固な状態である。当初Y2号住居址と同一遺構と考えていたが、Y2号住居址が床面を破壊していると判明したため、別遺構と判断した。本址は住居廃絶後に焼失したもの



第41図 Y15号住居址出土遺物実測図



第42図 Y15号住居址実測図

と思われる。ピットは2基検出でき、主柱穴と思われる。P1はテラスを有し、深さ43cm前後を測る。P2はテラスを有し、深さ52cm前後を測る。炉址 検出されず、Y2号住居址に破壊されてしまったと思われる。遺物の出土状況 散漫な状態であったが、東壁下に41-1の壺が潰れて出土した。

遺物 (第41回)

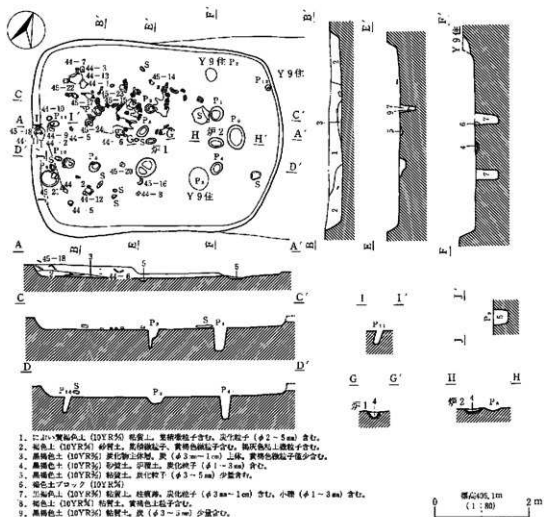
壺・甕等の弥生土器が出土しているが、量は少ない。1は外面赤色塗彩される胴下半に縁を持つ壺である。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

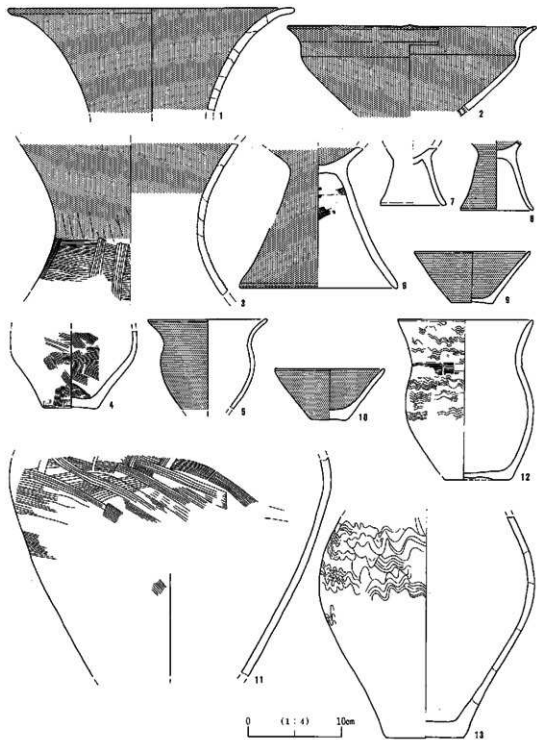
16) Y16号住居址

遺構 (第43回)

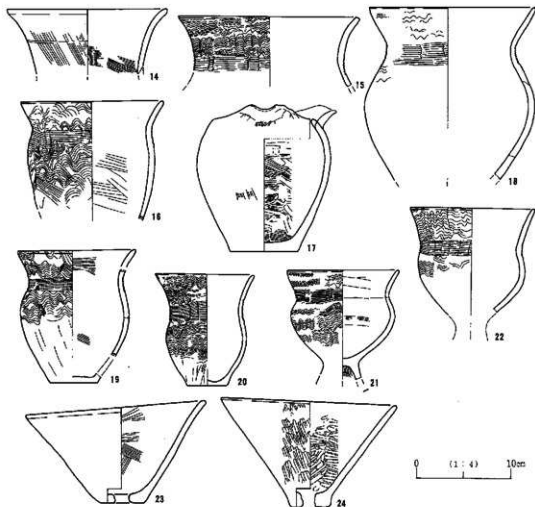
検出位置 Fこ8・9、Gあ8・9グリッド。重複関係 Y9号住居址に東壁、北壁の一部を破壊されている。Y10号住居址を破壊する。平面形態 長軸5m、短軸3.74mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-69°-Eを指す。壁残高は6~36cmを測る。床面の状態 平坦で堅固な状態。ピットは12基検出され、P1、P2、P3、P4、P7、P8の6主柱穴と思われ



る。P1は深さ49cm前後を測る。P2はテラスを有し、深さ41cm前後を測る。P3はテラスを有し、深さ14cm前後を測る。P4は深さ50cm前後を測る。P5は住居中央に位置し、深さ5cm前後を測る。P6は深さ4cm前後を測る。P7は深さ34cm前後を測る。P8は深さ44cm前後を測る。P9は西壁下に位置し、オーバーハングしている。深さ35cm前後を測る。P10とP11西壁中央下に位置し、深さ29cm、21cmを測る入口施設と思われる。炉址 2基検出され、住居中央付近に位置する炉1、P1とP4の支柱穴間に位置する炉2である。炉1は長軸20cm、短軸11cmの楕円形を呈し、深さ12cmのくぼみを有する地床炉である。炉2は長軸32cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さ6cmのくぼみを有する地床炉で、焼け込みが強い。遺物の出土状況 西側の住居覆土中から多く出土遺物があった。



第44图 Y16号住居址出土物实测图



第45図 Y16号住居址出土遺物実測図

遺物 (第44・45図)

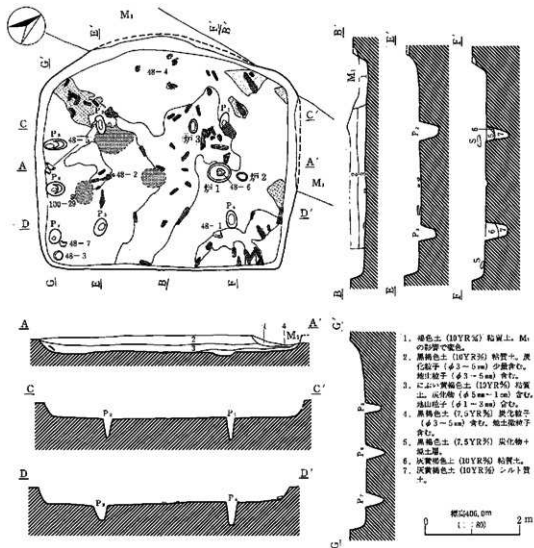
本住居址からは、壺・甕・高環・鉢・甌等の弥生土器が出土しており、バラエティに富んでいる。貯蔵形態の壺には1、3、4があり、口縁が外反する器形を呈し、3には頸部ハケ調整が施され、横書きT字文が施される。2、6～8は供献形態の高環で、2は環部下位で稜を持ち、山形突起を有する。6は大型の高環の脚部で外面に赤色塗彩される。5は広口甕で、外面赤色塗彩される。什器形態には10の鉢がある。11～16、18は煮沸形態の甕で、11は横書き斜走文が縦位羽状に施される。17は片口を有する鉢である。19、20は小型甕である。21、22は台付き甕、23、24は甌である。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

17) Y17号住居址

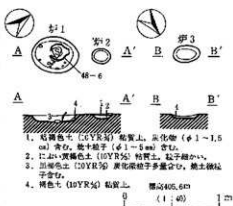
遺構 (第46・47図)

検出位置 Fお7、Fか6・7・8、Fき6・7・8グリッド。重複関係 M1号溝状遺構に東壁・北壁の一部を破壊されている。Y3号住居址を破壊する。平面形態 長軸5.1m、短軸4.54mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-33°-Eを指す。壁残高は14-35cmを測る。床面の状態 平坦で堅固な状態。ピットは7基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は深さ49cm前後を測る。P2は深さ38cm前後を測る。P3は深さ30cm前後を測る。P4は深さ48cm前後を測る。P5、P6は西壁下に対になって検出された入口施設と思われる。P5はテラス

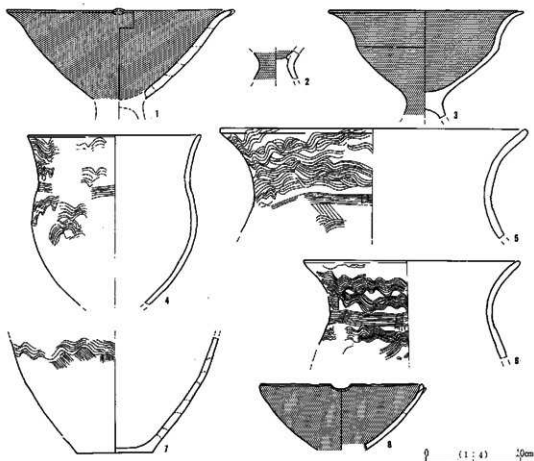


第48図 Y17号住居址実測図

を持ち、深さ34cm前後を測る。P6もテラスを有し、深さ40cm前後を測る。P7は南西隅に位置し、深さ49cm前後を測る。覆上中や床面に焼土及び炭化物、炭化材が多く検出されており、住居廃絶後に、焼失したものであると思われる。炉址 3基検出され、P1とP4の主柱穴間内側に位置する炉1、主柱穴間外側に位置する炉2、P1の住居社中央よりに位置する炉3である。炉1は長軸50cm、短軸38cmの楕円形を呈し、深さ6cmのくぼみを有し48-6の甕を逆位に埋設した埴輪炉である。炉2は長軸20cm、短軸16cmの楕円形を呈し、深さ5cmのくぼみを有する地床炉で、被熱が少ない。炉3は長軸28cm、短軸18cmの楕円形を呈し、



第47図 Y17号住居址炉址実測図



第48図 Y17号住居址出土遺物実測図

深さ3cmのくぼみを有する地床炉で、炉2同様被熱が少ない。遺物の出土状況 覆土中からの出土が多く、散漫な状態であった。

遺物 (第48・100図)

本住居址からは、壺・甕・高坏等の弥生土器が出土しているが、実測可能個体は少ない。1～3は供献形態の高坏で、1は坏部に稜を持たない。3は坏部下位で稜を持つ。4～7は煮沸形態の甕で、4は胴部球状を呈する。8は什器形態の鉢で、片口を有する。石器では、凹石も出土している。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

18) Y18号住居址

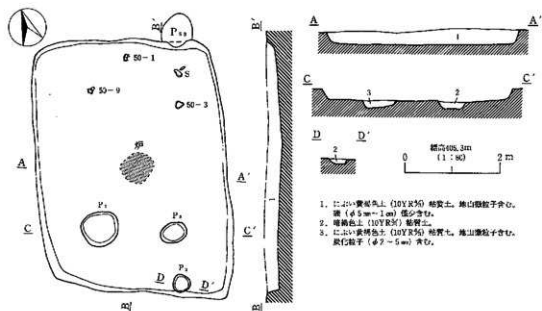
遺構 (第49図)

検出位置 Bあ5・6、Bい5・6グリッド。塚田遺跡IIの調査地の南東に位置し、集落構成から見ると、はずれる場所に位置している。重複関係 P53に北壁の一部を破壊されている。平面形態 長軸5.2m、短軸3.84mを測り、長方形を呈する。主軸方位は、N-15.5°-Eを指す。壁残高は12～33cmを測る。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な状態ではない。ピットは3基検出され、P1、P2が主柱穴と思われるが、対面する主柱穴は検出されていない。P1は深さ17cm前後を測る。P2は深さ14cm前後を測る。P3は深さ11cm前後を測る。炉址 住居床面中央付近に位置し、長軸65cm、短軸60cmの楕円形を呈し、床面が被熱で焼けた状態の地床炉である。遺物の出土状況 覆土中からの出土遺物が多いわけではあるが、散漫な状態であった。甕の出土が多い状態であった。

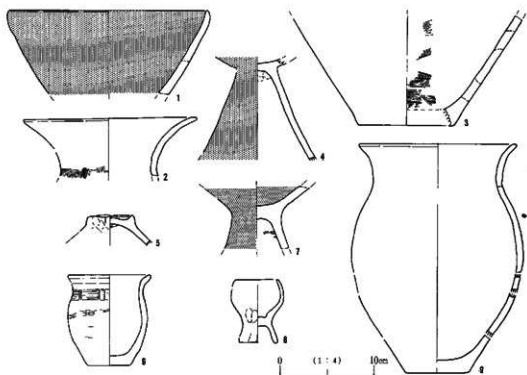
遺物 (第50図)

本住居址からは、壺・甕・高坏・小型甕等の弥生土器が出土しているが、遺物量も少なく実測可能個体は少ない。1、4、7は供献形態の高坏で、1は坏部に稜を持たず、口縁部で直立する。内外面に赤色塗彩を有する。4は高坏の脚部で摩滅しているが、内外面に赤色塗彩が残る。貯蔵形態には2、3の壺があり共に赤色塗彩が見られない。2は頸部に櫛描きT字文が施される壺で、口縁部が外反する。3は内面ハケ調整される胴部下位である。5は壺で外面になで調整と指頭痕が残る。6は摩滅の激しい小型甕で、頸部に櫛描き縷状文の2連止めが行われている。8は手捏土器の壺で、外面になで調整と指頭痕が残る。9は煮沸形態の甕であるが、外面に櫛描き波状文、櫛描き縷状文が施されていない。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。



第49図 Y18号住居址実測図

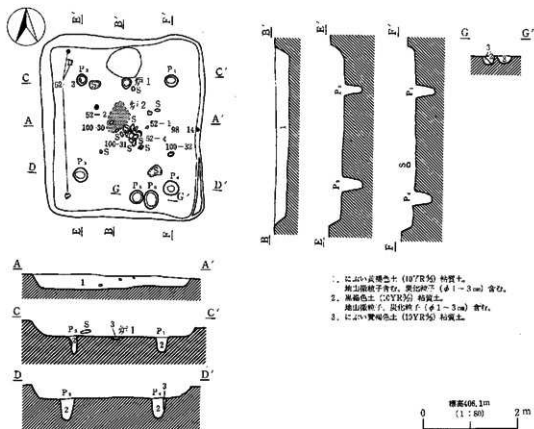


第50図 Y18号住居址出土遺物実測図

19) Y19号住居址

遺構 (第51図)

検出位置 Fこ1・2、Gあ1・2グリッド。**重複関係** なし。**平面形態** 長軸3.42m、短軸3mを測る隅丸方形を呈する小型住居である。主軸方位は、N-2°-Eを指す。壁残高は3-30cmを測る。**床面の状態** 平坦で、堅固な状態。ピットは6基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は深さ30cm前後、P2は深さ36cm前後、P3は深さ42cm前後、P4は深さ40cm前後、P5は深さ19cm前後、P6は深さ15cm前後を測る。P5、P6は南壁下に並んだ状態で検出され、入口施設とも思われる。南東壁隅にテラスを有し、住居構造に意味があったものとも思われる。北壁中央床面に炭化物の集中した範囲が確認されている。炉址 2基検出され、P1、P2の主柱穴間に位置する炉1と、中央付近に位置する炉2である。炉1は長軸22cm、短軸18cm、深さ5cmで、楕円形を呈し、被熱で焼け込みが激しい地床炉である。炉2は床面が被熱で焼けた状態の地床炉で、長軸63cm、短軸40cmの楕円形を呈している。**遺物の出土状況** 覆土中から遺物が出土し、散漫な状態であった。

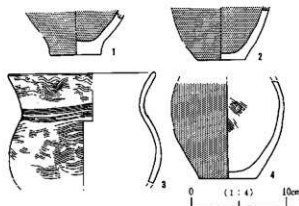


第51図 Y19号住居址実測図

遺物 (第52・100図)

本住居址からは、壺・甕等の弥生土器が出土しているが、遺物量も少なく実測可能個体は少ない。1、2、4は貯蔵形態の甕で、1、2は内外面に赤色塗彩されている底部である。4は外面のみ赤色塗彩を有する。3は煮沸形態の甕で、胴部球状に膨らむものである。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。



第52図 Y16号住居址出土遺物実測図

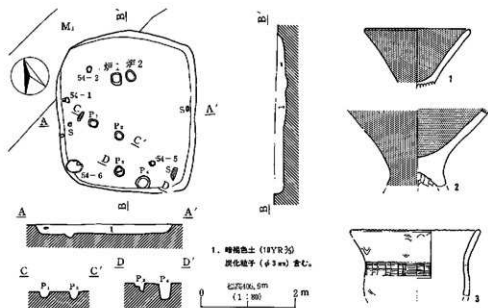
20) Y20号住居址

遺構 (第53図)

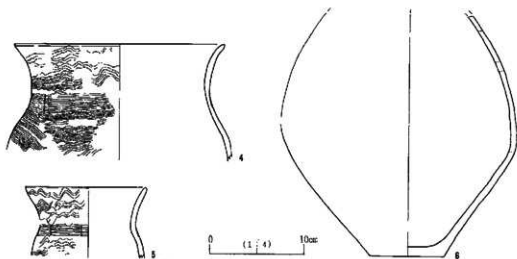
検出位置 Fお4・5、Fか5グリッド。重複関係 M1号溝状遺構に北壁・西壁の一部を破壊される。平面形態 長軸3.8m、短軸2.7mを測る隅丸方形を呈する小型住居である。主軸方位は、N-17.5°-Eを指す。壁残高は0-23cmを測る。床面の状態 平坦で、堅固な状態であるが、M1号溝状遺構に破壊された部分は、水の影響を受け、軟質である。ピットは4基検出され、主柱穴と思われる配置を呈しておらず、主柱穴は不明な状態である。P1は住居西側中央に位置し、深さ8cm前後を測る。P2は住居中央付近に位置し、深さ11cm前後を測る。P3はテラスを有し、住居南壁下中央に位置し、深さ13cm前後を測る。P4は南壁下に位置し、深さ30cm前後を測る。P3、P4は南壁下に並んだ状態であるため、入口施設とも思われる。炉址 2基検出され、住居の北側の、本来なら主柱穴の存在する中間に並んだ状態で位置しているものと思われる。炉1は長軸24cm、短軸20cm、深さ5cmで、楕円形を呈し、被熱で焼け込みが激しい地床炉である。炉2は長軸24cm、短軸19cm、深さ7cmの楕円形を呈している。炉1同様に焼け込みが激しい。遺物の出土状況 散漫な状態で、覆土中から遺物が出土しているが、西壁側にややまとまって出土している。

遺物 (第54図)

本住居址からは、壺・甕等の弥生土器が出土しているが、遺物量も少なく実測可能個体は少ない。1、2は供献形態の高環で、内外面に赤色塗彩される。3-5は煮沸形態の甕で、3は摩滅により、文様、調整が不明な小型甕、4は胴部が球状に膨らむ甕で、摩滅はしているが、細かい単位で衝描き波状文が施される。6は摩滅により、赤色塗彩が剥落してしまったと思われる甕で、胴部がやや球状を呈している。



第53図 Y20号住居址実測図



第54図 Y20号住居址出土遺物実測図

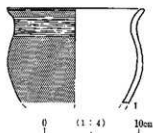
時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

21) Y21号住居址

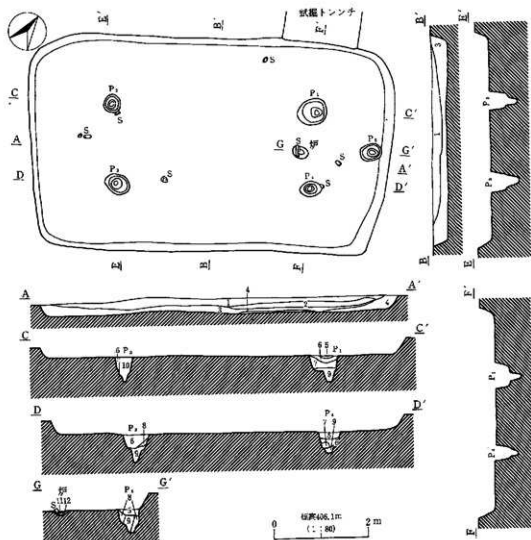
遺構 (第56図)

検出位置 Aこ9・10、Bあ9・10、Fこ1、Gあ1グリッド。

重複関係 Y29号住居址、Y30号住居址を破壊する。平面形態 長軸7.42m、短軸4.2mを測る隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N



第55図 Y21号住居址出土遺物実測図



1. 褐色土 (10YR5) 粘質土。地山粒子 (φ1-3mm) 含む。炭化粒子 (φ3-5mm) 僅少量含む。
2. 灰褐色土 (10YR5) 粘質土。地山粒子 (φ1-3mm) 含む。炭化粒子 (φ1-5mm) 少量含む。
3. 灰質褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子 (φ1-3mm) 含む。炭化粒子 (φ1-3mm) 少量含む。
4. 褐色土 (10YR5) 粘質土。
5. 灰褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子 (φ1-3mm) 含む。
6. 褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子含む。炭化粒子 (φ1-3mm) 含む。
7. 灰褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子含む。
8. 灰褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子 (φ1-3mm) 含む。
9. 褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子 (φ1-3mm) 含む。柱石跡?
10. 灰褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子 (φ5mm) 含む。柱石跡?
11. 褐色土 (10YR5) 炭化粘質土。雄山粒子含む。
12. 灰褐色土 (10YR5) 粘質土。雄山粒子含む。

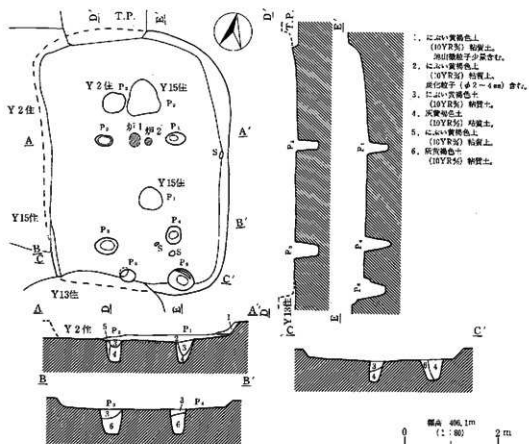
第56図 Y21号住居址実測図

-54° - Eを指す。壁残高は20~37cmを測る。床面の状態 平坦で、堅固な状態。ピットは5基検出され、P1~P4が主柱穴と思われ、整った長方形配置を呈し、対角線上に1:3:1の割合で竪穴がプランニングされる。P1はテラスを有し、深さ55cm前後を測る。P2はテラスを有し、深さ58cm前後を測る。P3はテラスを有し、深さ60cm前後を測る。P4はテラスを有し、深さ44cm前後を測る。P5は東壁下中央に位置し、テラスを有し、深さ50cm前後を測る。棟持ち柱と思われる。炉址 P1とP4の主柱穴間内側に位置し、長軸31cm、短軸23cm、深さ6cmで、楕円形を呈し、被熱で焼け込みが激しい炉縁石+地床炉である。遺物の出土状況 散漫な状態で、覆土中から遺物が出土しているが、遺物量は多くはない。

遺物 (第55図)

木住居址からは、壺・甕等の弥生土器が出土しているが、実測可能個体は1の広口壺のみである。頸部に帯掻き直線文を施し、外面に赤色塗彩されているが、一部黒色化している。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。



第57図 Y22号住居址実測図

22) Y22号住居址

遺構 (第57図)

検出位置 Fき5・6、Fけ5グリッド。**重複関係** Y2号住居址、Y13・15号住居址に西壁、北壁・南壁の一部を破壊される。**平面形態** 長軸5.1m、短軸3.62mを測る隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-18°-Wを指す。壁残高は0~25cmを測る。**床面の状態** 平坦であるが、あまり堅固な状態ではない。ピットは6基検出され、P1~P4が支柱穴と思われる。深さは、P1が46cm前後、P2が45cm前後、P3は深さ50cm前後、P4は50cm前後である。P5は南壁下に位置しテラスを有し、深さ45cm前後、P6は南壁下にP5と対になって検出され、北側にオーバーハングしており、深さ46cm前後を測る。入口施設と思われる。**炉址** 2基検出され、P1とP2の支柱穴間内側に2基とも位置し、炉1は長軸30cm、短軸22cmの楕円形、炉2は15cmの円形を呈し、炉1・2共にくぼみを持たない地床炉である。**遺物の出土状況**

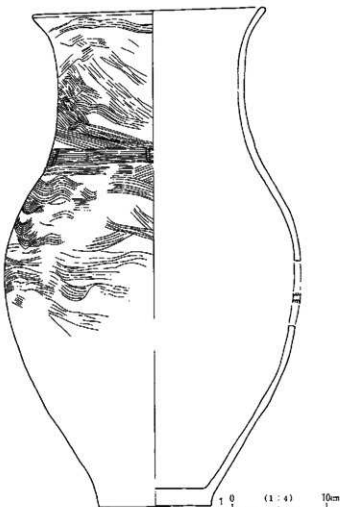
散漫な状態で、遺物量は少なく、図示できるものはない。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半と思われる。

23) Y23号住居址

遺構 (第59図)

検出位置 Bあ8・9、Bい8・9グリッド。**重複関係** Y29・30号住居址を破壊する。**平面形態** 長軸6.6mを測る隅丸長方形を呈するものと思われるが、南壁、東壁・西壁の一部が調査区外となるため、全容は把握できていない。主軸方位は、N-72.5°-Eを指すものと思われる。壁残高は20~25cmを測る。**床面の状態** 平坦で、堅固な状態。ピットは10基検出され、P1~P4が支柱穴と思われる。P1は深さ38cm前後、

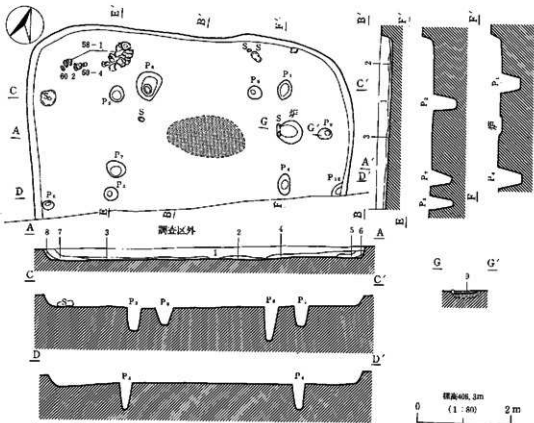


第59図 Y23号住居址出土遺物実測図

P 2は深さ48cm前後、P 3は深さ50cm前後、P 4は深さ51cm前後を測る。P 5はP 1の西側に位置し、深さ71cm前後を測る。P 6はP 2の西側に位置し、テラスを有し、深さ51cm前後を測る。P 7はP 3の北側に位置し、45cm前後を測る。P 8は西壁下に位置し、深さ53cm前後を測る。P 9は棟持ち柱と思われ、深さ65cm前後を測る。P 10は東壁に位置し、深さ61cm前後を測る。炉址P 1とP 4の主柱穴間に位置し、長軸54cm、短軸49cm、深さ5cmで、楕円形を呈し、焼け込みが激しい炉緑石+地床炉である。炉緑石は被熱により割れていた。遺物の出土状況 散漫な状態で、覆土中から遺物が多く出土している。

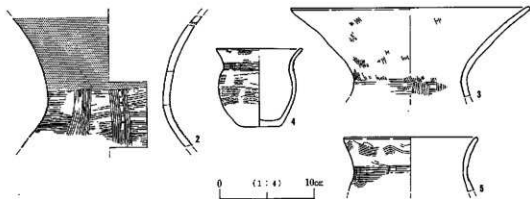
遺物 (第58・60図)

本住居址からは、壺・甕等の弥生土器が出土しているが、実測可能個体は少ない。1は大型の甕で、胴部に最大径を持ち頸部が長く直立し、口縁部で外反する器形を呈する。口縁・胴部に乱



1. 土色黄褐色土 (10YR6) 粘質土、地山崩れ子含む。
2. 土色赤褐色土 (3YR5) 粘質土、磁石層あり、炭化粒子 (φ1-3mm) 少量含む。
3. 黒褐色土 (10YR3) 粘質土、炭化物、磁土崩れ子含む。
4. 黒褐色土 (10YR3) 粘質土、炭化物 (φ1mm-1cm) 含む、磁土崩れ子含む。
5. 褐色土 (10YR5) 粘質土、炭化粒子 (φ1-3mm) 含む。
6. 赤褐色土 (7.5YR5) 粘質土、炭化粒子 (φ1-3mm) 含む、磁土崩れ子含む。
7. 暗褐色土 (10YR3) 粘質土、炭化粒子 (φ1-3mm) 含む、地山崩れ子少量含む。
8. 灰黄褐色土 (10YR6) 粘質土。
9. 黄褐色土 (10YR5) 粘質土、礫質土、地山崩れ子 (φ1-3mm) 含む、炭化粒子 (φ1-2mm) 少量含む。

第58図 Y23号住居址実測図



第60図 Y23号住居出土遺物実測図

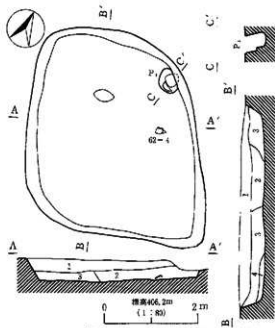
雑な櫛描き波状文を施した後、頸部に櫛描き鬘状文を施す。2・3は貯蔵形態の壺である。4は小型甕、5は甕である。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

24) Y24号住居址

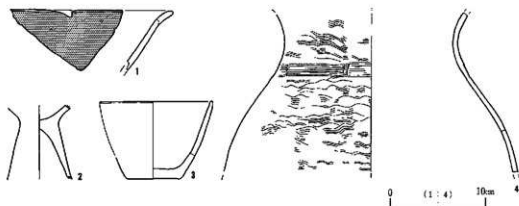
遺構 (第61図)

検出位置 Aき8・9、Aく8・9グリッド。重複関係 M3・5号溝状遺構を破壊する。平面形態 長軸3.96m、短軸3.28mを測る不整形を呈する小型住居である。主軸方位は、N-29°-Eを指す。壁残高は24~57cmを測る。床面の状態 平出ではあるが、堅固な状態ではなく、床面を確認することが困難であった。ピットは1基検出されただけである。P1は住居北東隅に位置し、テラスを有し、深さ43cm前後を測る。住居中央北よりに、炭化物が集中していた。炉址 検出されていない。遺物の出土状況 散漫な状態で、覆土中から遺物が出土しているが、遺物量は非常に少ない。



1. 灰黄褐色土 (10YR5) 粘質土。基壇跡を有し、段 (φ1~2m) 少々む。
2. 黒褐色土 (5YR3) 炭化した (φ3cm~1cm) 主体。
3. 濃い褐色土 (7.5YR5) 粘質土。炭粒粘土含む。溝 (φ1cm) 僅少含む。
4. 塊灰色土 (10YR3) 粘質土。炭化粘土 (φ1~2cm) 少々む。

第61図 Y24号住居址実測図



第62図 Y24号住居址出土遺物実測図

遺物 (第62図)

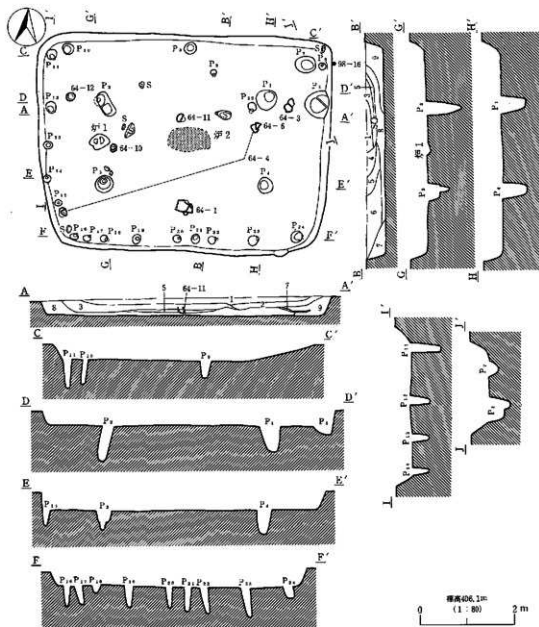
本住居址からは、壺・甕・高環等の弥生上器が出土しているが、遺物量も少なく実測可能個体は少ない。1、2は供状形態の高環で、1は坏部に稜を持たず、口縁で外反する。2は摩滅しているため赤色塗彩が見られない。3は鉢と思われるが、2と同様に摩滅している。4は煮沸形態の甕で、摩滅により文様がはっきりしないが、胴部が球状に膨らむ器形である。

時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

25) Y25号住居址

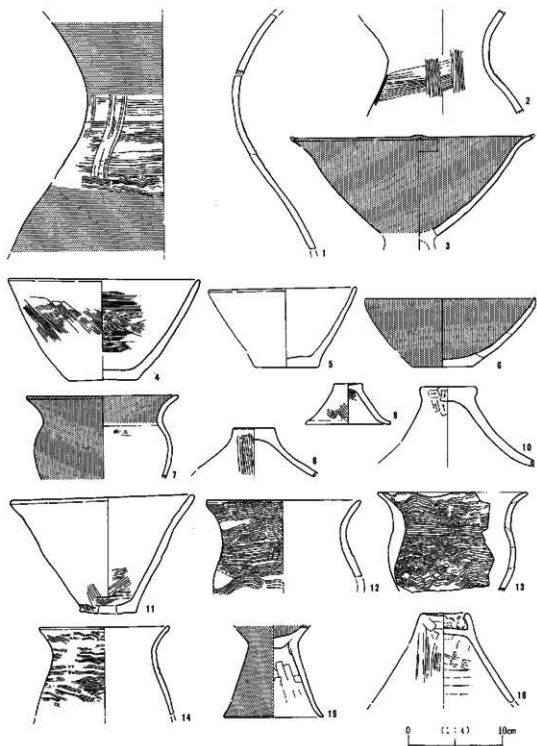
遺構 (第63図)

検出位置 GⅠ1・2、GⅡ1・2グリッド。重複関係 Y26・27号住居址を破壊する。平面形態 長軸5.78m、短軸4.34mを測る隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-84°-Eを指す。壁残高は28~40cmを測る。床面の状態 平埠で、堅固な状態である。ピットは25基検出され、P1~P4が主柱穴と思われ、整然とした長方形配置を呈している。P1は深さ50cm前後を測る。P2はテラスを有し、深さ74cm前後を測る。P3はテラスを有し、深さ42cm前後を測る。P4は深さ50cm前後を測る。P5は東壁下に位置し、テラスを有し、深さ40cm前後を測る。P6はP5に並んだ状態で、深さ44cm前後を測る。P5・6は入口施設とも思われる。P7は北東隅に位置し、深さ44cm前後を測り、貯蔵穴とも思われる。P8は深さ34cm前後を測る。P9~P24は住居の壁面下に並んで検出され、東柱と思われる。住居構造を考える上で興味深いものである。特に西・南壁下に等間隔で巡らされている。P25はP1の西側に位置し、深さ53cmを測る。炉址 2基検出され、P2とP3の主柱穴間に位置する炉1、中央付近に位置する炉2がある。炉1は長軸34cm、短軸29cm、深さ6cmで、楕円形を呈し、被熱で焼け込みが激しい地床炉である。炉2は長軸88cm、短軸48cmの楕円形を呈する地床炉で床面が焼けた状態である。遺物の出土状況 覆土



1. 黑褐色土 (10YR5) 粘質土。炭化粒子 (φ2-5mm) 含む。埴山段砂子含む。
2. 黒褐色土 (10YR5) 粘質土。炭化粒子 (φ1-5mm) 含む。
3. 黒褐色土 (10YR5) 粘質土。砂子混じり。
4. 赤土 (10YR5) 粘質土。砂子混じり。
5. 赤い黄褐色土 (10YR5) 粘質土。埴山段子 (φ1-3mm) 多量含む。人為堆土。
6. 灰褐色土 (10YR5) 粘質土。砂子混じり。炭化粒子 (φ1-2mm) 少量含む。
7. 黒色炭化粘質 (10YR2)。
8. 黄褐色土 (10YR5) 粘質土。炭化粒子 (φ1-5mm) 含む。
9. 赤い黄褐色土 (10YR5) 粘質土。

第63図 Y25号住居址実測図



第64图 Y25号住居址出土遗物实测图

中から遺物が多く出土している。

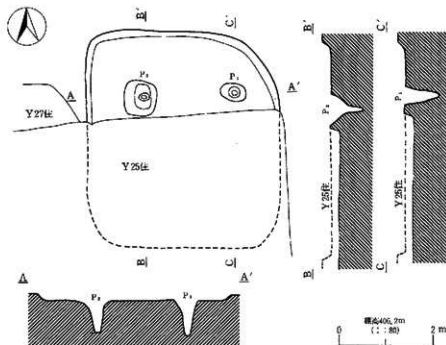
遺物 (第64・98・100図)

本住居址からは、壺・甕・高環・蓋等の弥生土器が出土しており、バラエティに富んでいる。1、2は貯蔵形態の壺で1には頸部櫛描きT字文を施した後櫛描き波状文が施される。3・7・15は供献形態の高環・広口壺で、3は稜を持たず口縁で外反する。7は外面と内面頸部上半に赤色塗彩の施される広口壺である。什器形態としては4～6の鉢があり、6には内外面赤色塗彩がみられる。口縁部で直立する器形を呈する。8～10、16は蓋で大型の10、16と小型の8、9がある。11は甌でヘケ調整と磨きが施される。12～14は煮沸形態の甌で、胴部球状を呈する12、13があり、台付き甌になるのかも知れない。14は摩滅により、文様が読み取りにくくなっている。時期 出土遺物より、弥生時代後期後半に位置づけられる。

26) Y26号住居址

遺構 (第65図)

検出位置 GⅠ1・2グリッド。重複関係 Y25号住居址に南壁、東壁・西壁の一部を破壊される。Y27号住居址との重複関係は不明。平面形態 短軸3.9mを測る隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位は、不明である。壁残高は8～16cmを測る。床面の状態 平坦で、堅固な



第65図 Y26号住居址実測図

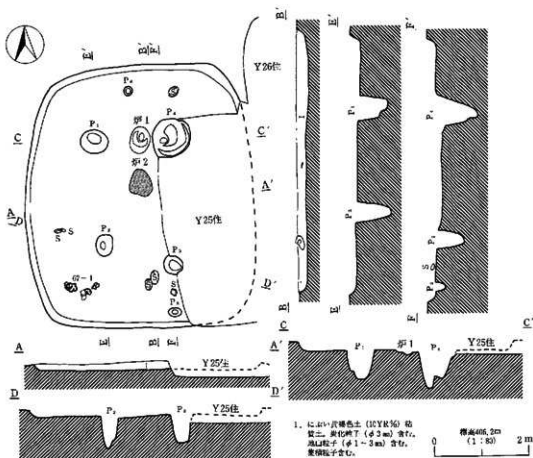
状態である。ピットは2基検出され、P1、P2が主柱穴と思われる。P1は深さ70cm前後を測る。P2は深さ60cm前後を測る。炉址 検出されていない。Y25号住居址に破壊されてしまったと考えられる。遺物の出土状況 非常に散漫な状態で、覆土中から遺物が少量出土したにすぎない。実測可能個体となるものはない。

時期 若下の出土遺物、遺跡の状況から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

27) Y27号住居址

遺構 (第66図)

検出位置 G12・3、G13・2グリッド。重複関係 Y25号住居址に東壁の一部を破壊される。Y27号住居址との重複関係は不明。平面形態 長軸5.3m、短軸3.9mを測る隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-0°-Eを指す。壁残高は12~23cmを測る。床面の状態 平坦で、堅



第66図 Y27号住居址実測図

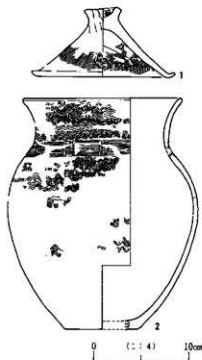
崗な状態である。ピットは5基検出され、P1～P4が
 主柱穴と思われる。P1は深さ58cm前後を測る。P2は
 深さ65cm前後を測る。P3は主柱穴配置が少しずれるわ
 けであるが、深さ57cm前後を測る。P4はテラスを有
 し、深さ84cmを測る。P5は南壁下中央に位置し、深さ
 19cmを測る。炉址 2基検出され、P1とP4の主柱穴
 間に位置する炉1と住居中央付近に位置する炉2があ
 る。炉1は長軸70cm、短軸45cmの楕円形を呈し、10cmの
 くぼみを有する地床炉で、焼け込みが激しい。炉2は長
 軸60cm、短軸44cmの楕円形を呈し、くぼみを持たず床面
 が被熱を受けたものである。遺物の出土状況 非常に散
 漫な状態で、覆土中から遺物が出土している。法仏式の
 甕も出土している。

遺物 (第67・102図)

本住居址からは、壺・甕・蓋等の弥生土器が出土して
 いる。図示できたものは、1の蓋と2の甕のみである。

1は指頭痕とハケ調整が残る蓋で、かえりがある。2は 第67図 Y27号住居址出土遺物実測図
 胴部球状を呈する甕である。

時 期 出土遺物から、弥生時代後期後半に位置づけられる。



28) Y28号住居址

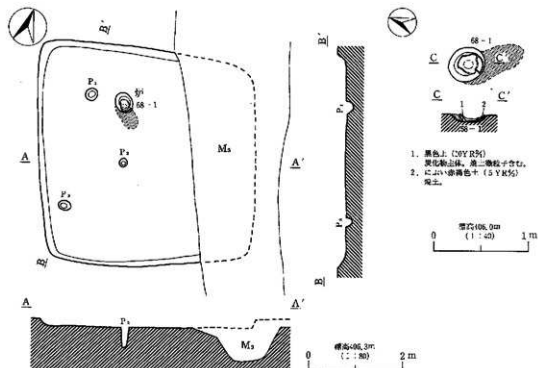
遺構 (第69図)

検出位置 Aく9、Aけ9・10、Aこ9グリッド。重複関係 M3号溝状遺構に東壁、北壁・
 南壁の一部を破壊される。Y31号住居址との重複関係は不明。平面形態 長軸3.9mを測る隅丸
 長方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-75°-Eを指す。壁残高は12-19cmを測る。
 床面の状態 平坦で、堅固な状態である。

ピットは3基検出され、整然とした主柱穴配
 置を呈していない。P1は深さ13cm前後を測
 る。P2は住居址の中央付近に位置し、深さ
 41cm前後を測る。P3は住居址南西隅に位置
 し、深さ13cm前後を測る。炉址 住居址の主
 柱穴配置を呈していないわけであるが、P1



第68図 Y28号住居址出土遺物実測図



第69図 Y28号住居址、炉址実測図

が本来の主柱穴間に位置しているように思われる。長軸42cm、短軸34cmの楕円形を呈し、1の壺底部を正位に埋設した埋壺炉であった。遺物の出土状況 非常に散漫な状態で、覆土中から少量の遺物が出土しているのみである。

遺物 (第68図)

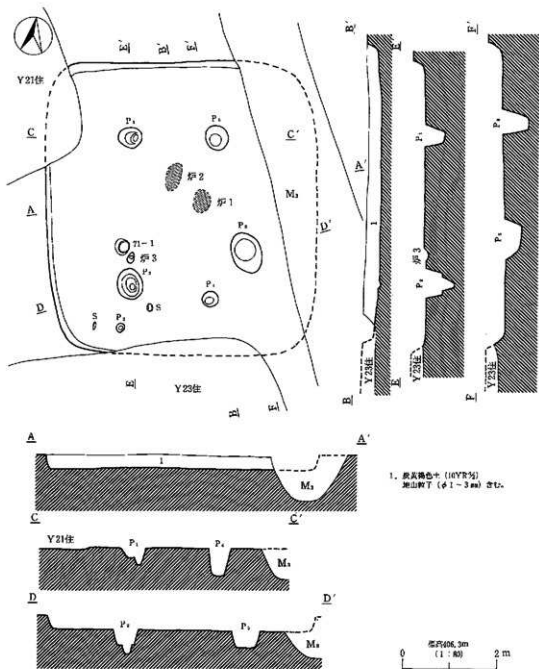
本住居址からは、壺・甕等の弥生土器が出土している。図示できたものは、1の壺底部のみであった。内外面にハケ調整が施されている。

時期 出土遺物から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

29) Y29号住居址

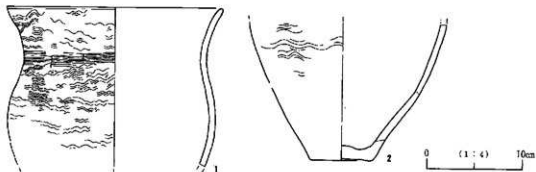
遺構 (第70図)

検出位置 Aこ8・9、Bあ8・9、Bい9グリッド。重複関係 Y21・23号住居址、M3号溝状遺構に東壁、北壁・西壁・南壁の一部を破壊される。平面形態 長軸6mを測る隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-10°-Wを指す。壁残高は16~26cmを測る。床面の状態 平坦で、堅固な状態である。ピットは6基検出され、P1、P2、P4、P6が主柱穴と思われる。P1はテラスを有し、深さ41cm前後を測る。P2はテラスを有し、深さ52cm前後を測



第70図 Y29号住居址実測図

る。P 3は南壁下に位置し、小型で深さ31cm前後を測る。P 4は小型で、深さ27cm前後を測る。P 5は深さ35cm前後を測る。P 6は深さ56cm前後を測る。炉址 3基検出され、住居址の中央付近に2基、P 2の北側に1基位置する。炉1は長軸50cm、短軸36cmの楕円形を呈す地床炉、炉2は長軸60cm、短軸30cmの楕円形を呈する地床炉、炉3は長軸23cm、短軸14cmの楕円形を呈し、深



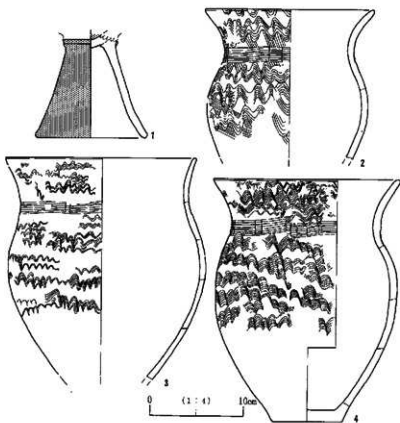
第71図 Y29号住居址出土遺物実測図

さ3cmの地床炉である。遺物の出土状況 散漫な状態で、覆土中から遺物が出上している。

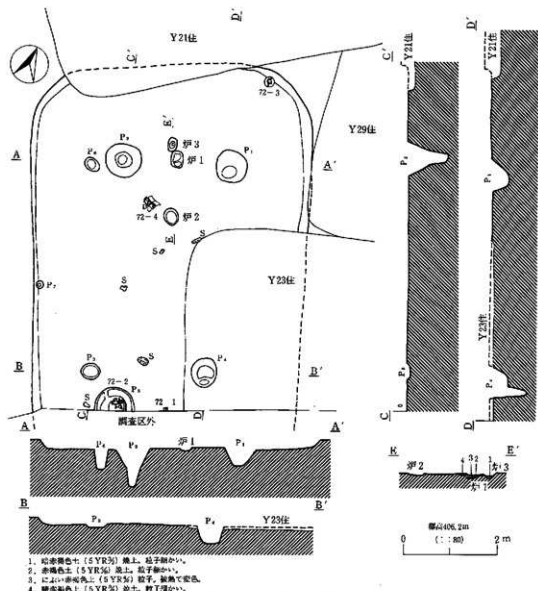
遺物 (第71図)

本住居址からは、壺・甕等の弥生土器が出土しているが図示できたものは、1、2の甕のみであった。1、2は摩滅しており、文様が読みとれないが1は頸部に等間隔止めが施される。

時期 出土遺物から、弥生時代後期後半に位置づけられる。



第72図 Y30号住居址出土遺物実測図



第73図 Y30号住居址実測図

30) Y30号住居址

遺構 (第73図)

検出位置 Bあ9・10、Hい9・10、Bう9・10グリッド。重複関係 Y21・23・29号住居址に北壁・東壁の一部を破壊される。平面形態 長軸5.8mを測る隅丸長方形を呈するものと思われるが、南壁が調査区外になるため、全容は不明である。主軸方位は、N-23°-Wを指す。壁残高は0-19cmを測る。床面の状態 平坦で、堅固な状態である。ピットは7基検出され、P1、P2、P4が主柱穴と思われるが、整然とした主柱穴配置を呈していない。P1は深さ37cm前後

を測る。P 2は深さ80cm前後を測る。P 3は小型で深さ5cm前後を測る。P 4はテラスを有し、深さ80cm前後を測る。P 5はテラスを有し、深さ43cm前後を測る。貯蔵穴と思われる。P 6は西壁側に位置し、小型で深さ41cm前後を測る。炉址 3基検出され、P 1とP 2の主柱穴間内側に位置する炉1、外側に位置する炉2と中央付近に位置する炉3である。炉1は長軸37cm、短軸24cmの楕円形を呈し、4cmのくぼみを有する地床炉、炉2は長軸45cm、短軸40cmの楕円形を呈し、5cm前後のくぼみを有する地床炉、炉3は長軸30cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さ7cmのくぼみを有する地床炉である。遺物の出土状況 散漫な状態で、覆土中から遺物が出土している。

遺物 (第72・98図)

本住居址からは、壺・甕・高環等の弥生土器が出土している。1は供獻形態の高環脚部で、外面赤色塗彩が施される。2～4は煮沸形態の甕で、2、4は口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形を呈する。3は口縁部が直立し、胴部球状を呈する甕である。

時期 出土遺物から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

31) Y31号住居址

遺構 (第74図)

検出位置 Aけ8グリッド。重複関係 M3号溝状遺構に西壁、北壁・南壁の一部を破壊される。住居床面西側も破壊されている。平面形態 短軸2.66mを測る隅丸方形を呈するものと思われ、小型住居と思われる。主軸方位は、不明である。壁残高は0～22cmを測る。床面の状態 平坦ではあるが、堅固な状態ではない。ピットは検出されていない。炉址 検出されていない。M3号溝状遺構に破壊されたものとも思われる。遺物の出土状況 散漫な状態で、覆土中から遺物が出土しているが遺物量は極めて少ない。

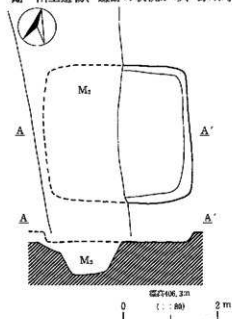
時期 出土遺物、遺跡の状況から、弥生時代後期後半と思われる。

32) Y32号住居址

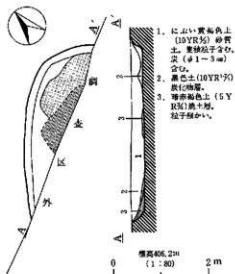
遺構 (第75図)

検出位置 Gう1、Gえ1・2グリッド。重複関係 南壁、西壁、東壁・北壁の一部が調査区外となるため、全容は不明。同様に重複関係も不明である。平面形態 検出されたのが北壁、東壁の一部のため、平面形態は不明であるが、隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位は、不明である。壁残高は20～28cmを測る。床面の状態 平坦ではあるが、堅固な状態ではない。ピットは検出されていない。覆土及び床面に焼土・炭化物が検出されており、住居廃絶後に焼失したものである。覆土の堆積状況は、炭化物層、焼土層が壁際に見られる。炉址 検出されていない。遺物の出土状況 非常に散漫な状態で、覆土中から若干の遺物が出土しただけである。

時期 出土遺物、遺跡の状況から、弥生時代後期後半に位置づけられる。



第74図 Y31号住居址実測図



第75図 Y32号住居址実測図

33) Y33号住居址

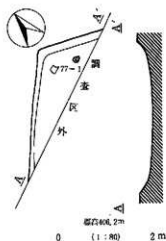
遺構 (第76図)

検出位置 Gか6・7グリッド。重複関係 南壁、西壁、東壁・北壁の一部が調査区外となるため、全容は不明。同様に重複関係も不明である。平面形態 Y32号住居址同様、平面形態は不明であるが、隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位は、不明である。壁残高は22~30cmを測る。床面の状態 平坦ではあるが、堅固な状態ではない。ピットは検出されていない。炉址 検出されていない。遺物の出土状況 非常に散漫な状態で、覆土中から若干の遺物が出土しただけである。

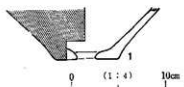
遺物 (第77図)

壺・甕・高坏等の弥生土器が出土したが図示できたものは、1の底部だけで、外面に赤色塗彩され、焼成後穿孔され、甕に転用されたものと思われる。

時期 出土遺物、遺跡の状況から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

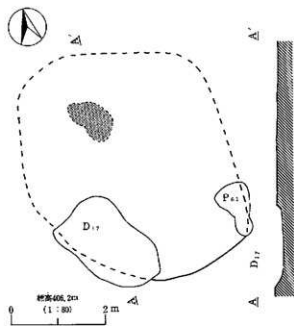


第76図 Y33号住居址実測図



第77図 Y33号住居址出土遺物実測図

34) Y34号住居址



第78図 Y34号住居址実測図

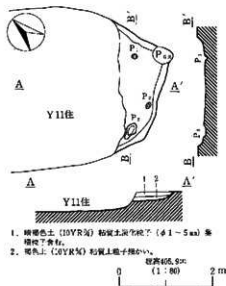
遺構 (第78図)

検出位置 Gい5・6、Gう5・6グリッド。重複関係 D17号土坑址、P61に南壁・西壁・東壁一部を破壊される。

Y7・8号住居址を破壊する。平面形態 Y7・8号住居址の掘り下げ時に検出されたため、不明な点が多い。床面の状態 平坦ではあるが、堅固な状態とはいえない。ピットは検出されていない。炉址 中央北側に検出され、長軸96cm、短軸50cmの不整形を呈す地床炉と思われる。遺物の出土状況 非常に散漫な状態で、若干の遺物が出土しただけで、図示できるものはない。

時期 出土遺物、遺跡の状況から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

35) Y35号住居址



1. 暗褐色土 (10YR5) 粘質土質を脱了 (41-5ax) 集積した層。
2. 暗赤土 (6YR5) 粘質土質を脱了。

第79図 Y35号住居址実測図

遺構 (第79図)

検出位置 Fく8・9グリッド。重複関係 Y11号住居址、P62に北壁、南壁・西壁・東壁の一部を破壊される。

平面形態 隅丸方形を呈すると思われる。床面の状態 平坦とはいえず、堅固な状態ともいえない。ピットは3基検出された。いずれも小型で、主柱穴とは考えられず、4~6cmの深さである。炉址 検出されなかった。主柱穴及び炉址は、Y11号住居址に破壊されてしまったものと思われる。遺物の出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 遺跡の状況から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

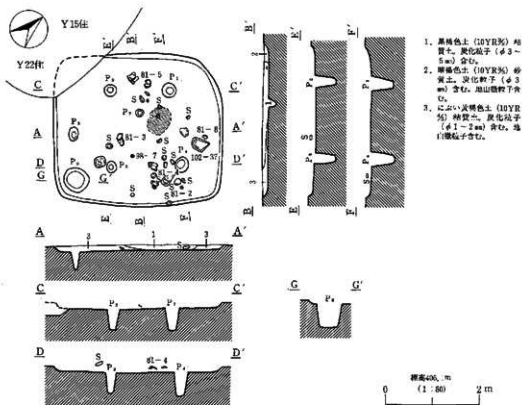
36) Y36号住居址

遺構 (第80図)

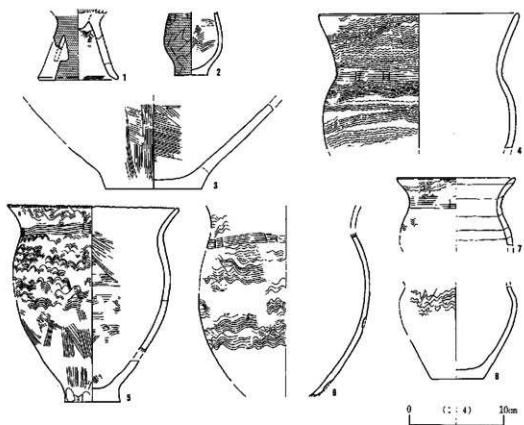
検出位置 F×4・5、Fけ4グリッド。**重複関係** Y15号住居址に北壁・東壁の一部を破壊されている。平面形態 長軸3.42m、短軸3.02mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位は、N-40.5°-Eを指す。壁残高は5-11cmを測る。床面の状態 平坦で、堅固な状態である。ピットは7基検出され、P1-P4が主柱穴と思われる。P1は深さ47cm前後を測る。P2は深さ43cm前後を測る。P3は深さ44cm前後を測る。P4は深さ48cm前後を測る。いずれも小型である。P5は西壁中央に位置し、深さ36cm前後を測る。P6は南西隅に位置し、深さ48cm前後を測る。貯蔵穴と思われる。P7は住居中央付近に位置し、小型で深さ15cmを測る。炉址 住居中央付近に位置し、長軸57cm、短軸44cmの楕円形を呈する、くぼみを有さない地床炉である。遺物の出土状況 覆土中から多くの遺物が出土している。

遺物 (第81・98・102図)

本住居址からは、壺・甕・高坏等の弥生土器が出土している。1は供臑形態の高坏脚部で、外面赤色塗彩が施され、三角透かし孔を有する。2は手柄の甕で、外面に赤色塗彩され、頸部に籬



第80図 Y36号住居址実測図



第81図 Y36号住居址出土遺物実測図

状文が、胴部には帯描き波状文が施されている。内面には帯調整が施される。3は壺の底部で、内外面にヘケ調整が施される。4～8は煮沸形態の甕で、4は直線的で胴部が膨らむ器形を呈し、外面には細かな帯描き波状文が施される。5は口縁部が外反し、口縁端部に刻み目を有する。6は胴部が膨らむ器形である。7、8は小型の甕で、7は口縁部が外反し、8は胴部がやや膨らむ器形を呈する。

時期 出土遺物から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

第2節 十 坑 址

1) D1号土坑址

遺 構 (第82図)

検出位置 Gい8、Gう8グリッド。重複関係 Y6号住居址を破壊する。平面形態 長軸2.08m、短軸2.02mの楕円形を呈する。深さ43cm前後を測る。覆土に人為的な堆積が認められた。底面は平坦で、逆台形を呈する。

時 期 出土遺物には甕・壺・高坏があるが、図示できるものではないが、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

2) D2号土坑址

遺 構 (第82図)

検出位置 Gあ10、Gい10、Lあ1、Lい1グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸2.02m、短軸1.72mの楕円形を呈する。深さ31cm前後を測る。覆土に人為的な堆積と思われる土層が見られる。底面は平坦で、逆台形を呈する。

時 期 出土遺物には甕・壺があるが、図示できるものではない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

3) D3号土坑址

遺 構 (第84図)

検出位置 Fこ10、Gあ10、Kこ1、Lあ1グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸2.52m、短軸1.86mの隅丸長方形を呈する。深さ42cm前後を測る。底面は平坦で、逆台形を呈する。

遺 物 (第84図)

出土遺物には甕・壺・高坏等があるが、図示できたものは壺の底部のみである。外面に赤色塗彩され、内面にハケ調整が施される。

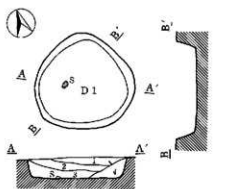
時 期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

4) D4号土坑址

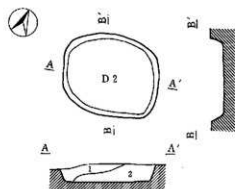
遺 構 (第82図)

検出位置 Fこ9、Gあ9グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸2.16m、短軸1.68mの隅丸長方形を呈する。深さ30cm前後を測る。底面は平坦で、逆台形を呈する。

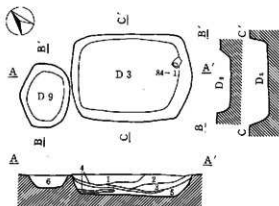
遺 物 (第84図)



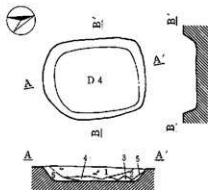
1. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。焼山磁子含む。人為堆土。
2. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。炭化磁子 (φ2~3mm) 含む。焼山磁子含む。人為堆土。
3. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。焼山磁子多量含む。
4. 褐色土 (10YR5/4) 粘質土。焼土跡有多量含む。炭化磁子 (φ2~3mm) 少量含む。



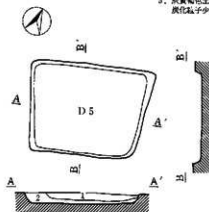
1. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。焼山磁子多量含む。人為堆土。
2. におい質褐色土 (10YR5/3) 焼山磁子含む。人為堆土?



1. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。炭化磁子 (φ3~5mm) 含む。
2. 褐色土 (10YR5/4) 粘質土。焼山磁子、炭化磁子 (φ5mm) 含む。
3. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。焼山磁子多量含む。人為堆土?
4. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。炭化磁子、焼土跡を含む。
5. 褐色土 (10YR5/4) 粘質土。炭化磁子含む。
6. におい質褐色土 (10YR5/3) 粘質土。D、D'。焼山磁子含む。



1. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。炭化磁子少量含む。
2. 褐色土 (10YR5/4) 粘質土。焼山磁子少量含む。炭化磁子少量含む。
3. 褐色土 (10YR5/4) 粘質土。
4. 正褐色土 (10YR5/5) 粘質土。
5. 灰質褐色土 (10YR5/6) 粘質土。炭化磁子少量含む。



1. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。炭化磁子少量含む。
2. 暗褐色土 (10YR5/3) 粘質土。炭化磁子少量含む。

0 標高436.0m
1:100 2m

第82図 D1~5・9号土坑址実測図

出土遺物には甕・壺・高坏・勾玉があり、壺が多い。図示できたものは、土製の勾玉のみである。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

5) D 5号土坑址

遺構 (第82図)

検出位置 Fけ8、Fこ7・8グリッド。重複関係 Y10号住居址を破壊する。平面形態 長軸2.35m、短軸1.94mの長方形を呈する。深さ19cm前後を測る。底面は平坦で、逆台形を呈する。

時期 出土遺物には甕・壺・蓋があるが、図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

6) D 6号土坑址

遺構 (第83図)

検出位置 Gい8グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸2.04m、短軸1.98mの隅丸方形を呈する。深さ12cm前後を測る。底面は平坦であるが、中央部がくぼんでいる。

時期 出土遺物には甕・壺があり、口縁部が受け口状を呈する帯もある。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

7) D 7号土坑址

遺構 (第83図)

検出位置 Gい4・5グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸3.14m、短軸1.56mの隅丸長方形を呈する。深さ31cm前後を測る。底面は平坦な逆台形を呈す。底面の北側には、深さ42cm前後を測る小型のピットを有している。このような形態をしたものには、貯蔵穴が考えられるが、炭化種子等の出土はなかった。

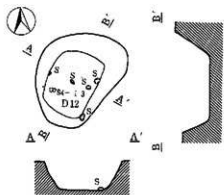
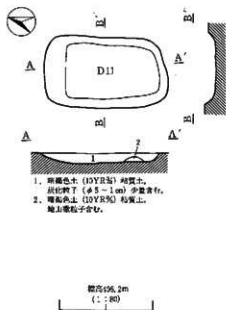
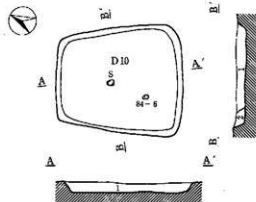
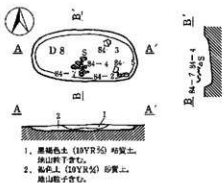
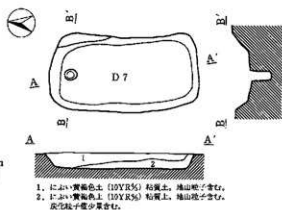
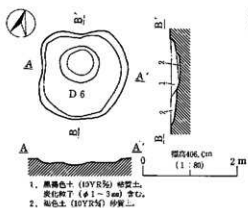
時期 出土遺物には甕・壺があるが、図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

8) D 8号土坑址

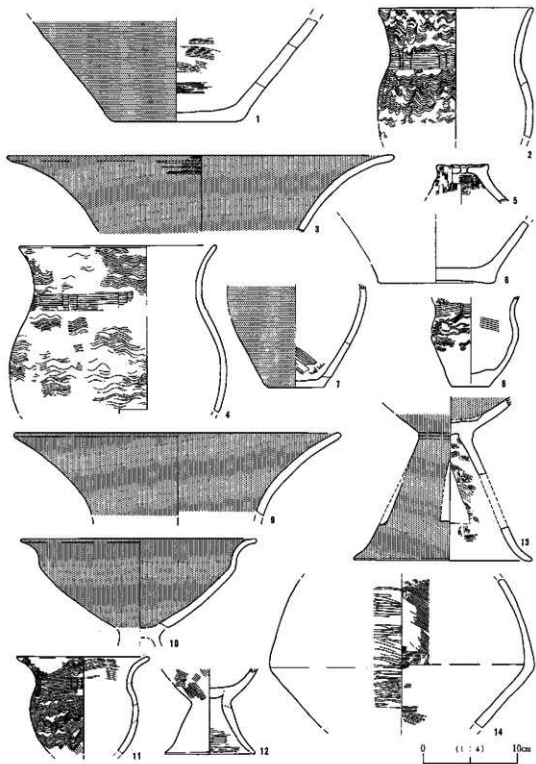
遺構 (第83図)

検出位置 Gあ5グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸2.2m、短軸1.08mの隅丸長方形を呈する。深さ15cm前後を測る。底面は平坦な逆台形を呈す。

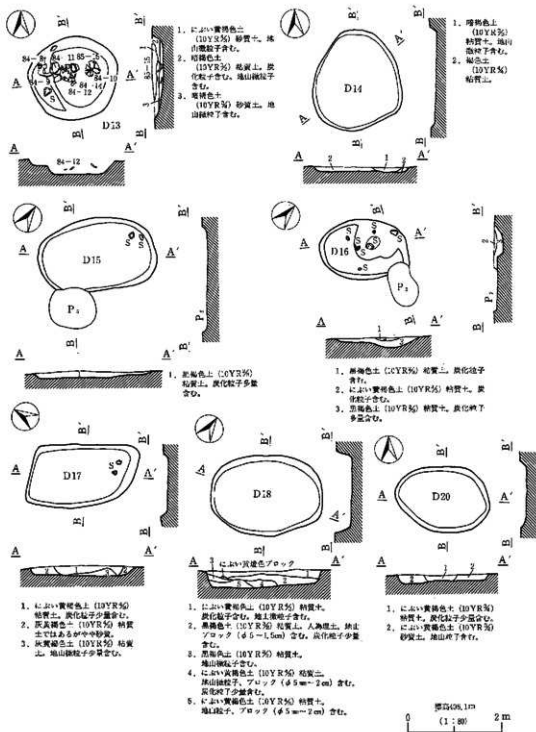
遺物 (第84図)



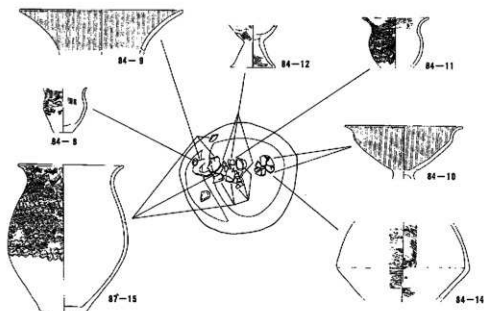
第83図 D6~8・10~12号土坑址実測図



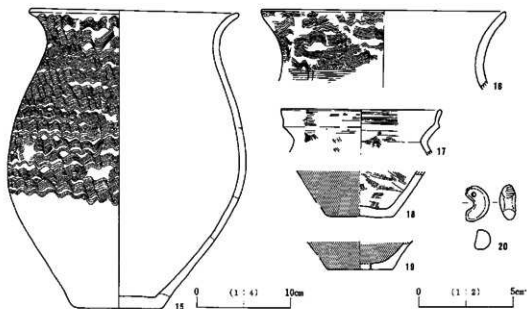
第84图 D3·4·8·10·12·13号土坑址出土器物实测图



第85図 D13~18・20号土坑実測図



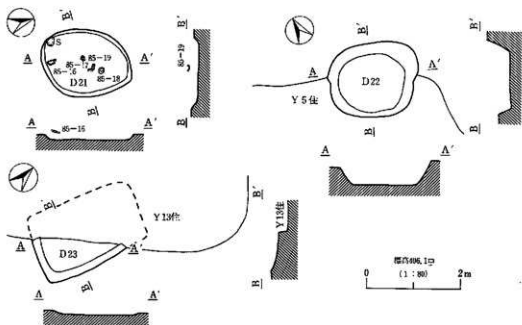
第86図 D13号土坑址遺物出土状況図（遺構1：60・遺物1：8）



第87図 D13・21号土坑址出土遺物実測図

出土遺物には甕・壺・蓋等があるが、図示できたものは3・7の壺、4の甕、5の蓋がある。3は内外面に赤色塗彩された口縁部が外反する甕、7は広口壺と思われる。4は胴部が球状を呈す甕である。5は天井部に孔を有する。

時 期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第88図 D21～23号土坑址実測図

9) D9号土坑址

遺構 (第82図)

検出位置 Fこ10、Kこ1グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.35m、短軸1.02mの楕円形を呈する。深さ26cm前後を測る。底面は平坦な逆台形を呈す。

時期 出土遺物には甕・壺があるが、遺物量は極めて少ない。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

10) D10号土坑址

遺構 (第83図)

検出位置 Fこ6・7グリッド。重複関係 Y13号住居址を破壊する。平面形態 長軸2.66m、短軸2.2mの楕円形を呈する。深さ21cm前後を測る。底面は平坦な弓状を呈す。

遺物 (第84図)

出土遺物には甕・壺等があるが、図示できたものは6の壺である。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

11) D11号土坑址

遺構 (第83図)

検出位置 Gう5、Gえ5グリッド。**重複関係** Y13号住居址を破壊する。**平面形態** 長軸2.56m、短軸1.5mの楕円形を呈する。深さ22cm前後を測る。底面は平坦な弓状を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があるが、壺が主体を占める。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

12) D12号土坑址

遺構 (第83図)

検出位置 Gう9グリッド。**重複関係** Y4号住居址を破壊する。**平面形態** 長軸2.1m、短軸1.62mの楕円形を呈する。深さ39cm前後を測る。底面は平坦な逆台形を呈す。

遺物 (第84図)

出土遺物には甕・壺・高環等があるが、図示できたものは13の高環である。外面に赤色塗彩され、三角透かし孔を有する。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

13) D13号土坑址

遺構 (第85図)

検出位置 Gえ4、Gお4グリッド。**重複関係** Y12号住居址を破壊する。**平面形態** 長軸1.84m、短軸1.74mの楕円形を呈する。深さ31cm前後を測る。底面は平坦な逆台形を呈す。覆土から若干ではあるが骨粉が出土している。墓坑と思われる。

遺物 (第84・86・87図)

出土遺物には甕・壺・高環・小型甕等がある。9は内外面に赤色塗彩が施され、口縁部が外反する甕である。10・12は高環で、坏部中に稜を持ち口縁部が外反する。11は小型甕で、胴部が膨らむ器形を呈する。14は壺の胴部で算盤玉状を呈する。15は胴部が球状を呈し、丁寧な襷描き波状文を呈している。甕棺の可能性も考えられる。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

14) D14号土坑址

遺構 (第85図)

検出位置 Fき2・3グリッド。**重複関係** なし。**平面形態** 長軸2.14m、短軸1.8mの楕円形を呈する。深さ14cm前後を測る。底面は凹凸があるが概ね平坦な弓状を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があるが、遺物量は極めて少ない。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

15) D15号土坑址

遺構 (第85図)

検出位置 Fけ5、Fこ5グリッド。重複関係 Y13号住居址、P5を破壊する。平面形態 長軸2.44m、短軸1.52mの隅丸長方形を呈する。深さ12cm前後を測る。底面は平坦な弓状を呈す。時期 出土遺物には壺・甕・高坏等があり、甕の出土が多い。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

16) D16号土坑址

遺構 (第85図)

検出位置 Fけ5グリッド。重複関係 P2に破壊される。Y13号住居址を破壊する。平面形態 長軸1.86m、短軸1.28mの楕円形を呈する。深さ21cm前後を測る。テラスを有し、底面は船底状を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があり、甕の出土が多い。底面周辺にて土器が若干ではあるが、まとまって出土した。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

17) D17号土坑址

遺構 (第85図)

検出位置 Gう6グリッド。重複関係 Y34号住居址を破壊する。平面形態 長軸2.22m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。深さ16cm前後を測る。底面は船底状を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があり、壺の出土が多い。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

18) D18号土坑址

遺構 (第85図)

検出位置 Fく1・2、Fけ2グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸2.34m、短軸1.68mの隅丸長方形を呈する。深さ37cm前後を測る。底面は逆台形を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があり、壺の出土が多い。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

19) D19号土坑址は、当初命名したが住居址と判明したため、欠番となった。

20) D20号土坑址

遺構 (第85図)

検出位置 Gお6、Gか6グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸2.02m、短軸1.4mの楕円形を呈する。深さ14cm前後を測る。底面は逆合形を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があり、甕の出土がやや多いが散漫な状態。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

21) D21号土坑址

遺構 (第88図)

検出位置 Gう3・4グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.94m、短軸1.44mの楕円形を呈する。深さ11cm前後を測る。底面は船底状を呈す。

遺物 (第87図)

出土遺物には甕・壺があり、甕が多い。図示できたものは16～19で、16は口縁が外反する甕、17は北陸系法仏式の甕である。内外面にハケ調整が施される。18、19は赤色塗彩される壺である。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

22) D22号土坑址

遺構 (第88図)

検出位置 Gう6、Gえ6グリッド。重複関係 Y5号住居址に南側を破壊される。平面形態 長軸1.76m、短軸1.56mの楕円形を呈する。深さ31cm前後を測る。底面は逆合形を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があり、散漫な状態で縄文土器の出土もある。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期と思われる。

23) D23号土坑址

遺構 (第88図)

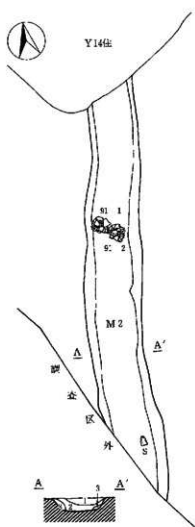
検出位置 Fこ5グリッド。重複関係 Y13号住居址に北側を破壊される。平面形態 長方形を呈する。深さ11cm前後を測る。底面は弓状を呈す。

時期 出土遺物には壺・甕があり、散漫な状態である。図示できたものはない。出土遺物から弥生時代後期と思われる。

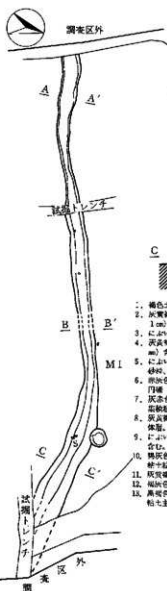
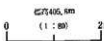
第3節 溝状遺構

1) M1号溝状遺構

遺構 (第89図)



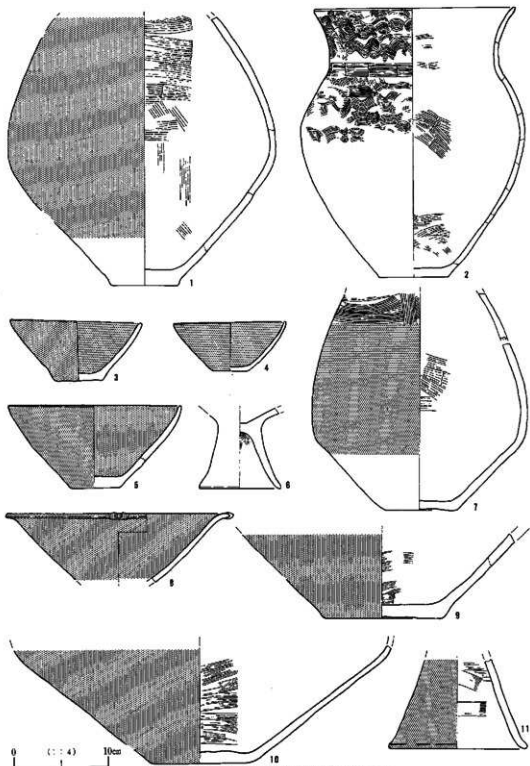
1. 褐色土 (10YR5/5) 粘質土、湖山礫子、集積礫子を含む。
2. 褐色土 (10YR5/5) 粘質土、1層より中層部へ、炭化礫子 (φ1-3mm) を含む、集積礫子を含む。
3. 褐色土 (10YR5/5) 粘質土、湖山礫子多く含む、集積礫子を含む。



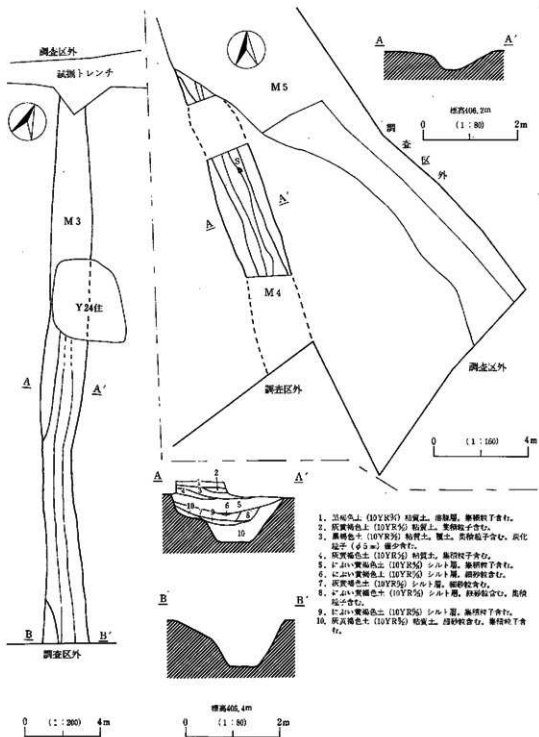
1. 褐色土 (10YR5/5) 砂質、湖山礫子を含む。
2. 灰黄褐色土 (10YR5/5) 砂質、円礫 (φ3mm-1cm) を含む、粗砂粒を含む。
3. 濃い黄褐色土 (10YR5/5) 砂質、緑砂粒を含む。
4. 灰黄褐色土 (10YR5/5) 砂質、円礫 (φ2-3mm) を含む、湖山礫子を含む。
5. 濃い黄褐色土 (20YR5/5) 砂質、粗砂粒、湖山礫子、円礫 (φ3mm) を含む。
6. 灰褐色土 (2.5YR5/5) 砂質、粗砂粒を含む、円礫 (φ2-5mm) を含む。
7. 灰褐色土 (2.5YR5/5) シルト層、緑砂粒を含む、湖山礫子を含む。
8. 灰黄褐色土 (10YR5/5) 砂質、粗砂粒、砂粒主体層、円礫 (φ3-5mm) を含む。
9. 濃い黄褐色土 (10YR5/5) シルト層、湖山礫子を含む、集積礫子を含む。
10. 灰褐色土 (10YR5/5) シルト層、湖山礫子を含む、粗砂粒を含む、集積礫子を含む。
11. 灰黄褐色土 (10YR5/5) 砂質、湖山礫子を含む。
12. 褐色土 (10YR5/5) 砂質、湖山礫子を含む。
13. 黄褐色土 (10YR5/5) 粘質土、炭化礫子を含む、粘土主体。



第89図 M1・2号海状遺構実測図



第90图 M1·2·3号海状造樽出土土器实测图



第81図 M3・4・5号海状違構実測図

検出位置 Aえ10、Aお10、Fえ1・2・3・4・5、Fか6・7・8・9、Fき8・9・10、Fく10、Kき1・2、Kく1・2グリッド。**重複関係** Y14・17・20号住居址を破壊する。形状検出長54.5m、幅90～320cm、深さ1.5～32cm前後を測る。覆土は砂層が主体であった。

時期 出土遺物には弥生時代壺・甕、須恵器の坏片があり、散漫な状態である。第90図の3は鉢で流れ込みと思われる。出土遺物から奈良時代以降と思われる。

2) M2号溝状遺構

遺構 (第89図)

検出位置 Kく2、Kけ2、Kこ2グリッド。**重複関係** Y14号住居址に破壊される。南側は調査区外となる。**形状** 検出長8.6m、幅1～1.2m、深さ10～40cm前後を測る。Y14号住居址の北側には検出されなかった。レベル値はほぼ同じ状態であった。

遺物 (第90図)

出土遺物には弥生時代壺・甕があり、散漫な状態であるが、底面に1・2の壺と甕が同一地点から潰れた状態で、出土している。

時期 出土遺物から弥生時代後期前半と思われる。

3) M3号溝状遺構

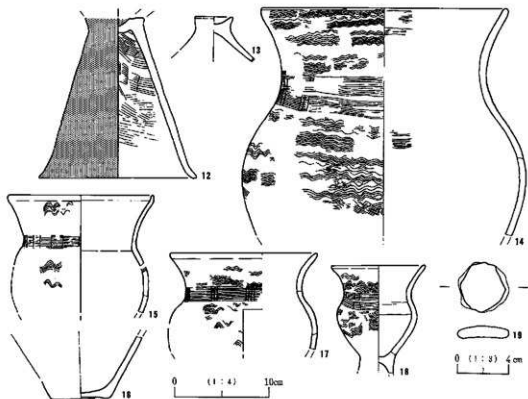
遺構 (第91図)

検出位置 Aお10、Aか9・10、Aき9・10、Aく8・9、Aけ8・9、Aこ8、Bあ7・8、Bい7グリッド。**重複関係** Y24号住居址に破壊される。Q1号特殊遺構に破壊される。**形状** 検出長29.3m、幅1.4～2.3m、深さ86cm前後を測る。レベル値はほぼ同じ状態であった。断面形態は段落ちの形態を呈し、V字状を呈してはいないが環濠と思われる。

遺物 (第90・92図)

出土遺物には弥生時代壺・甕・高坏等があり、覆土中から多くの土器が出土している。4、5は什器形態の鉢で、内外面赤色塗彩されている。6、8、11、12は供献形態の高坏で、6は赤色塗彩が見られない。7、9、10は貯蔵形態の壺で、外面赤色塗彩が施される。7は胴部下半から底部にかけて内湾している。13は蓋で14～16は煮沸形態の甕である。14は胴部球形を呈し、櫛描き簾状文が2対で施される。15は胴部が球状、口縁部が反外し受け口状を呈す甕で、摩滅により文様がよく読みとれない。18は台付き甕である。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第92図 M3・4号溝状遺構出土遺物実測図

4) M4号溝状遺構

遺構 (第92図)

検出位置 Aく8、Aけ7・8、Aこ6・7、Bあ6・7、Bい7グリッド。重複関係 M5号溝状遺構に破壊される。南側は調査区外となる。形状 検出長13.2m、幅1.4~2.3m、深さ84~105cm前後を測る。レベル値はほぼ同じ状態であった。

遺物 (第91図)

出土遺物には弥生時代壺・甕があり、散漫な状態で、図示できるものは1の上器片円盤のみで、甕の転用である。

時期 出土遺物から弥生時代後期と思われる。

5) M5号溝状遺構

遺構 (第91図)

検出位置 Aお8・9、Aか8・9、Aき7・8・9、Aく6・7・8、Aけ5・6・7、Aこ4・5・6、Bあ4・5グリッド。重複関係 Y14号住居址に破壊される。南側は調査区外となる。形状 検出長33m、深さ27~43cm前後を測る。幅は調査区外に延びるため、不明である。レベル値はほぼ同じ状態であった。本址は、低地の一部と考えた方がよいかもしれない。

時期 出土遺物には、弥生土器の壺・甕等があるが、図示できるものはない。弥生時代後期と

思われる。

第4節 特殊遺構

1) Q1号特殊遺構

遺 構 (第93図)

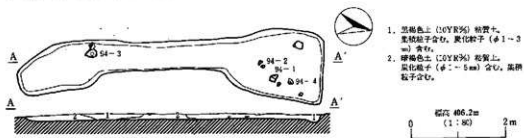
検出位置 Aく9、Aけ9、Fけ8、Fこ8グリッド。重複関係 M3号溝状遺構を破壊する。

形状 検出長6.4m、幅0.6~1.5m、深さ9~15cm前後を測る。形状が一定でないため特殊遺構とした。

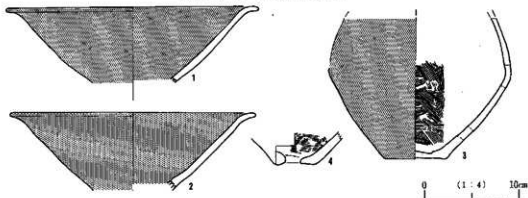
遺 物 (第94図)

出土遺物には壺・甕等の弥生土器があり、比較的遺物量がある。1、2は供状形態の高杯で、内外面に赤色塗彩され、口縁部で外反する。3は胴部中位で屈曲する壺である。4は瓶である。

時 期 出土遺物から弥生時代後期と思われる。



第93図 Q1号特殊遺構実測図



第94図 Q1号特殊遺構出土遺物実測図

第5節 その他の遺物

1) 縄文土器 (第95・96図)

(1) 出土土器の分類

縄文土器の出土は、遺物量は多いわけではなく、ほとんどが破片であるが、本調査区の中で体系的に見られ、弥生時代後期後半に所属すると考えられている住居址の覆土中、遺構の検出を行った地山のふい黄褐色粘質土からも検出されている。あえていうならば、調査区の東側に多く出土していると思われる。縄文時代の遺構としては捉える事ができなかったが、周辺に遺構が存在する事も考えられる。

本節では、出土した縄文土器を時期差等により、下記のように分類した。

第1群土器 前期の胎土に繊維を含むもの (第96図1～4)

第2群土器 前期末葉の土器群と思われるもの (第96図5～17)

第3群土器 中期初頭と思われるもの (第96図18)

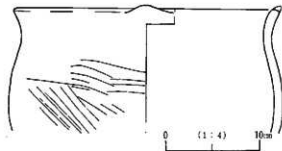
第4群土器 中期後半の土器群と思われるもの (第96図19・20)

第5群土器 後期の土器群と思われるもの (第96図21～25)

第6群土器 晩期の土器群と思われるもの (第95図・第96図26～30)

第1群土器

胴部以下の破片が1、2である。胎土に繊維を多く含み、地文にLRの縄文を回転させるもの(1)、RLの縄文を回転させるもの(2)、胎土に繊維が少なく有尾式の胎土に似たもの(3)、地文にRLの縄文を回転させた繊維の少ない、黒浜式と思われるもの(4)がある。



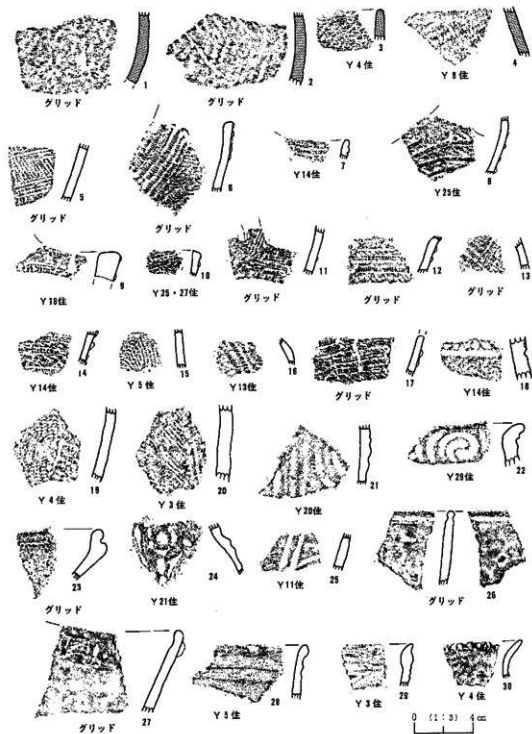
第95図 グリッド出土縄文土器実測図

第2群土器

平行沈線文と斜走沈線文の組合わさったもの(5)、縄文地に粘土帯を貼付し、連続爪形文を施す三善提式と思われるもの(6～17)がある。口縁部が波状を呈すものは6～9、11である。地縄文はRLのものが多い。14は粘土帯を鋸歯状に貼付する。

第3群土器

本群の土器は1点で、円形の刺突を横位に、沈線をその下に施す。



第96図 調査区出土縄文土器拓影図

第4群土器

加曾利E式の上器で、19は地縄文にRL、垂下する沈線によって区画されるものである。加曾利E4式と思われる。

第5群土器

堀之内I式と思われる土器群である。沈線による渦巻文の21、22と細い沈線の23、胴部に渦巻文の24がある。

第6群土器

内外面に沈線がある26、口縁部に貼付文で波状口縁になるとと思われる27、2条の沈線がある28、水I式とも考えられる29、口縁に刻み目を有する30、管内皮痕による水I式（第95図）がある。

2) グリッド・ビット出土遺物

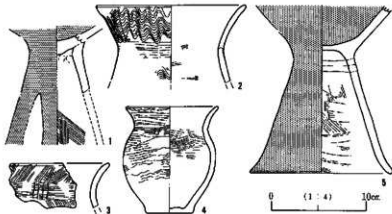
遺物（第97図）

グリッド・ビットから、出土した弥生土器のうち図示できたものである。

ビット出土遺物は、1、2、3で1、2はP58からの出土である。他はグリッド遺物である。

1は三角透かし孔を

有する赤色塗彩の施される高環、2は口縁部が外反する甕、3は櫛描き斜走文の施される甕、4は摩滅により、文様のはっきりしない小型甕、5は高環である。



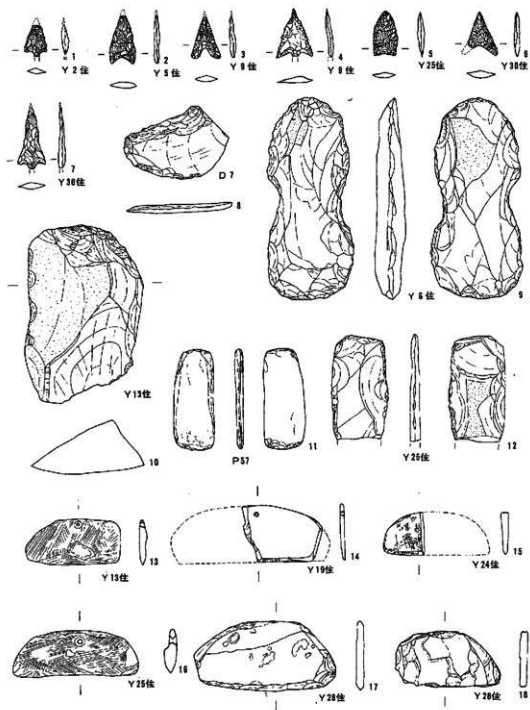
第97図 グリッド・ビット出土弥生土器実測図

3) 石器（第98図）

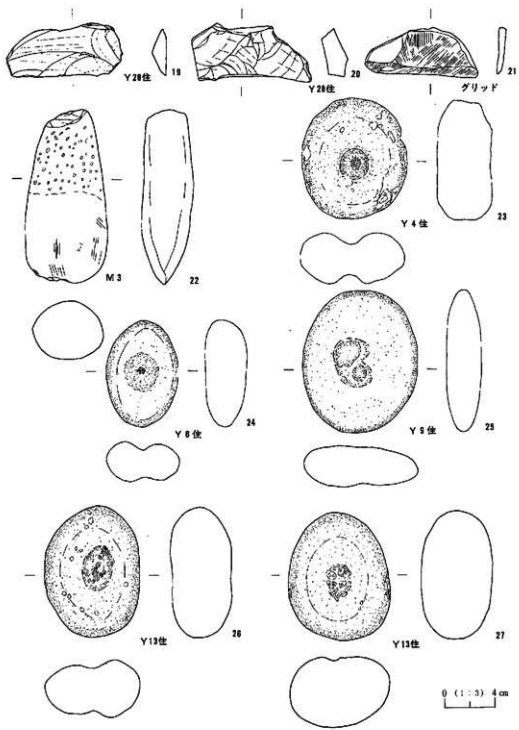
調査区内の遺構出土の石器やグリッド出土の石器を一括した。

(1) 石 鏃

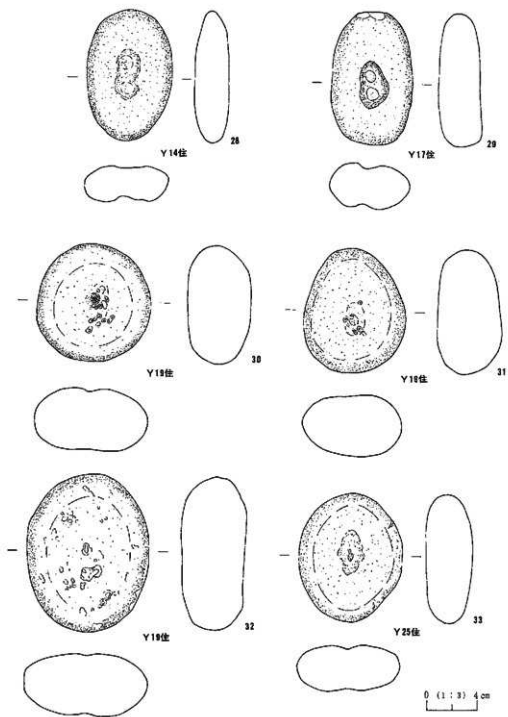
無茎鏃と有茎鏃があり、石質は黒曜石が主体を占めるが、チャート、頁岩もある。1は黒曜石製の平基有茎鏃で、縄文晩期的な形態を呈する。2は黒曜石製の凹基無茎鏃で縄文後期的な形態である。3はチャート製の凹基無茎鏃で、基部に抉りを持つ。4は頁岩製の凹基有茎鏃で、縄文晩期的な形態を呈する。5は黒曜石製の平基無茎鏃、6は黒曜石製の凹基有茎鏃、7は頁岩製の



第98图 出土石器实测图 (1~7-1:2·他:1:8)



第99図 出土石器実測図



第100图 出土石器实测图

作りが粗雑な平基有茎鏃である。すべてが住居址の覆土中からの出土である。

(2) 刃器・石核

8は掻器と思われ、刃部側縁が連続的に作られる。土坑址からの出土である。10は石核のようであるが、側縁に剝離が見られるため、刃器とした。Y13号住居址からの出土である。

(3) 打製石斧

9は分銅形を早する安山岩製の打製石鏃である。側縁に磨られた痕跡が僅かであるが観察できる。Y6号住居址の覆土中からの出土である。

(4) 磨製石包丁

石包丁には石質が粘板岩で、製品と未製品と思われるものがある。製品には13～16があり、未製品には11、12、17～21がある。13、14、16には一孔を有している。11は乳白色を早する素材を使用し、研磨による刃部が作り出されているため、石包丁の未製品とも考えられる。

12は、Y25号住居址からの出土で粘板岩製の未製品と思われる。13はY23号住居址の覆土、14はY19号住居址の覆土、15、16はY25号住居址の覆土、17はM3号溝状遺構の覆土、18～21はY28号住居址からの出土である。

(5) 磨製石斧

22は太型蛤刃石斧で石質は閃緑岩で、基部に敲打によるものか細かな凹凸が見られる。刃部に敲打痕がある。M3号溝状遺構覆土中からの出土である。

(6) 凹石

23～34が凹石で、調査で出土した石器の中で一番多い石器である。遺構出土のものだけを图示した。石質はほとんどが安山岩である。両面に凹みを有し、側縁に磨った痕跡がある。23はY4号住居址覆土、24はY6号住居址覆土、25はY9号住居址覆土、26はY13号住居址、27はY13号住居址覆土、28はY14号住居址覆土、29はY17号住居址覆土、30はY19号住居址床面、31、32はY19号住居址覆土、33はY25号住居址覆土、34はY25号住居址覆土からの出土である。

(7) 軽石製品

35は中央部が穿孔されたもので、半分が欠損している。凹形を呈すものと思われ、紡錘車とも考えられる。Y27号住居址覆土からの出土である。

(8) 磨石

36は欠損しているが、断面がカマボコ状を呈すものと思われる。グリッド出土で、石質は閃緑岩である。

(9) 石皿

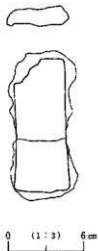
37はY36号住居址からの出土で、欠損品であるが2段状にくぼみを持つものと思われる。作業面が、磨られているため石皿として扱った。

00 台石

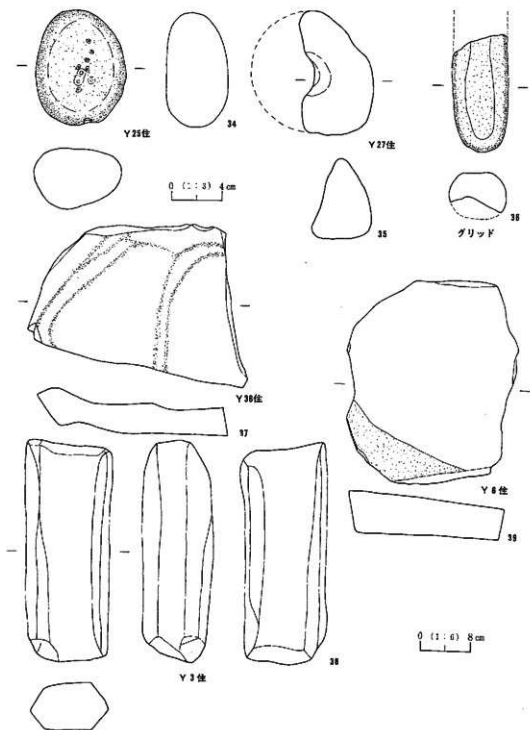
38はY3号住居址床面からの出土で、断面が六角形を呈し、すべての面が磨かれているようである。39はY6号住居址からの出土で、器表面が磨かれているが、石皿のような形態を呈していないため、台石として扱った。

(II) 弥生時代鉄斧

第101図は、Y8号住居址検出面から出土した鉄斧である。鉄斧頭は、板状品なのか着柄用の袋部が、つくのが不明である。刃先の形状も保存処理等が行われていないため、不明な状態である。



第101図 Y8号住居址出土鉄斧実測図



第102図 出土石器実測図

第V章 自然科学分析

塚田遺跡Ⅱ植物珪酸体からみた燃料材の推定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塚田遺跡(長野県埴科郡坂城町に所在)は、千曲川右岸の帯状に延びる氾濫原の中洲と思われる地点で弥生時代後期の住居跡が、後背湿地で弥生時代後期の遺物包含層や平安時代水田層などが検出されている。

今回発掘調査が行われた調査区では、弥生時代後期後半の焼失家屋が検出され、この焼失家屋に伴う炉の内部に焼土が認められた。そこで、当時ここで生活していた人々がどのような種類を燃料として利用していたのかを明らかにするため、築上中に含まれる植物珪酸体の産状を調べた。

1. 試料

試料は、弥生時代後期～古墳時代初期の住居跡で検出された炉の焼土および覆土から18点採取された。試料を室内にて観察したところ、試料の層相は橙色～褐色を呈する砂混じりシルト、あるいは暗褐色砂混じりシルトである。植物珪酸体分析は、この内の13点選択して行った(表1)。なお、採取された試料に便宜的に1～18までの試料番号を付した。

表1. 植物珪酸体分析試料の一覧

遺構名	試料番号	層相	時代	分析試料
Y3住 炉覆土	1	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y4住 炉	2	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y5住 炉	3	橙色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	
Y6住 炉1	4	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	
Y11住 炉焼土	5	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y12住 か1	6	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y13住 炉	7	橙色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	
Y16住 炉2焼土	8	褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y19住 炉焼上	9	明赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	
Y20住 炉1焼土	10	明赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y21住 炉焼土	11	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y22住 か1焼土	12	橙色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y23住 炉	13	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y25住 炉1	14	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	
Y27住 炉	15	明赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y28住 炉焼土	16	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y28住 炉焼土	17	暗褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○
Y30住 か1焼土	18	赤褐色砂混じりシルト	弥生時代後期～古墳時代初期	○

2. 植物珪酸体分析の方法

植物珪酸体分析は、湿重約10g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W、250KHz、1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、試料から分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。これを光学顕微鏡下で観察し、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部単細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

3. 結果および考察

結果は、表2に示す。植物珪酸体は、機動細胞珪酸体がほとんど検出されないが、短細胞珪酸体が多産する。植物珪酸体の群集組成は各住居から採取された試料とも類似しており、ネザサ節・他のタケ亜科が多産し、次いでキビ属・ヨシ属・ウシクサ族ススキ属・イチゴツナギ亜科が検出される。また、わずかながらイネ属なども検出される。この他、イネ属短細胞列・イネ属機動細胞列・キビ属短細胞列・ススキ属短細胞列・不明キビ型短細胞列わずかに検出される。

これらの種類の中で、植物珪酸体の細胞列は植物の組織片の存在を示唆している。これより、イネ・キビ属・ススキ属などが燃料材として利用されていた可能性がある。ただし、今回の試料採取が採取された炉の堆積状況や試料の採取層準・位置などが不明であり、ここで得られた植物珪酸体の中には、周辺土壤に元来含まれていたものや、住居焼失後あるいは住居跡埋積後の攪乱により混入したものなどが含まれている可能性がある。特に、キビ属・ネザサ節・ススキ属など比較的開けた場所に生育する種類以外に、ヨシ属やコブナグサ属など湿った場所に生育する種類が検出されていることからみても、炉の覆土に湿地に堆積した土壤が含まれていることがうかがえる。したがって、今後、遺構覆土の由来などを検討し、地山および遺構検出面の上位層について植物珪酸体組成と比較することが必要である。

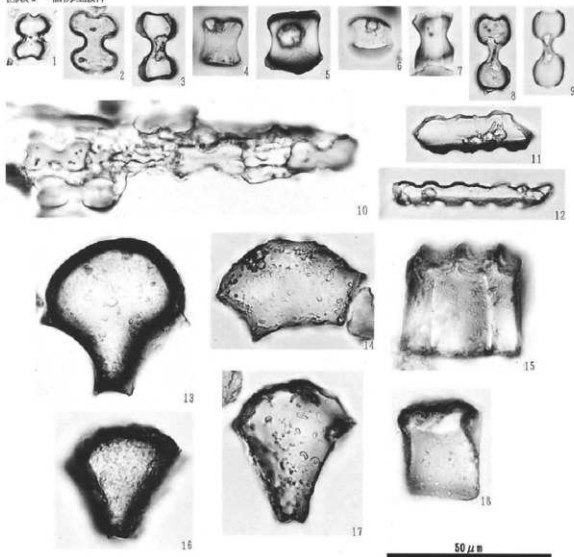
〈引用文献〉

近藤三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、P. 31-64.

表2. 植物珪酸体分析結果

種類 (Taxa)	試料番号	1	2	5	6	8	10	11	12	13	15	16	17	18	
イネ科葉部細胞珪酸体															
イネ族イネ属		1	3	1	-	-	-	1	-	1	-	5	1	1	
キビ族ヒユ属		-	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	
キビ族キビ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族エノコログサ属		-	4	2	-	-	1	-	1	1	1	3	-	-	
キビ族		24	11	29	9	3	15	14	5	14	17	17	4	16	
タケ亜科クマザサ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
タケ亜科ネザサ節		33	162	40	49	114	101	29	83	25	38	30	62	36	
タケ亜科ヤダケ属		-	-	-	-	2	1	3	-	-	-	1	-	-	
タケ亜科		106	176	59	62	79	173	30	145	66	88	50	109	81	
ヨシ属		23	24	45	29	49	39	29	44	27	20	20	10	26	
ウシクサ族コブナグサ属		1	5	8	8	1	6	8	2	9	2	3	-	4	
ウシクサ族スキ属		15	6	26	10	1	14	17	5	14	21	6	3	11	
イチゴツナギ亜科オオムギ族		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
イチゴツナギ亜科		13	47	40	36	41	35	18	39	19	12	11	38	24	
不明キビ型		112	91	118	147	72	127	117	80	91	81	107	41	89	
不明ヒゲシバ型		13	20	13	30	19	38	23	21	12	7	7	6	14	
不明ダンチク型		95	69	55	65	56	76	62	104	50	63	43	46	57	
イネ科葉身細胞珪酸体															
イネ族イネ属		-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	
タケ亜科クマザサ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	
タケ亜科ネザサ節		-	-	1	-	3	1	-	4	1	2	2	2	2	
タケ亜科		3	6	1	-	9	12	1	6	5	11	3	1	8	
ヨシ属		-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	
ウシクサ族		-	-	1	2	3	1	1	3	3	-	1	-	2	
シバ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
不明		1	1	12	1	7	16	12	13	18	8	2	11	3	
合 計															
イネ科葉部細胞珪酸体		437	619	436	445	437	628	353	529	339	350	303	321	360	
イネ科葉身細胞珪酸体		4	7	15	3	24	30	14	29	29	22	8	14	16	
検 出 個 数		441	626	451	448	461	658	367	558	368	372	311	335	376	
紙 種 別															
イネ属短穂稻列		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ属機軸稻列		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
キビ属短穂稻列		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
スキ属短穂稻列		-	-	-	-	-	3	-	-	2	2	-	-	1	
不明キビ属短穂稻列		-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	

図版1 植物柱胞体



- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1. イネ属根細胞柱胞体(Y4住戸:試料番号2) | 2. キビ属根細胞柱胞体(Y11住戸焼土:試料番号5) |
| 3. エノクログサ属根細胞柱胞体(Y28住戸焼土:試料番号16) | 4. ネザサ節根細胞柱胞体(Y3住戸覆土:試料番号1) |
| 5. タケ亜科根細胞柱胞体(Y30住戸焼土:試料番号18) | 6. ヨシ属根細胞柱胞体(Y11住戸焼土:試料番号5) |
| 7. コブナグサ属根細胞柱胞体(Y11住戸焼土:試料番号5) | 8. ススキ属根細胞柱胞体(Y20住戸焼土:試料番号18) |
| 9. ススキ根細胞柱胞体(Y11住戸焼土:試料番号5) | 10. ススキ属根細胞柱胞体列(Y27住戸:試料番号15) |
| 11. イチゴツナキ亜科根細胞柱胞体(Y30住戸焼土:試料番号18) | 12. イチゴツナキ亜科根細胞柱胞体(Y3住戸覆土:試料番号1) |
| 13. イネ属根細胞柱胞体(Y28住戸焼土:試料番号16) | 14. クマザサ属根細胞柱胞体(Y30住戸焼土:試料番号18) |
| 15. ネザサ節根細胞柱胞体(Y22住戸焼土:試料番号12) | 16. タケ亜科根細胞柱胞体(Y20住戸焼土:試料番号10) |
| 17. タケ亜科根細胞柱胞体(Y20住戸焼土:試料番号10) | 18. ウシクサ族根細胞柱胞体(Y23住戸:試料番号13) |

塚田遺跡における古環境復元

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塚田遺跡（長野県埴科郡取城町所在）は、千曲川右岸の帯状に延びる氾濫原上の中洲から後背湿地にかけて位置する。今回の発掘調査では、仁和4年（888年）の洪水に伴うと考えられる氾濫砂層に覆われた平安時代の水田層のほか、弥生時代後期の溝・土坑や、各時期の遺物が検出された。特に弥生時代後期の遺物が比較的まとまって出土しており、本遺跡あるいはその周辺の自然堤防上や微高地上には、集落が分布していたのではないかと推測されている。また、平安時代の水田層と弥生時代後期の遺物包含層の間にも、古墳時代の水田層が存在する可能性が指摘されている。

今回の分析調査では、弥生時代後期～平安時代の古環境変遷と、調査区における稲作の消長を把握するために、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行う。

1. 試料

試料は、東西方向に延びる試掘トレンチ北壁の西部（A-B断面）と中部（C-D断面）の2ヶ所の断面から、平安時代前期の水田層～弥生時代後期の遺物包含層を中心に層位試料として10点（試料番号1～10）を採取した（図1）。堆積物の層相および分析調査目的を考慮して、珪藻分析7点、花粉分析2点、植物珪酸体分析10点の試料を選択して分析を行った。

2. 分析方法

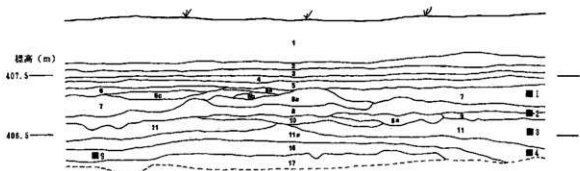
(1) 珪藻分析

湿重約7gの試料について、過酸化水素水（ H_2O_2 ）、塩酸（HCl）の順に化学処理を施し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。

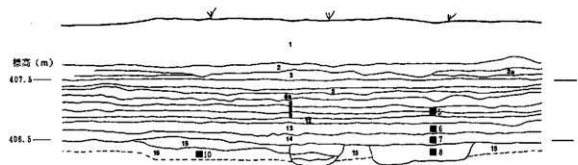
検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の副線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K, Krammer & Lange-Bertalot (1986・1988・1991) などを用いた。なお、珪藻の生態性の解説を表1に示す。

堆積環境の解析にあたっては、まず塩分濃度に対する適応性から産出種を海水-汽水-淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応性について生態区分する。そして、産出率3%以上を示す分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作製する。図中の海水-汽水-淡水生種の帯グラフと各種産出率・完形殻産出率は全体基数、

A-B断面



C-D断面



土層説明

- 1層 埋上、グラウンド造成工事に伴う腐土。
- 2層 暗灰色粘土層 (N3/7)。現代水田層。
- 2a層 暗灰色粘土層 (N3/7)。現代水田層。部分的に溶脱化が認められる。
- 3層 灰褐色砂土層 (2.5Y5/3)。水田溶脱層。
- 4層 暗褐色粘土層 (7.5YR5/3)。水田集積層。
- 5層 黄褐色粘土層 (10YR4/3)。暗灰色粘土をブロック状 (φ30-50cm) に含む大粒 (φ5-15cm) の黒色スコリアを均等に含む。
- 6層 黒褐色粘層 (2.5Y3/1)。暗灰色粘質土を粒粒状に含み、黒色スコリアを含む。
- 6a層 褐色砂層 (10YR4/4)。暗灰色粘質土を粒粒状に含み、黒色スコリアを含む。
- 6b層 褐色砂層 (10YR4/4)。暗灰色粘質土を粒粒状に含み、茶褐色粘土を含む。灰色スコリアを含む。
- 6c層 黒褐色粘層 (2.5Y3/1)。6層より粘質土を多量に含み、黒色スコリアを含む。
- 7層 黒褐色粘層 (2.5Y3/2)。一部に6層の溶脱化が認められ実質している。
- 8層 灰色粘土層 (5Y4/1)。平安水田層。
- 8a層 灰色粘土層 (5Y4/1)。暗褐色粘土を粒粒状に含み、砂質土を若干含む (上部に対して多い)。大粒砂礫層。
- 9層 褐色粘土層 (7.5YR4/3)。8層の砂礫層。
- 10層 暗褐色粘質土層 (2.5Y3/2)。堆積物を多く含む部分的に溶脱化が認められる。
- 11層 オリーブ褐色粘質土層 (2.5Y4/3)。暗褐色粘質土を少量含む。砂質・礫まじりあり。
- 11a層 オリーブ褐色粘質土層 (2.5Y4/3)。11層に比べ粘質土を多く含む。
- 12層 灰オリーブ褐色粘土質 (5Y5/2)。溶脱化が部分的に認められる。8層の集積層。
- 13層 暗褐色粘質土-オリーブ褐色粘土層 (10YR2/2-5Y3/1)。水田層?
- 14層 黄褐色粘土層 (2.5Y4/1)。13層の溶脱層?
- 15層 黄褐色粘質土層 (10YR2/2)。炭化樹・炭化粒子を多量に含む。弥生時代後期の遺物を含む層。
- 16層 オリーブ黒色粘質土層 (7.5YR3/1)。炭化物・炭化粒子を多量に含む。弥生時代後期の遺物を含む層。
- 17層 灰シルト層 (5Y4/1)。粒粒層を上部に、炭化粒子を少量含む。弥生時代後期の遺物を含む層。
- 1等土壌 表土+中部は、黒褐色粘土層。炭化材を少量含む。下部は、粘性はあるが明らかに欠ける黒色炭化土。炭化材・粘土を多量に含む。
- 2号土 表土上部は、暗褐色粘質土。炭化材・炭化粒子を多量に含む。下部は、砂質土の混入ある灰オリーブ粘土層。

第183図 断面図および試料採取位置 (添付資料に基づく)

珪藻分析… 2・3・4・6・7・9・10

花粉分析… 2・8

植物珪酸体分析… 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

表 3. 珪藻化石の生態性

	塩分濃度に対する区分	塩分に対する生態性	生 産 場 所 (河)
淡水生物	珪藻生物 (Polyhalobica)	塩分濃度が約 0.4~1.0‰以下に生育するもの	河川産物等珪藻、淡水湖産物
	真塩性珪藻 (Euryhalobica)	海水中産、塩分濃度 0.4~1.0‰以下に出現するもの	一般海産 (ごく大規模な河口と大規模な湖の湖産)
汽水生物	汽水生物: 塩分濃度 0.4~1.0‰以下に出現するもの	汽水生物: 塩分濃度 0.4~1.0‰以下に出現するもの	河口・汽水湖・沼澤・汽水湖・潟など
	中塩性珪藻 (Mesohalobica)	汽水生物: 塩分濃度 0.4~1.0‰以下に出現するもの	汽水湖・汽水湖・汽水湖・汽水湖
海水生物	真塩性珪藻 (Oligohalobica)	海水生物: 塩分濃度 0.4~1.0‰以下に出現するもの	一般海産 (河口産物・汽水湖・汽水湖・汽水湖・汽水湖)
塩分・pH・塩分に対する区分	真塩性珪藻 (Euryhalobica)	小量の塩分がある方がよく生育するもの	河川産物 (汽水湖・汽水湖・汽水湖)
	汽水生物 (Mesohalobica)	小量の塩分があってもこれ以上よく生育することができるもの	一般海産 (河口産物・汽水湖・汽水湖)
	真塩性珪藻 (Euryhalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	一般海産 (河口産物・汽水湖・汽水湖)
	汽水生物 (Mesohalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	一般海産 (河口産物・汽水湖・汽水湖)
	汽水生物 (Mesohalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	一般海産 (河口産物・汽水湖・汽水湖)
	汽水生物 (Mesohalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	大量の塩分があってもこれ以上よく生育できないもの	一般海産 (河口産物・汽水湖・汽水湖)
pH に対する区分	汽水生物 (Mesohalobica)	pH 7.0 以下に出現。特に pH 7.5 以下の酸性水域で最もよく生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖 (酸性水域)
	汽水生物 (Mesohalobica)	pH 7.0 付近に出現。pH 7.0 以下の酸性水域で最もよく生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	pH 7.0 付近の汽水湖で最もよく生育するもの	一般海産 (河口産物・汽水湖・汽水湖)
	汽水生物 (Mesohalobica)	pH 7.0 付近に出現。pH 7.0 以上の酸性水域で最もよく生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	特に pH 7.5 以上のアルカリ性水域で最もよく生育するもの	アルカリ性水域 (少ない)
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水に耐性があるが、汽水にも生育するもの	汽水湖・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
塩分・pH・塩分に対する区分	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖
	汽水生物 (Mesohalobica)	汽水にも生育するもの	河口・汽水湖・汽水湖

注: 塩分に対する区分は 10^{-2} (ppt)、pH と塩分に対する区分は、Hustedt (1937-1950) による。

淡水生物の生態性の帯グラフは淡水生物の合計を基数とした相対頻度で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示した。なお、●は 1% 未満の産出、○は 100 個体未満の試料における産出を示す。環境解析にあたっては、安藤 (1990) の環境指標種群を参考とした。

(2) 花粉分析

湿重約 10 g の試料について、IIF 処理、重液分離 (ZnBr₂: 比重 2.2)、アセトリシス処理、KOH 処理の順に物理・化学処理を施し、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する種類 (Taxa) の同定・計数を行う。結果は、同定・計数結果の一覧表として示す。

(3) 植物珪酸体分析

湿重約 5 g の試料について、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離 (臭化亜鉛: 比重 2.3) を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度で希釈した後、カバー・ガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現するイネ科植物の葉部 (葉身と葉鞘) の短細胞に由来する植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を同定・計数する。同定に際しては近藤・佐瀬

(1986) の分類を参考にする。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満の試料については、組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を+で示す。

3. 結果

(1) 珪藻化石の産状

珪藻分析結果を第103図・表4に示す。分析を行ったA-B断面とC-D断面の各層準の試料からは珪藻化石が比較的良好に産出する。各断面ごとに珪藻化石の産状について述べる。

1) A-B断面

珪藻化石群集は、11a層と11層、11層と9・8層の間の層準で層位的に変化する。16層・11層では、コケの表面や土壌表面など陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻が70%前後と優占する。この中では、とくに耐乾性の強い陸生珪藻のA群(伊藤・堀内, 1991)の*Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*が多産する。このほか、中～下流性河川指標種群(安藤, 1990)の*Achnanthes lanceolata*, *Cymbella sinuata*, 好流水性の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*, *Gomphonema clevei*などをわずかに伴う。

11層になると、陸生珪藻が減少し、中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*, *Cymbella sinuata*, *Rhoicosphenia abbreviata*, 好流水性の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*, *Gomphonema clevei*, *Cymbella turgidula* var. *nipponica*, *Navicula elginensis* var. *neglecta*などの好流水性種が増加する。

8層になると、好流水性種が減少し、流水不定性種が増加する。流水不定性種では好汚濁性種の*Gomphonema parvulum*、好塩性種の*Rhopalodia gibberula*の産状が□立ち、*Rhopalodia gibba*などを伴う。このほか、好流水性の*Caloneis bacillum*, *Cocconeis placentula* var. *euglypta*、好汚濁性種の*Navicula pupula*、富栄養水域に多く認められる*Navicula confervacea*などを伴う。このうち*Gomphonema parvulum*, *Navicula confervacea*は、既成の有機化合物を窒素源として同化し、自らの体の有機物に組み替えることのできる窒素従属栄養種(Patrick, 1977)とされる。

2) C-D断面

珪藻化石群集は16層と14層の間の層準で層位的に変化する。16層の珪藻化石群集はA-B断面の同層と類似し、陸生珪藻が優占する。14層・13層になると、陸生珪藻は減少し、好流水性種が増加する。本群集はA-B断面の11層の群集に類似する。

表 4. 珪藻分析結果

Species Name	前記 肩注 試料番号	Ecology			A-B			C-D		
		H.R.	pH	C.R.	9	11	15	13	14	16
					2	3	4	9	6	7
<i>Nitzschia marginata</i> var. <i>submarginata</i> Grunow		E.alk								
<i>Diatoma submarginatum</i> Grunow		Rob. Meth.								
<i>Nitzschia linearis</i> var. <i>richardii</i> Grunow		Chloody								
♀ <i>Achnanthes clava</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	l-ph						1
♀ <i>Achnanthes elongata</i> H. Kobayasi		Ogh-ind	ind	r-ph						1
♀ <i>Achnanthes crenata</i> Grunow		Ogh-ind	al-bi	al-bi	2	1				1
♀ <i>Achnanthes cingula</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	ind						1
♀ [J] <i>Achnanthes japonica</i> H. Kobayasi		Ogh-ind	al-II	r-ph			1			
[K] <i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.) Grunow		Ogh-ind	al-II	r-ph	2	4	3	4	4	6
<i>Achnanthes sinuata</i> Kuetzing		Ogh-ind	al-II	ind		1	3			1
♀ <i>Achnanthes subuloides</i> Hustadt		Ogh-ind	ind	r-ph		1				3
<i>Achnanthes tropica</i> Hustadt		Ogh-ind	ind	ind		1				1
<i>Achnanthes isariensis</i> Krammer		Ogh-unk	unk	unk						1
[A] <i>Achnanthes montana</i> Krammer		Ogh-ind	ind	ind		5	56	38		3
<i>Achnanthes ovata</i> var. <i>affinis</i> (Kütz.) V. Heurck		Ogh-ind	al-bi	ind	3					2
<i>Achnanthes pedicellata</i> Grunow		Ogh-ind	al-bi	ind	1		2			3
[M] <i>Achnanthes angustata</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	l-bi						
[N] <i>Achnanthes distans</i> (Fr.) Grunow		Ogh-hob	ac-II	l-bi						1
[N] <i>Achnanthes granulata</i> (Fr.) Grunow		Ogh-ind	ac-II	l-bi		4		4		
[N] <i>Achnanthes granulata</i> var. <i>angustata</i> (Fr.) Grunow		Ogh-ind	ac-II	l-ph						
<i>Achnanthes italica</i> (Gr.) Grunow		Ogh-ind	ac-II	l-ph		3	1		2	9
<i>Bacillaria paxillata</i> Grunow		Ogh-bil	al-bi	l-ph						1
[A] <i>Caloneis acropilata</i> Boeck		Ogh-ind	al-II	ind	1					
<i>Caloneis bacillata</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	r-ph	7	2				1
<i>Caloneis agardii</i> (Gr.) Grunow		Ogh-hob	ac-II	ind			2			
[B] <i>Caloneis leptocoma</i> Krammer & Lange - Herold		Ogh-ind	ind	ind		1				1
<i>Caloneis schwanzeniana</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	l-bi	2					
<i>Caloneis silicula</i> (Gr.) Grunow		Ogh-ind	al-II	ind	6			5		
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>intermedia</i> Meyer		Ogh-ind	al-II	ind	1					
<i>Caloneis</i> spp.		Ogh-unk	unk	unk			1			
♀ <i>Cocconeis arcus</i> var. <i>retata</i> (Cl.) Krammer		Ogh-ind	ind	r-ph						2
<i>Cocconeis placentalis</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-C	ind	1	5			1	5
♀ <i>Cocconeis placentalis</i> var. <i>angustata</i> (Gr.) Grunow		Ogh-ind	al-C	r-ph	6	11	2	3	6	20
♀ <i>Cocconeis placentalis</i> var. <i>busiana</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-C	ind		4				1
[M] <i>Cyclotella costata</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-II	ind			2			2
<i>Cyclotella coactata</i> Hustadt		Ogh-ind	al-II	ind						
[M] <i>Cyclotella stelligera</i> Grunow		Ogh-ind	al-bi	l-bi			1			2
<i>Cyclotella</i> spp.		Ogh-unk	unk	unk						
<i>Cymbella cyathiformis</i> (Ag.) V. Heurck		Ogh-ind	al-II	l-bi					2	
[O] <i>Cymbella ehrenbergii</i> Kuetzing		Ogh-ind	al-II	l-bi						1
<i>Cymbella gracilis</i> (Rabh.) Grunow		Ogh-ind	ind	l-ph	1					
[O] <i>Cymbella sinuata</i> Grunow		Ogh-ind	al-bi	l-bi	2					
♀ [K] <i>Cymbella sinuata</i> Hustadt		Ogh-ind	ind	r-ph	2	3			1	3
[O] <i>Cymbella sinuata</i> var. <i>arenaria</i> (Gr.) Grunow		Ogh-ind	ind	ind						
<i>Cymbella parvifolia</i> A. Grunow		Ogh-bil	ac-II	l-ph	2					
♀ <i>Cymbella sinuata</i> Hustadt		Ogh-ind	ind	ind	6	4	1	1	3	1
♀ [K] <i>Cymbella sinuata</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	r-ph		10	3	5	4	6
♀ <i>Cymbella sinuata</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-II	ind	4	2			4	1
♀ [K] <i>Cymbella targuata</i> Grunow		Ogh-ind	ind	r-ph		4	1		4	2
♀ <i>Cymbella targuata</i> var. <i>nipponica</i> Shimozono		Ogh-ind	ind	r-ph		6			1	4
♀ [K] <i>Diatoma hiemale</i> var. <i>nauseosum</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-III	r-ph		4	1		2	
<i>Diatoma ovalis</i> (Hilleb.) Grunow		Ogh-ind	al-III	ind	4	1			4	1
<i>Diatoma parvum</i> Grunow		Ogh-ind	ind	ind	1				1	
<i>Epithemia subulata</i> (Kütz.) Hustadt		Ogh-ind	ac-II	ind		3			1	
<i>Epithemia</i> spp.		Ogh-ind	ac-II	l-bi		1			1	3
<i>Epithemia longica</i> (Ehr.) Kuetzing		Ogh-ind	ac-II	l-ph		1			3	
<i>Epithemia longica</i> var. <i>ovata</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	ac-II	ind		3	1			
<i>Epithemia</i> spp.		Ogh-unk	unk	unk		1				
<i>Eunthia arcus</i> var. <i>bicolor</i> Grunow		Ogh-hob	ac-II	l-ph			1			
[A] <i>Eunthia bicolorata</i> H. Kobayasi		Ogh-ind	ind	ind			7	1		
[O] <i>Eunthia pectinatis</i> var. <i>nana</i> (Kütz.) Hustadt		Ogh-hob	ac-II	ind		1			3	2
[B] <i>Eunthia pectinatis</i> Grunow		Ogh-ind	ind	ind			1			
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	r-ph						1
♀ <i>Fragilaria capricornis</i> Grunow		Ogh-ind	ind	ind						1
<i>Fragilaria contracta</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-C	l-ph			1			2
<i>Fragilaria contracta</i> var. <i>rhodii</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-C	l-ph			1			
<i>Fragilaria contracta</i> var. <i>subulata</i> Hustadt		Ogh-ind	al-C	ind			1			
♀ <i>Fragilaria contracta</i> var. <i>ovata</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-C	l-ph	2		3			2
<i>Fragilaria japonica</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	ind			1			2
<i>Fragilaria leptanorum</i> (Fr.) Hustadt		Ogh-ind	al-II	l-ph						1
♀ <i>Fragilaria sinuata</i> Ehrenberg		Ogh-ind	al-II	ind			1			
♀ <i>Fragilaria sinuata</i> var. <i>leptanorum</i> (Fr.) Hustadt		Ogh-ind	al-II	ind						
♀ <i>Fragilaria subulata</i> (Kütz.) Hustadt		Ogh-ind	al-II	ind			2	2	1	4
<i>Fragilaria sinuata</i> Hustadt		Ogh-ind	ac-II	l-ph			2			
<i>Fragilaria vulgaris</i> (Tswai.) Grunow		Ogh-ind	ind	ind	2				1	3
[O] <i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg		Ogh-ind	al-II	l-ph						1
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kütz.) Hustadt		Ogh-ind	al-II	ind			2		1	2
<i>Gomphonema angustum</i> var. <i>sinuatum</i> Hustadt		Ogh-ind	ac-C	unk			1			
<i>Gomphonema angustum</i> Grunow		Ogh-ind	al-II	ind	1	2				

表 4. 珪藻分析結果のつづき

Species Name	前掲 図号 植物番号	Ecology			A-B				C-D			
		H.R.	pH	C.R.	7	11	15	19	16	23	29	16
					2	4	9	6	7	10		
# <i>Gomphonema cleve</i> Fricke		Ogh-ind	al-bi	r-ph	-	5	1	4	4	10	3	
<i>Gomphonema cleve</i> var. <i>insuetudinem</i> H. Kobayasi		Ogh-ind	ind	r-ph	-	1	-	-	-	-	-	
[O] <i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg		Ogh-ind	al-bi	r-ph	4	-	-	-	-	2	-	
<i>Gomphonema minutum</i> Agardh Agardh		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	-	2	-	-	
<i>Gomphonema portense</i> Fricke		Ogh-inc	al-l	ind	23	10	2	1	2	2	2	
<i>Gomphonema punctatum</i> Grun. Reichardt & Lange-Bertinet		Ogh-inc	al-l	ind	4	6	2	1	6	10	1	
# [K] <i>Gomphonema quadrangulum</i> (Oestr.) Wisl.		Ogt-inc	al-bi	r-ph	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Gomphonema subclavatum</i> (Czar.) Grunow		Ogh-inc	al-l	inc.	-	-	1	-	-	1	-	
[J] <i>Gomphonema tenax</i> Fricke		Ogt-inc	ind	r-ph	-	1	-	1	-	-	-	
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg		Ogt-inc	al-l	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Gomphonema</i> sp.		Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	2	-	
<i>Gyrodinium scolopendria</i> (Rabh.) Cleve		Ogh-inc	al-bi	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	
[A] <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-inc	al-l	ind	-	15	52	50	5	17	18	
[A] <i>Melosira roseana</i> Rabenhof		Ogh-inc	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	
[M] <i>Melosira cf. solida</i> Eidebrandt		Ogh-unk	unk	l-ph	-	4	3	1	3	3	3	
# [K] <i>Meridion circulare</i> var. <i>convictum</i> (Ralfs) V. Itinck		Ogh-inc	al-l	r-ph	-	1	-	1	3	-	-	
<i>Nitzschia americana</i> Ehrenberg		Ogh-inc	al-l	l-ph	-	-	-	2	-	-	-	
# [K] <i>Nitzschia capitata</i> Grunow		Ogh-inc	al-l	r-ph	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Nitzschia cincta</i> (Ehr.) Kuetzing		Ogh-bi	al-l	ind	-	-	-	2	-	-	-	
# [B] <i>Nitzschia costata</i> (Kuetz.) Grunow		Ogh-inc	al-bi	ind	7	1	-	1	1	1	-	
# [A] <i>Nitzschia costata</i> Grunow		Ogh-inc	al-l	ind	-	2	4	4	3	3	2	
# <i>Nitzschia cuspidata</i> Kuetzing		Ogh-inc	al-bi	ind	1	-	-	-	-	-	-	
[K] <i>Nitzschia detrita</i> Oestr.		Ogh-inc	al-l	r-ph	-	-	-	-	-	1	1	
[O] <i>Nitzschia eliptica</i> (Ehr.) Ralfs		Ogt-inc	al-l	r-ph	-	2	-	1	2	-	-	
<i>Nitzschia eliptica</i> var. <i>causalis</i> H. Kobayasi		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Nitzschia eliptica</i> var. <i>neglecta</i> (Kraus.) Fricke		Ogh-inc	al-l	r-ph	3	6	-	1	24	-	-	
<i>Nitzschia lotzkyi</i> Grunow		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia laevissima</i> Kuetzing		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	2	-	-	-	
<i>Nitzschia meniscata</i> Schumann		Ogh-inc	al-l	r-ph	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Nitzschia nitens</i> Grunow		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Nitzschia ovalis</i> var. <i>minor</i> Patrick		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	1	-	-	-	
# [A] <i>Nitzschia malina</i> Kuetzing		Ogh-inc	al-l	ind	2	17	30	2	13	16	-	
[A] <i>Nitzschia malina</i> var. <i>ovoides</i> (Kuetz.) Cleve		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Nitzschia planibilla</i> Hustedt		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	1	-	-	-	
# <i>Nitzschia pupula</i> Kuetzing		Ogh-inc	al-l	ind	8	6	-	10	-	1	-	
<i>Nitzschia radiata</i> Kuetzing		Ogh-inc	al-l	ind	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Nitzschia subquadrata</i> Hustedt		Ogt-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	
[A] <i>Nitzschia subquadrata</i> H. Kobayasi		Ogt-inc	inc	ind	-	-	-	-	-	-	-	
[K] <i>Nitzschia viridula</i> var. <i>rotundata</i> (Kuetz.) Cleve		Ogt-inc	al-l	r-ph	-	-	-	1	-	2	-	
<i>Nitzschia</i> sp.		Ogt-unk	unk	unk	-	-	2	1	-	-	-	
<i>Nitzschia affinis</i> var. <i>longicauda</i> Grunow		Ogt-inc	ac-3	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	
[A] <i>Nitzschia albicans</i> Hustedt		Ogt-inc	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow		Ogt-inc	ind	r-ph	4	-	-	1	-	-	-	
<i>Nitzschia producta</i> (W. Smith) Cleve		Ogt-inc	ind	inc.	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow		Ogt-inc	al-l	inc.	4	1	-	3	-	2	1	
<i>Nitzschia classii</i> Hustez		Ogt-bi	al-l	inc.	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Nitzschia fructuosa</i> (Kuetz.) Grunow		Ogt-bi	al-l	inc.	1	4	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia hantzschiana</i> Rabenhof		Ogt-bi	al-l	inc.	-	-	-	3	-	-	-	
<i>Nitzschia linearis</i> W. Smith		Ogt-inc	al-l	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	
[A] <i>Nitzschia nana</i> Grunow		Ogt-inc	ind	ind	-	-	-	1	-	-	-	
# <i>Nitzschia solan</i> (Kuetz.) W. Smith		Ogt-inc	al-l	inc.	1	-	1	-	-	-	-	
[A] <i>Nitzschia peruviana</i> (Grun.) Pergande		Ogt-inc	ind	ind	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Opphekoa maritima</i> Hustez		Ogt-bi	al-l	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	
[O] <i>Pinnularia scopulorum</i> W. Smith		Ogt-inc	al-l	l-ph	2	1	-	5	-	-	-	
[A] <i>Pinnularia alpestris</i> (Ag.) Cleve		Ogt-inc	ind	l-ph	5	1	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia brevis</i> (Grun.) Cleve		Ogt-hob	ac-bi	ind	2	1	-	1	-	-	-	
# <i>Pinnularia brevis</i> var. <i>amphioxys</i> (A. Mayer) Hustedt		Ogt-hob	ac-bi	ind	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia brevis</i> var. <i>montana</i> Hustedt		Ogt-inc	ac-l	r-ph	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Pinnularia divergens</i> W. Smith		Ogt-hob	ac-l	l-ph	-	-	-	3	-	-	-	
[O] <i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg		Ogt-inc	ac-l	ind	3	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia imperatrix</i> Hustez		Ogt-hob	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	
[A] <i>Pinnularia intermediata</i> (Largier) Cleve		Ogt-inc	ind	ind	1	-	-	-	-	-	-	
# <i>Pinnularia interrupta</i> W. Smith		Ogt-inc	ac-l	ind	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia mollensis</i> (Czar.) Cleve		Ogt-hob	ac-l	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia mollensis</i> (Czar.) W. Smith		Ogt-inc	ac-l	ind	1	-	-	1	-	-	-	
# <i>Pinnularia microcristata</i> (Czar.) Cleve		Ogt-inc	ac-l	ind	2	-	-	1	-	-	-	
<i>Pinnularia microcristata</i> var. <i>bravissima</i> (Kuetz.) Hustedt		Ogt-inc	ac-l	ind	4	-	-	2	-	-	-	
[O] <i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg		Ogt-hob	ac-l	l-ph	-	-	-	1	-	-	-	
[A] <i>Pinnularia schenckii</i> (Rabh.) Grunow		Ogt-inc	ind	ind	-	-	-	3	2	1	-	
[A] <i>Pinnularia schenckii</i> (Rabh.) Grunow		Ogt-inc	ind	ind	-	-	-	1	-	-	-	
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve		Ogt-inc	ac-l	l-ph	2	-	-	1	-	-	-	
<i>Pinnularia streptophylla</i> Cleve		Ogt-hob	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	
[A] <i>Pinnularia subquadrata</i> Grunow		Ogt-inc	ind	ind	1	1	-	5	-	1	-	
[O] <i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg		Ogt-hob	ac-l	ind	6	1	-	4	-	-	-	
<i>Pinnularia</i> sp.		Ogt-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-	
# [K] <i>Rhizosolenia abbreviata</i> (Ag.) Lange Bertinet		Ogt-hil	al-l	r-ph	3	9	2	3	9	2	6	
<i>Rhopalodia gibbata</i> (Czar.) Hustez		Ogt-inc	al-l	inc.	6	1	-	-	3	1	-	
<i>Rhopalodia gibbata</i> (Czar.) J. Hustez		Ogt-hil	al-l	inc.	20	5	-	2	15	-	-	
<i>Rhopalodia gibbata</i> (Nitz.) Hustez		Ogt-hil	al-l	inc.	3	1	-	-	2	3	-	
<i>Saroneis anaxys</i> Ehrenberg		Ogt-inc	ind	ind	1	-	-	-	-	-	-	
[A] <i>Saroneis horricoides</i> (Pat.) Lund		Ogt-inc	ind	ind	-	-	-	5	7	-	-	
<i>Saroneis japonica</i> H. Kobayasi		Ogt-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	-	-	
[A] <i>Saroneis odonata</i> Lagerst.		Ogt-inc	ind	ind	-	-	-	3	-	-	-	
[O] <i>Saroneis pinnatifidum</i> (Nitz.) Ehrenberg		Ogt-inc	ind	l-ph	1	-	-	-	1	1	-	
[O] <i>Saroneis pinnatifidum</i> var. <i>gracilis</i> (Pav.) Hustedt		Ogt-inc	ind	ind	-	-	-	1	-	-	-	

表4. 珞藻分析結果のつづき

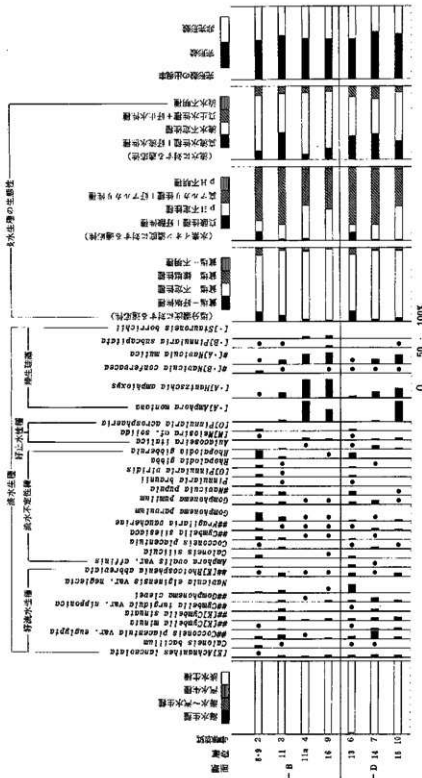
Species Name	種別 属名 試料番号	Ecology			A-B			C-D		
		H.R.	pH	C.R.	2-9	11	16	13	14	16
					2	9	4	9	6	7
<i>[O] Sphaerocapsa phoenicenteron var. hantzschii</i> Thomsen		Ogh-ind	ind	ind	2	-	-	-	2	
<i>Sarire angusta</i> Kuetzing		Ogh-ind	al-II	r-bi	1	-	-	1	1	-
<i>Sarire cincta</i> var. <i>planosa</i> (W. Smith) Husted		Ogh-ind	al-II	r-ph	1	-	-	1	-	-
# 1 [J] [<i>K</i>] <i>Synedra inaequalis</i> H. Kobayasi		Ogh-ind	al-II	r-ph	-	1	1	-	1	-
<i>Synedra parviuscula</i> (W. Smith) Husted		Ogh-ind	al-II	ind	-	-	-	-	1	-
<i>Synedra subulicarpa</i> Mikroyanag		Ogh-ind	al-II	ind	1	1	-	1	1	-
[M] <i>Staphanodictyon atrovirens</i> (Ehr.) Grunow		Ogh-ind	al-II	l-bi	-	3	-	-	1	-
[M] <i>Staphanodictyon sinense</i> Ehrenberg		Ogh-ind	al-II	l-bi	-	-	-	-	-	1
<i>Staphanodictyon</i> sp.		Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	-
<i>Marine Water Species</i>					0	0	0	0	1	0
<i>Marine to Brackish Water Species</i>					0	0	0	0	1	0
<i>Brackish Water Species</i>					0	0	0	0	4	0
<i>Fresh Water Species</i>					208	203	231	202	209	201
<i>Total Number of Diatoms</i>					208	203	231	202	215	201

凡例

- H, R : 水分含量に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C, R : 流水に対する適応性
 kuh : 陸水生態 al-II : 真アルカリ性種 l-bi : 真淡水性種
 Euh-Meh : 海水生態→汽水生態 al-II : 弱アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
 Meh : 汽水生態 ind : pH不変性種 ind : 淡水不定性種
 Ogh-hil : 実室好塩性種 ac-II : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
 Ogh-ind : 実室不変性種 ac-II : 好酸性種 r-bi : 好流水性種
 Ogh-hob : 真塩性種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種
 Ogh-unk : 性質不明種

産地記号説明

- [J] : 上流性河川産種 [K] : 中～下流性河川産種 [M] : 湖沼産種
 [N] : 湖沼汽水産種 [O] : 塩沢産種 (安藤, 1990)
 # : 好塩性種 # # : 好流水性種 (奥田ほか, 1986)
 [-] : 陸生性種 (I-A) : A群, (I-B) : B群, 伊藤・原氏, '99)



第104図 珪藻化石群集の相位的変化
 海水・汽水・淡水性種が主・各種組成比率は全体組成、淡水性種の生息地の比較は淡水性種の割合を基準として算出した。いずれも100部試料より抽出された試料について示した。なお、●は1%未満の割合、○は10%未満の割合における産出を示す。
 取付場所階級 [A]-中央下流階級 [B]-中流階級 [C]-上流階級 [D]-河川河口階級
 (宇橋、1964)
 * 好流水性種、# 好流水性種 (部分のみ、1964)
 (○) 細粒珪藻 (1:A) 河川, (●) 湖沼、伊勢・湖沼、1951)

(2) 花粉化石の産状

花粉分析の結果を表3に示す。分析を行った3点の試料からは花粉化石がほとんど検出されなかった。わずかに検出された花粉化石は、保存状態が著しく悪いものであった。

(3) 植物珪酸体の産状

植物珪酸体分析の結果を表6・第104図に示す。イネ科植物起源の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体は、A-B断面の5層(試料番号1)、C-D断面の16・13層(試料番号5・10)で検出数が少ないが、その他の試料からは短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体が多く検出される。各断面ごとに植物珪酸体組成について述べる。

1) A-B断面

16層・11a・11層ではタケ亜科が多産し、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科、栽培種のイネ属などを伴う。このうちウシクサ族機動細胞珪酸体は16層で多産し、11層にかけて減少する。これとは逆にヨシ属が増加する。イネ属機動細胞珪酸体は16層・11層で約15%の出現率を示す。

8・9層では、イネ属が多産するようになり、機動細胞珪酸体では約60%と優占する。このほかタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族などを伴うが、いずれも下位層準に比較して低率となる。

7層では、イネ属は低率となり、8・9層で低率になったタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族が増加する。

2) C-D断面

16層では、タケ亜科が多産し、ヨシ属、ウシクサ族、栽培種のイネ属などを伴う。イネ属の出現率は低率である。

2号溝覆土ではイネ属が多産し、機動細胞珪酸体では約50%と優占する。検出されるイネ属には珪酸体列の状態のものも認められ、また籾殻に形成される珪酸体も認められる。このほか、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族などを伴う。

14層・13層では、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族が比較的多産する。このうち、イネ属は13層で増加し、約30%と高率に出現するようになる。

8層ではイネ属が40%以上と高率に出現する。このほかタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族などを伴うが、いずれも下位層準に比較して低率である。

4. 考察

(1) 堆積域の古環境

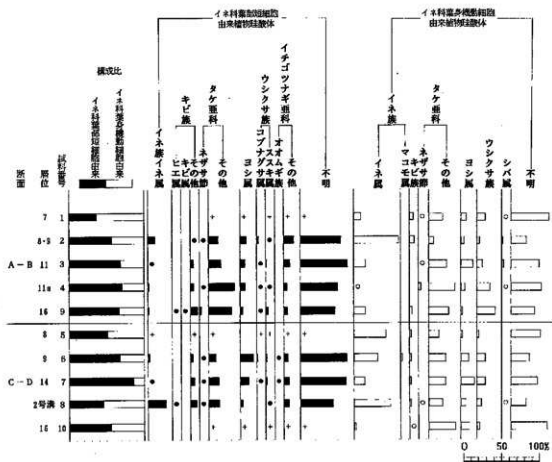
弥生時代後期の遺物包含層である16層からは、調査を行った2地点とも苔や土壤表層などに生育する陸生珪藻A群の種群が卓越した。C-D断面では好流水性種の相対頻度も比較的高く、河川水の流入等の影響も考えられるが、基本的には堆積域には好気的環境が広がっていたと考えら

表 5. 花粉分析結果

種 類 (Taxa)	試料番号	2	9
木本花粉			
ニレ属-ケナキ属	-	1	
草本花粉			
イネ科	2	2	
不明花粉	-	-	
シダ類孢子			
シダ類孢子	5	6	
合計			
木本花粉	0	1	
草本花粉	2	2	
不明花粉	0	0	
シダ類孢子	5	6	
総花粉・孢子	7	9	

表 6 植物珪酸体分析結果

種 類 (Taxa)	断面		A-B					C-D					
	層位	試料番号	7	8・9	11	11a	16	8	9	14	2号溝	16	
			1	2	3	4	9	5	6	7	8	10	
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属			-	20	2	3	3	18	4	3	49	-	
キビ族ヒエ属			-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	
キビ族キビ属			-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
キビ族 (その他)			-	2	12	10	21	1	6	29	17		
タケ亜科ネザサ属			-	1	-	1	5	-	1	3	1	-	
タケ亜科 (その他)			13	26	45	84	70	29	20	77	30	85	
ヨシ属			3	17	16	15	7	-	37	70	6	4	
ウシクサ族コブナグサ属			-	5	1	1	1	2	3	4	-	-	
ウシクサ族ススキ属			1	1	4	1	6	6	3	9	2	1	
イチゴツナギ亜科オオムギ族			-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	
イチゴツナギ亜科 (その他)			11	27	22	10	12	29	10	44	16	13	
不明キビ型			16	49	110	77	79	35	79	233	50	4	
不明ヒゲシバ型			7	24	27	24	12	26	31	68	19	11	
不明ダンナク型			9	43	38	23	19	29	27	69	23	12	
イネ科葉身細胞短細胞珪酸体													
イネ族イネ属			9	94	19	1	18	68	33	14	120	2	
イネ族マコモ属			-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	
キビ属			5	9	-	-	3	4	2	2	4	1	
タケ亜科ネザサ属			1	-	1	3	-	-	-	-	1	-	
タケ亜科 (その他)			18	10	29	35	31	21	23	22	45	36	
ヨシ属			7	7	20	5	2	3	10	18	14	11	
ウシクサ族			10	5	8	17	27	3	10	10	13	3	
シバ属			1	2	2	1	-	-	-	-	1	-	
不明			51	32	46	42	37	63	25	35	51	49	
合 計													
イネ科葉部短細胞珪酸体			60	215	277	249	237	175	222	611	214	130	
イネ科葉身細胞短細胞珪酸体			102	159	125	104	118	162	105	101	249	102	
検 出 個 数			162	374	402	353	355	337	327	712	463	232	
組 織 片													
イネ属短細胞			-	-	-	3	-	-	-	-	9	-	
イネ属短細胞列			-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	
イネ属短細胞列			-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	
キビ属短細胞			-	-	-	-	1	-	-	-	3	-	
タケ亜科短細胞			-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	
ヨシ属短細胞			-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
キビ型短細胞			-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	



第105図 植物珪酸体組成の層的变化

出現率は、イネ科菌類起源性珪酸体はイネ科菌類細胞起源性珪酸体総数、イネ科菌身細胞起源性珪酸体はイネ科菌身細胞起源性珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、○はイネ科菌類起源性珪酸体の総数が20%未満の試料において検出した種類を示す。

れる。花粉は、このような環境で土壤微生物の活動などの風化作用の影響を受け分解消失するとされる。本結果は、本層中から花粉化石がほとんど検出されなかったことと調和的といえる。

また、2地点で得られた本層中の植物珪酸体組成は両地点ともタケ亜科が卓越したが、ウシクサ族やヨシ属など随伴種の産状において違いが認められた。このような産状の違いは、地点間での植物珪酸体組成の形成過程の違いや、局地的な植生の違いに起因する可能性がある。調査地点が比較的乾いた場所であったことを考慮すると、局所的な植生を反映しているように思われる。いずれにしても堆積域にはタケ亜科、ウシクサ族、ヨシ属などのイネ科植物が生育していたと考えられる。また、これらのイネ科植物は森林の林床では生育しにくいことから、周辺は開けた場所であったことが推定される。

以上のことから、弥生時代後期の調査区周辺は、タケ亜科やウシクサ族などが生育する比較的乾いた開けた場所であったと推定される。本層が腐植の集積したオリーブ黒色粘土層であることと調和的である。

弥生時代の遺構を覆う14層とその上位の腐植が集積している13層の珪藻化石群集は、好流水性種が多いものの好止水性種も多い。産出率をみると卓越する種がなく、好流水性種・止水性種・陸生珪藻など複数の環境を指標する種群から構成されていることが特徴である。このような群集組成は、様々な水域環境に生育する種群が混合された群集（混合群集）であると解釈される。混合群集となるのは、洪水等の影響で周辺の様々な場所の物質が取り込まれて堆積する場合や自然および人為的な攪乱が頻繁に行われた場合（水田等）が考えられる。14層については、層相等から河川の氾濫等による堆積が考えられる。13層については、層相が腐植質であり、後述するように稲作が行われていた可能性が強いことから、両者の可能性がある。

A-B断面の16層の上位に堆積する11a層は、16層と同様な群集組成を示すことから、好気的な条件下にあったことが推定される。その上位の11層の珪藻化石群集は、混合群集の特徴を示し、層相も砂質であることから、河川の氾濫等の堆積物であることが推定される。

平安時代の水田層である8・9層における珪藻化石群集は、流水不定性種が70%以上を占め、好流水性種と好止水性種が各20%程度産出し、流水に対する適応性に関して大きな特徴が見いだせない。また、卓越する種類がなく産出種の生態性が多様であるなど、典型的な混合群集の特徴を示す。このような群集組成は本層が水田層であることから、水管理など人為的な影響を頻繁に受けた結果とみなせる。また、珪藻化石群集には好汚濁性種や富栄養種、窒素従属栄養種などが多く認められたが、当時の水田の水質を検討する上で興味深い結果といえる。

(2) 稲作について

栽培種のイネ属の植物珪酸体は、弥生時代後期以降の堆積物からほぼ連続して出現した。過去の稲作を推定する上で、現在の水田耕土におけるイネ属植物珪酸体の産状と比較することは示唆

にとむ。現水田耕土におけるイネ属珪酸体の産状に関しては、近藤（1988）の報告例がある。それによれば、稲ワラ堆肥（500kg/年）を8年間続けた水田耕土でイネ属機動細胞珪酸体が16%を示したと報告されている。ここでは、この値を目安として、層別別に稲作の消長について検討する。

弥生時代後期の16層では、イネ属はC-D断面で低率であったがA-B断面では現水田耕土とほぼ同等の出現率を示した。また、同時期の2号溝を埋める堆積物では、現耕土の値をはるかに上回り、平安時代の水田層と同等の高率出現を示した。これらの産状と、弥生時代後期の遺物包含層が洪水性堆積物に覆われておりイネ属植物珪酸体が上位層からの落ち込みとは考え難いことから、弥生時代後期に本遺跡近辺では稲作が行われていた可能性が高い。

本遺跡が位置する千曲川流域では、本地域の下流の善光寺平に位置する石川条里・川田条早遺跡は弥生時代後期の水田が検出されている（白井、1993）。塚田遺跡は、善光寺平に位置する両遺跡と同じ箱清水式文化圏にある。善光寺平より上流にあたる本地域でも弥生時代後期に稲作が行われていたことが推定されるが、現時点では稲作の根拠となる畦畔などの遺構は検出されていない。また、本地域と善光寺平では地形環境も異なっている。稲作地の開発や耕作様態に関しては、今後の発掘調査事例を待つ必要がある。

また、2号溝内堆積物のイネ属植物珪酸体には、葉部珪酸体列として出現するものと、稈に形成される顆粒珪酸体が認められた点で特徴的であった。このような産状は、2号溝の堆積物中にイネ属の植物体を取り込まれていることを示している可能性が高い。考古学的所見によれば、本遺跡は溝ではなく住居跡である可能性もある。そうだとすれば住居内にイネが持ち込まれたことになる。

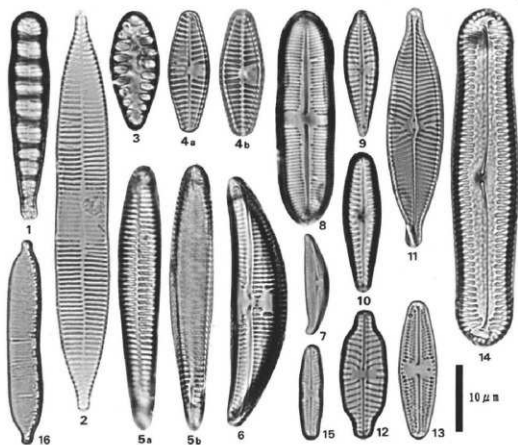
河川の氾濫等の堆積層である14・13層でも、イネ属機動細胞珪酸体の出現率は現耕土以上の値を示した。特に腐植の集積する13層では、平安時代の水田層と同等の高率出現をみた。13層については、発掘調査の段階で、層相から水田層ともみられている。今回の結果はこの見解を支持するものであり、弥生時代後期から平安時代までの間の時期にも、本地域で稲作が行われていたことが推定される。

平安時代の水田層である8層では、栽培種のイネ属機動細胞珪酸体が現水田耕土の値をはるかに上回り60%と卓越した。一方、本層準では、植物珪酸体組成において下位層準で比較的多産していたタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族などが減少したが、これは本地域においてこれらの植物の分布域が狭くなったことを示唆する。すなわち、水田開発に連動した植生変化の可能性がある。なお、空間的な解析を行うには、今後調査地点を増やすことが必要である。

〈引用文献〉

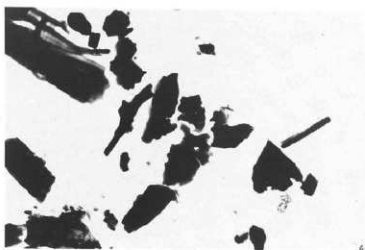
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- Hustedt, f. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra, I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15 p. 131-80
9., 16, P. 1-155, 274-394.
- 近藤隼三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析 その特性と応用. 第4紀研究, 25, p. 31-64.
- 近藤隼三 (1988) 十二遺跡の植物珪酸体分析. 銚師屋遺跡群十二遺跡-長野県北佐久郡御代田町
十二遺跡発掘調査報告書, 御代田町教育委員会, p. 377-383.
- Krammer, k., and H. Lange-Bertalot. (1986, 1988, 1991) Bacillariophyceae, Suesswasser flora von Mitteleuropa 2 (1, 2, 3), 876p., 585p., 576p.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. Diatom, 6, p. 23-45.
- Lowc, R. L. (1974) Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms, p. 1-334. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- Patrick, R. (1977) Ecology of freshwater diatoms and diatom communities, The biology of diatoms, Botanical monographs volume 13, Blackwell scientific publication, pp. 284-332.
- 渡辺仁治・山田安恵子・浅井一視 (1988) 珪藻群集による有機汚濁指数 (DAIpo) の止水域への適用. 水質汚濁研究, 11, 12, p. 765-773.
- 白井直之 (1993) 善光寺平の水田遺跡の調査. 月刊考古学ジャーナル, 365, p. 30-34.

图版2 珩藻化石的顯微鏡写真



1. *Meridion circularae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (試料番号6)
2. *Synedra inaequalis* H. Kobayasi (試料番号4)
3. *Opephora nartyi* Herlbaud (試料番号2)
4. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号4)
5. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lango-Bertalot (試料番号3)
6. *Anphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck (試料番号6)
7. *Anphora pediculus* (Kuetz.) Grunow (試料番号4)
8. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve (試料番号2)
9. *Gomphonema parvulus* Kuetzing (試料番号4)
10. *Gomphonema subclavatum* (Grun.) Grunow (試料番号4)
11. *Navicula capitatoradiata* Germain (試料番号9)
12. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (試料番号6)
13. *Navicula nutica* Kuetzing (試料番号3)
14. *Pinnularia acrosphaeria* W. Smith (試料番号6)
15. *Stauroneis obtusa* Lagerst (試料番号4)
16. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号4)

図版 3 花粉分析の顕微鏡状況写真

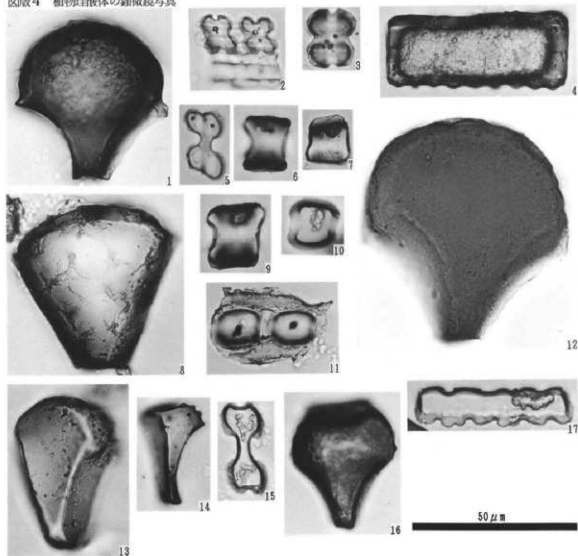


100 μ m

1. 試料番号2

2. 試料番号9

図版4 植物珪酸体の顕微鏡写真



- | | |
|---|---|
| <p>1. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号8)
 3. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号8)
 5. キビ族短細胞珪酸体 (試料番号9)
 7. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号7)
 9. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号2)
 11. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号7)
 13. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号2)
 15. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号9)
 17. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号9)</p> | <p>2. イネ属短細胞珪酸体列 (試料番号8)
 4. キビ族機動細胞珪酸体 (試料番号8)
 6. ネザサ節短細胞珪酸体 (試料番号9)
 8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号2)
 10. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号3)
 12. ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料番号3)
 14. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号9)
 16. シバ属機動細胞珪酸体 (試料番号2)</p> |
|---|---|

第VI章 総括

第1節 縄文時代の出土土器について

本調査区から出土した縄文時代の土器は、出土量が少ないが、縄文時代前期末葉から晩期にかけての土器が出土している。近年の善光寺平における千曲川沖積地の遺跡のあり方は、上信越自動車道の原代遺跡群の発掘調査（長野県埋蔵文化財センター）によって地表下約4mのところから縄文時代中期の住居址が検出されている²¹。かつて遺跡の存在を予想だにしていなかったところからの検出であった。

坂城町では屋代遺跡群の遺跡のあり方と同じとはいえないまでも、千曲川の自然堤防あるいは中洲といった場所から、縄文土器が出土し始めている²²。本遺跡も例外ではなく、地表下約1mのところからの出土である。これらの土器は、調査区内に縄文時代の遺構が検出されていないため、流れ込み等の可能性を考えるしかないわけであるが、周辺に縄文時代の遺構が埋蔵されている可能性が高いと思われる。出土した土器は、量は少ないが前期末葉の土器が主体を占めている。ほとんどが細片で摩滅したものであること、出土量の関係から、季節的な作業によるものとも考えられるが、近隣に縄文時代の遺跡を求めた方が良いように思われる。

第2節 弥生時代後期後半の土器について

本調査区から検出された、住居址は36棟を数え、土坑址21基である。これらの遺構から相当量の土器が検出されている。これらの土器を見ると、後期後半の箱清水式の型式の中に当てはまる事になる。善光寺平最南端に位置する本遺跡の土器の様相は、善光寺平の様相と近接する上小地域の土器の様相も多分に含んでいる。

ここでは、当遺跡出土の壺・甕・高坏・鉢などの土器の概要について簡単にふれてみる事にする。

壺では、在地系のもが主体をなし、ほとんどが赤色塗彩が施され、外面では頸部文様帯のみに赤色塗彩の無いものが主体を占める。口縁部が外反し、胴部の張らないで肩の器形が多い。頸部はT字文、直線文が施され、T字文が2組となるものもある。無彩の壺もあり、Y6号住居址からは、折り返し口縁を持つ樽式の影響かと思われる土器が出土している。

甕では、在地系のもが主体をなし、口縁部が長く外反するもの、長く外反し球状に膨らむもの、短く外反するもの、緩く外反するものがある。短く外反するものでは、小型品に胴部が膨らむものが多く、大型品に胴部が球状を呈し、撻搗き縵状文が施されないものがある。文様施文で

は、口縁部～胴部にかけて構描き波状文が施されるものが一般的で、胴部下位には磨きが行われる。構描き磨状文は2連止めが多く、次に3連止め、等間隔止めが多い。施文順序では、磨状文の施文後に波状文が行われるものや、逆のものもある。波状文が連続的に行われるもの、断続的に行われるものがあり、構描き波状文の施文は上から行われるもの、下から行われるものの両方がある。断続的に行われるものとしては、ある一定の面単位で上から施文するものもある。また、磨状文や波状文の施文具である構状工具は、同一の土器では、同じものを使用していることが、多いように思われる。佐久地方に多くみられる構描き斜走文が施されたものもあり、Y6号住居址、Y27号住居址、D21号土坑址からは北陸系の法仏式と思われる甕が出土している。胎土の状況から搬入品と思われる。

高坏類では、内外面赤色塗彩され、坏部で稜を持ち、口縁部で水平に屈曲するものや、坏部が直線的で口縁部で水平に屈曲するものがある。裾部では三角透かし孔を持つものもある。

鉢類では、赤色塗彩されるものと無彩のものがあり、形態に変化が少ない。該期の傾向どおりである。片口を有するものもあり、器形の大小もある。

第3節 弥生後期の出土石器について

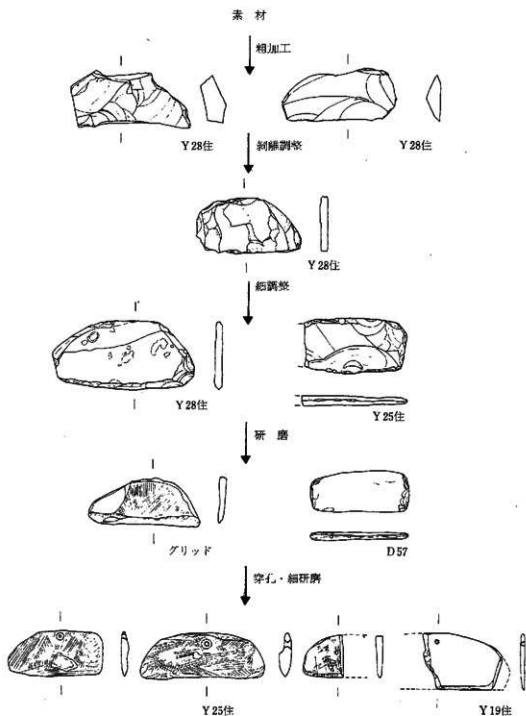
調査で出土した石器は、石鎌、打製石鎌、磨製石包丁、磨製石斧、凹石等有り、ここでは当遺跡の性格を示すと考えられる磨製石包丁と凹石を中心にふれてみたい。

磨製石包丁

磨製石包丁は、住居址覆土からの出土が多く、明らかに住居址に伴っているとは言いがたい。しかしながら、当遺跡周辺に後期後半の水田の存在を如実に物語っていると考えられる。これらの磨製石包丁の中には、完成品と未製品があり、完成品は4点であるが、本遺跡内では、1孔を持つものが主体となると思われる。後期後半の善光寺平では、2孔の石包丁が一般的であるが、当遺跡では1孔が主体となる。塚田遺跡でも同様な石包丁の出土がある。これは、上小地域の傾向と同じものと考えられる。石包丁については、町田勝則氏の論考にあるが、中唐信に1孔の石包丁があり、後期前半に南信や諏訪湖周辺に分布し、後期後半に上田盆地に確認されるという。したがって、先に触れた事ではあるが、当地域は上小地域の影響も多分に含んだ結果と考えられる。

また、住居址出土の石包丁には、未製品が含まれ、磨製石包丁製作行程の中で、大体の大きさに粗加工したのもや、研磨をかけた行程まで行い、穿孔されていないものなどがある。本遺跡内で石包丁の製作が行われていた事は自明である。Y28号住居址では未製品が4点出土しているが、本住居址内で石包丁の製作が行われていたとするよりも、近くで製作が行われたとも考えられる。

本遺跡で製作された石包丁の製作過程(第106図)は、原石に入手し易い頁岩のものを素材と



第106図 塚田遺跡II層製石包丁の製作過程復原図

して、大体の大きさに粗加工を行う。次に打撃によって、整形し研磨を加えていく。調査では、この段階までの木製品が、出土している事になる。以後穿孔を行い、再研磨し完成するものと思われる。これらの過程を考える上で、通常考えられているものと大きく異っていないと思われる。

凹石

凹石は、河原石等の簡単に入手できる素材を利用し、画面に凹部を持つものが多く、片面のみ凹部を持つものもある。稲作が浸透した段階では徐々に減少していく傾向になるが、当遺跡では、多量に出土している。これは広大な後背湿地をもてない、当地域の遺跡環境に関係があるように思われる。調査区内から水田が検出されなかったため、水田址は存在場所が隣接するものと考えられるが、集落を賄うだけの米の収穫がなかったか、とも受けとれる。しかしながら、相当量の凹石が出土していることは、本遺跡の性格を物語っていると考えられる。他に石器の石材についてみると、凹石が入手し易い河原石を素材にし、石包丁は頁岩を素材にし、刃器には、別の素材と石器の種類によって石材を分けて製作しているような傾向が見られる。

第4節 植物珪酸体分析結果から

本遺跡の集落解明のために、住居址内の炉の焼土の分析を行い、当時何を燃料としていたかを分析する事にした。調査中に分析を依頼した、バリノ・サーヴェイ株式会社との協議が浅く、詳細な結果をえる事ができなかった。

分析結果からは、イネ・キビ属・ススキ属などが、燃料材として利用された可能性が高いとの事であった。ここで問題となる事は、採取した炉の堆積状況等である。採取に当たっては炉の被熱を受けた部分を分析試料としたため、住居址埋没後の攪乱による影響は受けていないものと考えられる。したがって、住居焼絶後の混入はないと思われる。考えられる事は、住居構築時とそれ以前の植物珪酸体が混入した可能性である。現段階では、それ以上の問題究明ができないが、住居構築時、或いはそれ以前にあったものが混入したとするなら、当遺跡内に水田が存在していたと見る事ができる。調査区内にて水田址の検出ができなかったため、混入したと見るなら炉の構築時に混入したと考えたいのである。

しかし、植物珪酸体が混入したものではないとしたら、イネ・キビ属・ススキ属などが、燃料材として使用された事になるのである。隣接する塚田遺跡の古環境復原の分析結果では、タケ亜科やウシクサ族、ヨシ族などが見られる事から、周辺は開けた場所であったと推定されている。塚田遺跡IIの調査区も同様な自然環境とする事ができるため、採集試料中のヨシ族・コブナグサ族の検出は、湿った場所が近隣に存在したとする事ができる。調査区内のM5号溝状遺構が自然流路のような性格を持っていると思われるため、当時湿地化していたとは考えられないであろうか。このような状況を想定した上で、生活状況を見ると稲作の実地は自明であり、炉の燃料とし

てイネ・キビ属・ススキ属など周辺に生育しているものを燃料材として周辺から持ち込んだと考えられるが、イネの燃料材としての利用が少ない事が気になる。周辺に水田址が存在するとしたら、簡単に入手できるものである。このことは、穂先を刈り取られたイネが、燃料材以外の別の用途に使われた可能性を指摘することができる。

藁を使った細工ものとしては、わらじ、ワラグツ、蓑、笠、敷物、つぐら等の製品が現在考えられるが、このようなものに当時使用するために大切なものであったと考えられるのである。

第5節 塚田遺跡IIの集落構造について

調査区内から36棟の弥生時代後期後半の住居址が、検出されている。検出面の標高は405.9m前後で、現在の千曲川の河床が398m前後と思われる。直線的に距離が短いではあるが、比高差が約8mのところ遺跡が立地しているのである。

重複関係を見ると住居址同士の切り合い関係がない、単独な住居址が7棟（Y4・12・14・18・19・20・24号住居址）重複関係が不明なもの6棟（Y26・27・28・31・32・33号住居址）でそれ以外は、重複関係は現地調査にて確認したつもりである。住居址の重複関係から判断するならば、多いところで5期、少ないところで2期の時期差に分けられる。通常は、これらの集落を重複関係等をもとに解明していくわけであるが、各住居址の出土土器が住居廃絶後の混入遺物を含んでいる場合が多いため、所属時期が後期後半の箱清水式の型式内に入ってしまう細分が難しい。このことは後期前半の古田式の集落が更埴地方に多くみられず、森嶋珍氏が指摘しているとおり、型式として存在しても時間的、空間的占有率が短く、狭いものと思えてくる。そう考えると後期後半の土器型式である箱清水式土器のタイムスケールが長くなっていく。このような状況を想定すると、当遺跡出土の住居址の所属時期が後期後半ではあるが、土器編年から時期差を明確にし得ない状況となっていくのも納得できるように思われる。また、箱清水式期の文化が核に近いところでは、形態に変化が少ないようにも思われる。壺、甕にみられる口縁部及び胴部の形態変化が、現在の段階設定となっているが、本址の状況から想定すると、もっとタイムスケールが長いものと思われ、差異を明確にする事ができない中で、時期差が生じるものと思われる。

住居址の占有空間

住居址の検出は調査区の中央から西に大きな一帯があり、中央から南東方向に一群が存在している。調査区の北側と東側には住居址が検出されていない。このことは、調査区北西端では、砂質土が地山となり、東側はM5号溝状遺構の影響で、グライ化した湿地帯となっている事と関連があるように考えられる。このことが要因となって、住居址の占有空間が決定したと思われる。集落は、平成4年度に実施した試掘調査により、調査区の北側と東側には存在していないため、南側と西側に延びる事は確かである。南側はどこまで集落が続くか不明であるが、調査区の南で

トレンチ調査をした結果、住居址が検出されなかったという事である。したがって、集落は南西方向に続いていくものと思われる。

住居址・住居内施設

住居形態としては、ほとんどの住居址が隅丸長方形を呈し、住居址の主軸方位は規則性がないように思われる。住居規模からみると、大型住居（Y 6号住居址）、小型住居（Y11・19・20・24・34号住居址）も見られる。

住居廃絶後に焼失したと思われるものが6棟（Y10・15・16・17・32・33号住居址）存在し、住居廃絶に伴う祭祀的な儀礼等と思われる。Y10・15・16号住居址では覆土や床面から遺物が出土しているため、住居廃絶後に住居内で土器の焼成を行ったとも考えられるが、Y16号住居址の出土遺物が完形品を含め多いため、ここでは祭祀的な儀礼の結果としておきたい。

入口施設は住居の南壁側の床面上に、2対の小型のピットを持つものが一般的で、入口施設と断定できないものも含まれているが、11棟（Y1・2・3・4・6・7・11・12・16・20・22号住居址）検出されている。

炉の位置では、住居奥側の主柱穴間に位置する地床炉が一般的で、複数炉を持つものがある。2基有するものでは10棟（Y9・12・13・16・19・20・22・23・25・27号住居址）、3基有するものでは4棟（Y2・6・17・29号住居址）というように意外と複数炉が多い。複数炉は、主柱穴間と中央付近に位置するものが多く傾向が見られるようである。また、くぼみを有する地床炉が主柱穴間に位置し、中央付近の炉はくぼみを持たない地床炉である。複数炉を有する住居が多い事は、炉の機能について、深い関わりを持っている。炊飯・採光・採暖等の問題と関連してくると思われる。地床炉以外では、Y4号住居址から赤色塗彩の壺を使用した土器敷き炉、Y17号住居址から竈口縁を逆位に埋設した埋竈炉、Y7・28号住居址から竈底部を正位に埋設した埋竈炉がある。地床炉+炉縁石としては、Y21・23号住居址がある。炉縁石が残る要因としては、縁石が割れたりした結果残されるものと思われる。

炉が検出できなかった住居址にY1号住居址があり、複数炉との関連から、祭祀的な可能性が考えられるが、今後の課題としたい。

大型住居として、Y6号住居址が挙げられるが、長軸10mを超え、炉を3基有し、出土遺物に樽式の壺と北陸系の甕を持つ特異な住居址である。祭祀的な施設或いは首長的な施設が想定できると考えられる。

集落変遷については先に触れたが、土器編年からの細分が難しいため、重複関係をもとに今後検討したい。

註1 長野県埋蔵文化財センター年報9 1992

註2 東濃遺跡Ⅱ・青木下遺跡の調査により、少量ではあるが中期初頭から晩期の土器が出土し

ている。

註3 町田勝則 1994 「信濃に於ける米作りと栽培」『長野県考古学会誌』73

註4 森嶋 稔 1994 「第3章科野国形成期の農耕社会」『更埴市史』第1巻 古代・中世編

表7 出土土器調査表①

番号	器種	法 量 (cm)			積存量	胎 土	成形・調査・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
7-1	壺	37.5	-	(33.0)	1/6	7.5YR 5/1 赤褐色	口縁：磨き・凸部→ボタン状印付文 彫刻：5部位の垂線文上→下	口縁：磨き・凸部 彫刻：ハケ調整	F4出土
7-2	壺	26.7	-	(6.7)	1/6線部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨き・凸部 口縁部：凸形突起を有する	ナデ	
7-3	壺	23.5	-	(14.2)	1/6線→線部	7.5YR 5/1 赤褐色	口縁：磨き・凸部 彫刻：垂線交互直線文	口縁：磨き・凸部	
7-4	壺	-	11.1	(14.3)	線部	10YR 5/6 灰褐色	磨滅・磨き・凸部	ケズリ	
7-5	壺	-	6	(4)	線部	10YR 5/6 灰褐色	ナデ・磨き・凸部	磨き・凸部	F1出土
7-6	壺	-	6.5	(5.9)	線部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨滅・凸部	ナデ	
7-7	壺	-	12	(6.9)	線部	7.5YR 5/1 赤褐色	ケズリ	ハケ	
7-8	壺	-	13	(5.8)	線部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨滅・ナデ	ナデ	
7-9	壺	22.4	-	(34.3)	1/6	10YR 5/6 灰褐色	口縁：磨き・凸部 磨滅：直線文(8字部) 彫刻：ハケ・凸部	口縁：ナデ・凸部 彫刻：ハケ	
8-10	壺	26.6	-	(30.7)	1/6	7.5YR 5/1 赤褐色	口縁：磨き・凸部 磨滅：T字文 彫刻：磨き・凸部	口縁：磨き・凸部	F：出土
8-11	壺	20	-	(26.4)	1/6	10YR 5/6 灰褐色	口縁：磨き 磨滅：磨滅直線文	磨滅：ハケ	
8-12	壺	-	6.2	(10)	線部	7.5YR 5/1 赤褐色	ナデ・凸部	ハケ	
8-13	高杯	-	5.9	(5.9)	接合部→線部	10YR 5/6 灰褐色	磨き・凸部	磨き・凸部 彫刻：ハケ	
8-14	口付壺	12.4	5.8	11.1	1/6	10YR 5/6 灰褐色	磨き・凸部	磨き・凸部 彫刻：磨滅直線文	F：出土
8-15	高杯	27.4	-	(6.4)	杯部	10YR 5/6 灰褐色 7.5YR 5/1 赤褐色	ナデ	ナデ	
8-16	杯	13.9	4.7	6.9	1/6	10YR 5/6 灰褐色	磨き 磨滅により凸部消失	磨き 磨滅により凸部消失	F4出土
8-17	壺	21.2	-	(12.8)	1/6線→線部	10YR 5/6 灰褐色	磨滅：磨滅直線文(2字止め) 口縁：口縁：磨滅直線文	ナデ・磨き	
8-18	壺	13.8	5.2	10.4	1/6線→線部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨滅：磨滅直線文(磨滅直線文) 口縁：磨滅：磨滅直線文	ナデ→磨き	灰濁出土
9-19	壺	18.7	7.7	25.7	1/6	7.5YR 5/1 赤褐色	磨滅：磨滅直線文(磨滅直線文) 口縁：磨滅：磨滅直線文(2字止め) 彫刻：磨滅直線文(2字止め)	磨き	
9-20	壺	26.3	-	(24.4)	1/6	10YR 5/6 灰褐色	磨滅直線文不備	磨き	F3出土
9-21	壺	-	7.7	(8)	線部	10YR 5/6 灰褐色	ナデ→磨き	ハケ	
9-22	台付壺	12.3	-	(6.7)	口縁→線部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨滅：磨滅直線文(2字止め) 口縁：磨滅：磨滅直線文	ハケ→ケズリ	
9-23	台付壺	12.8	-	(6.4)	口縁→線部	10YR 5/6 灰褐色	口縁：磨滅直線文 磨滅：磨滅直線文(2字止め)	ナデ	F4出土
9-24	小壺	9.7	4.5	11.2	完形	7.5YR 5/1 赤褐色	口縁：磨滅直線文(磨滅直線文) 磨滅：磨滅直線文(2字止め)	ナデ	
9-25	壺	-	6.5	(4.6)	線部→線部	10YR 5/6 灰褐色	磨き	ナデ→磨き	F4出土
9-26	壺	-	(2.2)	つまみ部	10YR 5/6 灰褐色	ケズリ 磨滅直線	ケズリ		
9-27	壺	-	(3.2)	つまみ部	10YR 5/6 灰褐色	ケズリ 磨滅直線	ハケ		
9-28	土製品 (スプーン)	-	-	-	1/6	10YR 5/6 灰褐色			
11-1	壺	-	-	(28.8)	線部	7.5YR 5/1 赤褐色	口縁：磨滅 磨滅：凸部 彫刻：磨滅T字文	磨き・凸部	
11-2	高杯	-	-	(3.5)	杯→線部	10YR 5/6 灰褐色	磨き・凸部	ナデ→磨き 磨滅：ハケ調整	
11-3	高杯	-	-	(6.2)	杯→線部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨き・凸部 磨滅直線	磨き・凸部 磨滅：ハケ	
11-4	杯	15.2	4.4	7.1	1/6	5YR 5/1 褐色	磨き・凸部 穴を有する	磨き・凸部	
11-5	壺	22.7	-	(20.4)	口縁→線部	10YR 5/6 灰褐色	口縁：磨滅 磨滅直線文(磨滅直線文)	ナデ→磨き	
11-6	壺	-	6.5	(3.7)	線部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨き・凸部	磨き・凸部	
11-7	土製 高杯	15.3	-	(6.5)	1/6	10YR 5/6 灰褐色			
11-8	高杯	28.5	-	(9.5)	杯部	7.5YR 5/1 赤褐色	磨き・凸部	磨き・凸部	
11-9	高杯	-	-	(5)	接合部→線部	5YR 5/1 褐色	ナデ	ナデ	
11-10	高杯	-	-	(4.9)	線部	10YR 5/6 灰褐色	磨滅 磨き・凸部	ハケ	線部凸部 磨滅

表1 出土土器観察表②

番号	器種	注 記 (cm)		保存度	胎 土	成形・調整・文様		備考
		口径	高さ			外 面	内 面	
13-4	甕	-	6.6 (5.2)	底厚	0YR5 紅い黄褐色	ハケ→磨き		
13-5	高杯	-	(4.5)	肩	10YR5 紅い黄褐色	ナデ・磨き・赤彩	ハケ	
13-6	高杯	-	(6.4)	杯→胴部	10YR5 黄褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩 胴部・ハケ	
13-7	高杯	-	(4.8)	杯全部→胴部	5YR5 褐色	摩滅・磨き・赤彩	摩滅・磨き	
16-1	甕	-	(20.3)	胴部→胴部	7.5YR5 黄褐色	胴部：磨きナデ文→ボタン状捺文 胴部：磨き・赤彩	ハケ	
16-2	甕	20.6	- (18.2)	口縁部	5YR5 褐色 底厚減少	摩滅・磨き・赤彩	ナデ	
16-3	甕	-	(9)	頸部→胴部	10YR5 紅い黄褐色	磨き・赤彩 胴部：磨きナデ文	摩滅・ハケ	
16-4	甕	-	(14.8)	頸部→胴部	10YR5 灰青色	摩滅・胴部：ナデ文 胴部：赤彩	ハケ	
16-5	甕	20.6	(8.4)	口縁部	10YR5 灰青色 10YR5 紅い黄褐色	口縁：磨き→磨きナデ文 胴部：磨きナデ文	ハケ	
16-6	甕	-	8.1 (5.5)	底面	10YR5 紅い黄褐色	磨き	磨き	
16-7	甕	15.9	- (10.9)	口縁→胴部	7.5YR5 紅い褐色	胴部：磨き・磨きナデ文(2通止め) 口縁：磨き・磨きナデ文	ナデ→磨き	
16-8	甕	15.8	- (5.5)	口縁→胴部	7.5YR5 紅い褐色	口縁：磨きナデ文 胴部：磨き→磨きナデ文(中間止め)	ナデ→磨き	
16-9	甕	20.0	- (5)	口縁→胴部	7.5YR5 褐色	胴部：磨きナデ文 口縁：磨きナデ文	ナデ→磨き	
16-10	甕	20.1	- (5)	口縁部	7.5YR5 紅い褐色	磨きナデ文	ナデ	
16-11	鉢		(4.5)	口縁部	5YR5 褐色 底厚減少	摩滅 磨き ナデ有する	ナデ	
16-12	甕	-	4 (2.4)	底面	10YR5 紅い黄褐色	ハケ	ナデ	成田出土 型
16-13	手取山	-	3 (2.2)	底面	7.5YR5 褐色	ナデ・赤彩 磨滅	ナデ・赤彩	
16-14	甕	14.8	- (8.3)	口縁部	20YR5 紅い黄褐色	摩滅 胴部：磨きナデ文(2通止め)		
16-15	甕	13.9	- (2.4)	口縁部	10YR5 紅い黄褐色	胴部：磨きナデ文(2通止め) 口縁：磨きナデ文	ナデ→磨き	
16-16	白付甕	12.6	- (6.4)	口縁→胴部	5YR5 紅い褐色	胴部：磨きナデ文(2通止め) 口縁：磨き・磨きナデ文	磨き	
16-17	甕	14.8	- (4.9)	肩	7.5YR5 紅い褐色	ハケ	ハケ	
16-18	甕		(2)	杯全部	10YR5 明灰褐色	ナデ	ハケ	P出土
18-1	甕	24.8	(20.5)	口縁→胴部	7.5YR5 褐色	口縁：ハケ・赤彩 胴部：磨きナデ文 胴部：磨き・赤彩	口縁：磨き・赤彩 胴部：ハケ	
18-2	高杯	29	- (8.5)	口縁部	10YR5 紅い黄褐色	ハケ・磨き・赤彩	ナデ・磨き・赤彩	
18-3	甕	30.8	- (10.7)	口縁→胴部	7.5YR5 褐色	口縁：ハケ→磨き 胴部：磨きナデ文	ナデ・磨き・赤彩	
18-4	甕	-	(13.8)	頸部→胴部	10YR5 紅い黄褐色	胴部：磨きナデ文 ボタン状捺文・赤彩	ハケ	
18-5	甕	22.6	(14.8)	口縁→胴部	10YR5 紅い黄褐色	口縁：磨きナデ文 口縁：磨き・赤彩	口縁：ハケ ナデ→磨き・赤彩	
18-6	高杯	21.7	- (9.9)	杯部	10YR5 紅い黄褐色	ナデ・ミガキ・赤彩	ナデ	
18-7	高杯	-	(10.2)	胴部	5YR5 褐色	ハケ・磨き・赤彩	ナデ	
18-8	高杯	-	(5.4)	胴部	5YR5 褐色	磨き・赤彩	ハケ	
18-9	高杯	-	(10.3)	胴部	10YR5 紅い黄褐色	磨き・赤彩	胴部：赤彩 胴部：ハケ	
18-10	甕	-	12.4 (4.7)	肩	20YR5 紅い黄褐色	底厚部に孔を有する ハケ磨滅	ハケ	P出土
18-11	甕	12.4 (3.7)	- (5.8)	肩	20YR5 紅い黄褐色	つまみ部に磨滅	ナデ・磨き・赤彩	ナデ
18-12	甕	12.4 (4.3)	- (4.2)	肩	10YR5 紅い黄褐色	ハケ	磨き	
19-13	甕	27.4	(20.4)	口縁→胴部	10YR5 紅い黄褐色	ハケ→胴部：磨きナデ文(中間止め) 胴部：ハケ	ハケ	
19-14	甕	24	- (11.2)	口縁部	7.5YR5 紅い褐色	ナデ→磨きナデ文	ナデ→磨き	
19-15	甕	15.6	- (9)	口縁→胴部	10YR5 褐色 5YR5 褐色	ハケ→磨きナデ文(2通止め) 口縁：胴部：磨きナデ文	ナデ→磨き	
19-16	甕	18.8	- (7.4)	口縁→胴部	10YR5 明灰褐色	摩滅・口縁：磨きナデ文 胴部：磨きナデ文(2通止め)	ナデ	

表9 出土土器観察表③

番号	器種	法 量 (cm)			残存度	胎 土	成形・調整・文様		備考	
		口徑	底徑	高さ			外 面	内 面		
19-17	白付甕	15	-	(12.9)	口縁→胴部	7.5YR 5YR 褐色	におい褐色	厚底 胴部：横線き染文(等間隔止め) 浅底：横線き染文	ナデ→磨き	
19-18	白付甕	14.7	-	(8.1)	口縁→胴部	7.5YR 褐色		胴部：横線き染文(2並止め) 口縁・胴部：横線き染文	ナデ→磨き	
19-19	白付甕	14.3	-	(11.3)	口縁→胴部	10YR 灰青色		胴部：横線き染文(2並止め) 口縁・胴部：横線き染文	ナデ→磨き	
19-20	甕	10.8	3.9	4.2	41度光彫	7.5YR 褐色		磨き・赤彩	磨き・赤彩	
19-21	甕	-	5	(3.6)	底部	7.5YR 褐色	におい褐色	ナデ→磨き	ハケ	P 1 出土
21-1	甕	-	-	(11.3)	口縁→胴部	7.5YR 褐色		口縁：磨き・赤彩 胴部：横線き染文(2并)	磨き・赤彩	
21-2	甕	21.7	-	(11.4)	口縁→胴部	10YR 灰青色	灰青色	口縁：磨き・赤彩 胴部：横線き染文	ナデ・赤彩	P 4 出土
21-3	甕	20.4	-	(20.5)	口縁→胴部	7.5YR 褐色	におい褐色	口縁：磨き・赤彩 胴部：横線き染文	磨き・磨き・赤彩	
21-4	甕	-	-	(15.5)	口縁→胴部	7.5YR 褐色		口縁：ハケ調整 胴部：横線き染文	厚底 ハケ調整	
21-5	甕	-	(13)	(13)	胴部→底部	7.5YR 褐色		胴部：ナデ・赤彩 磨き	厚底	
21-6	甕	29	-	(12.2)	口縁→胴部	7.5YR 褐色	におい褐色	新9並し口縁 胴部：横線き染文(5並止め) 厚底：横線き染文	厚底	輸入品
21-7	白付甕	10	-	(5.1)	口縁	10YR 褐色	におい黄褐色	磨き・赤彩	ナデ	
21-8	高埴	-	-	(8.8)	胴部	7.5YR 褐色		ナデ・磨き・赤彩	ナデ・赤彩	
21-9	高埴	21.4	-	11.9	胴部→縁部	7.5YR 褐色	におい褐色	ナデ・赤彩 山形突起を有する	ナデ・赤彩	
21-10	高埴	-	10.4	7.4	胴部→縁部	10YR 褐色	におい黄褐色	磨き・赤彩 三角形突起5単位を有する	胴部：赤彩 胴部：ナデ	
21-11	高埴	-	-	4.8	胴部→縁部	10YR 褐色	におい黄褐色	磨き・赤彩	厚底 ナデ・赤彩 浅底：ナデ	
21-12	高埴	-	12.3	(7)	縁部→胴部	7.5YR 褐色		ナデ・磨き・赤彩	厚底 ナデ・ハケ	
22-13	蓋	10.5	2.1	3.8	光彫	10YR 灰青色		ハケ→磨き	磨き	
22-14	蓋	-	2.1	(4)	%	7.5YR 褐色	におい褐色	ケズリ	ナデ	
22-15	高埴	-	-	(8.5)	胴部	5YR 褐色	褐色	磨き	ハケ	
22-16	甕	-	2.5	(5.7)	%	7.5YR 褐色	におい褐色	半染 ナデ・赤彩	ナデ→磨き	
22-17	甕	14.3	-	(4.4)	口縁	7.5YR 褐色	におい褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
22-18	甕	18.9	7.4	(28.2)	完形	10YR 褐色	におい黄褐色	口縁・胴部：横線き染文(2並止め) 胴部：横線き染文(3・4並止め) 浅底：磨き	磨き	
22-19	甕	14	-	(7.5)	口縁→胴部	10YR 褐色	褐色	口縁：黒ロハケケズリ 胴部：ナデハケ	ハケ→ケズリ	輸入品
22-20	甕	19.5	-	(16.2)	口縁→胴部	10YR 灰青色		胴部：横線き染文(2並止め) 口縁・胴部：横線き染文	磨き	
22-22	甕	17.6	-	(10.7)	口縁→胴部	7.5YR 褐色		胴部：ハケ調整 胴部：横線き染文(2並止め) 口縁・胴部：横線き染文	ナデ→磨き	
22-23	甕	17	-	(9.2)	口縁→胴部	7.5YR 褐色		厚底胴部：ハケ調整 横線き染文 口縁・胴部：横線き染文	ハケ	
22-24	甕	15.5	-	(12.4)	口縁→胴部	10YR 褐色	におい黄褐色	胴部：横線き染文(2並止め) 口縁・胴部：横線き染文	ナデ→磨き	
25-1	甕	31	-	(20)	口縁→胴部	7.5YR 褐色		口縁：ハケ調整 胴部：横線き染文	ハケ	
25-2	甕	-	-	(9.6)	胴部	7.5YR 褐色		胴部：横線き染文(2并)	ナデ	
25-3	甕	-	-	(11.7)	胴部→胴部	7.5YR 褐色	におい褐色	胴部：横線き染文(等間隔止め) 横線き染文(3・4並止め) 浅底：磨き	磨き	
25-4	甕	30.5	-	(20)	口縁→胴部	10YR 褐色	褐色	厚底 新9並し口縁 ハケ→磨き・赤彩 浅底：横線き染文	厚底	
25-5	甕	-	-	(8.5)	胴部	10YR 褐色	におい黄褐色	厚底 横線き染文(2并)	磨き ナデ	
25-6	甕	-	6.7	(8.5)	底部	10YR 褐色	におい黄褐色	ハケ	ハケ	伊体土器
25-7	甕	-	7.2	(8.3)	底部	5YR 褐色		磨き・赤彩	磨き・赤彩	
25-8	甕	-	9.5	(8.5)	胴部	5YR 褐色		磨き・赤彩	ハケ→ケズリ	
25-9	甕	-	13	(13)	胴部→底部	7.5YR 褐色		磨き・赤彩	ハケ	

表10 出土土器調査表④

番号	器種	法 量 (cm)			残存度	胎 土	成形・調整・文様			備考
		口径	底径	器高			外 面		内 面	
							厚	底		
20-10	高坏	-	-	(7.7)	坏部-胴部	7.5YR7/1 褐色	磨き・赤彩			写影: 器底 磨き 胴部: ナデ
20-11	広口壺	15.4		(5.2)	口縁部	10YR7/1 褐灰色	厚底 磨き・赤彩			赤彩
20-12	広口壺	-	5.9	(8.4)	胴部-底部	10YR7/1 に近い黄褐色	磨き・赤彩			ナデ
20-13	高坏	-	14.5	(10.2)	胴部部-胴部	10YR7/1 に近い黄褐色	磨き・赤彩			写影: 器底 磨き 磨き 胴部: ナデ
20-14	高坏	-	6.8	(5.7)	胴部部-胴部	7.5YR7/1 に近い褐色	磨き・赤彩			写影: 器底 磨き 胴部: ナデ
20-15	高坏	-	13.2	14.8	胴部部-胴部	7.5YR7/1 に近い褐色	磨き・赤彩			ハケ調整 赤彩あり
20-16	甕	24.5	8	37.5	写	10YR7/1 黄褐色	口縁-胴部: 厚底調整 胴部: 磨き 口縁-胴部: 磨き 胴部: 磨き			ナデ
20-17	甕	15.6	7.7	(19)	写	10YR7/1 黄褐色	厚底 胴部: 磨き 胴部: 磨き			厚底 ナデ
20-18	鉢	19.3	9.8	6.7	完形	7.5YR7/1 褐色	ナデ			ナデ-磨き
20-19	椀	-	4.4	(3.1)	底部	7.5YR7/1 に近い褐色	ハケ			ナデ
20-20	高坏	17.8	4.2	3.5	写	10YR7/1 灰青色	つまみ部に磨き			ナデ-磨き
20-21	甕	-	6.1	12.7	胴部-蓋部	2.5YR7/1 褐色	磨き 二次焼成			磨き 胴部: ナデ
20-22	甕	18.8		(11)	口縁-胴部	7.5YR7/1 に近い褐色	厚底 口縁: ハケ調整 胴部: 磨き			胴部: 磨き
20-23	甕	-	5.3	(2.9)	底部	10YR7/1 黄褐色	ハケ-磨き			ナデ
20-24	土製 貯水	口径 4.2	底径 11.1		完形	10YR7/1 に近い黄褐色				
20-1	甕	-	-	(4.5)	口縁部	10YR7/1 に近い黄褐色	磨き赤彩文			ナデ
20-2	高坏	31.2	-	(5.7)	坏部	10YR7/1 灰青色	ナデ・赤彩			ナデ・磨き・赤彩
20-3	高坏	27	-	(6.9)	坏部	5YR7/1 褐色	磨き・赤彩			磨き・赤彩
20-4	甕	-	2.4 3.4	(3.2)	つまみ部	10YR7/1 に近い褐色	磨き 厚底調整 厚底孔を有する			ハケ-磨き
20-5	高坏	-	-	(8.1)	坏部-胴部	7.5YR7/1 に近い褐色	厚底 磨き・赤彩			厚底 赤彩
20-6	高坏	-	-	(12.6)	坏部-胴部	10YR7/1 に近い黄褐色 10YR7/1 褐色	ナデ・磨き・赤彩			胴部: 赤彩
20-7	甕	-	5.3	(5.3)	底部	10YR7/1 黄褐色	ナデ-磨き			ハケ-磨き
20-8	鉢	12.6	-	(4.4)	口縁-胴部	5YR7/1 に近い褐色	厚底 ナデ・赤彩			ナデ
20-9	土製 貯水	口径 4.7			写	2.5YR7/1 に近い黄褐色				
20-1	甕	30.2	-	(9)	口縁-胴部	10YR7/1 灰青色	口縁: 磨き・赤彩 胴部: 磨き赤彩文			ナデ
20-2	広口壺	5.4	(9)		胴部-蓋部	7.5YR7/1 褐色	ナデ・赤彩			ナデ
20-3	広口壺	14.9	-	(8.7)	口縁-胴部	7.5YR7/1 褐色	ナデ・赤彩			ナデ・赤彩
20-4	甕	18.6	6.3	18.7	写	10YR7/1 に近い黄褐色	厚底 胴部: 磨き赤彩文 胴部: 磨き赤彩文			ナデ
20-5	甕	-	6.2	(7)	胴部-底部	7.5YR7/1 褐色	磨き・赤彩			ナデ
20-6	鉢	18.3	-	(21.3)	口縁-胴部	7.5YR7/1 褐色	口縁: ハケ調整 胴部: 磨き赤彩文 (2通止め) 胴部: 磨き赤彩文			ナデ-磨き
20-7	甕	19.4		(21.2)	口縁-胴部	10YR7/1 褐色	厚底 胴部: 磨き赤彩文 (2通止め) 胴部: 磨き赤彩文			ナデ
20-8	甕	-	2.4 4.7	(2.7)	つまみ部	10YR7/1 に近い黄褐色	ハケ調整 厚底調整 厚底孔を有する			ナデ
20-9	高坏	-	14.1	(7.2)	胴部	10YR7/1 に近い黄褐色	磨き・赤彩 二角形通孔を有する			ナデ
20-10	甕	20.1	-	13.9	口縁-胴部	10YR7/1 灰青色	ナデ-磨き			磨き・磨き
20-1	高坏	14.2	8.4	14.5	写	5YR7/1 褐色	ナデ・磨き・赤彩			厚底
20-2	六角鉢	12.4	6.8	15.1	完形	7.5YR7/1 に近い褐色	磨き・赤彩			磨き・赤彩
20-3	高坏	-	6.6	(4.9)	胴部	10YR7/1 に近い黄褐色	ナデ			ナデ

表11 出土土器観察表⑤

番号	器種	法 量 (cm)			残存度	土 質	成形・調整・文様		備考
		口徑	底径	高さ			外 面	内 面	
32-4	鉢	11	3.4	5	完形	5YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	ナデ・赤彩	
32-5	鉢	22.5	5.9	11.1	欠	10YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
32-6	壺	35.7	12.4	7.0	欠	7.5YR 6/1 褐色 10YR 7/1 灰白色	11編・胴部：磨き・赤彩 頸部：磨き・赤彩 下文字 (2対) ボタン状凸文	胴部	
32-7	甕	—	6.2	(6.6)	胴部→胴部	10YR 7/1 灰白色	胴部：磨き・赤彩	ナデ	
32-8	甕	27	—	(26.7)	欠	10YR 7/1 灰白色	11編・胴部：磨き・赤彩 頸部：磨き・赤彩 磨き・赤彩	ナデ (1編・赤彩)	赤彩出土 (早期)
32-9	甕	—	8.8	(8.1)	欠	5YR 7/1 褐色	磨き・赤彩	摩滅	
36-1	甕	18	—	(3.6)	口縁部	7.5YR 7/1 灰白色	ナデ・磨き・赤彩 二孔一対の突起孔を有する	ナデ→赤彩	
36-2	高坏	20.8	—	(5.9)	坏部	7.5YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
36-3	高坏	(24.5)	—	(5.7)	坏部	10YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
36-4	高坏	—	8	(4.6)	坏部	7.5YR 7/1 灰白色	磨き	ハケ	
36-5	高坏	—	8.3	(4.4)	胴部	2.5YR 7/1 明赤褐色	磨き	ナデ	
36-6	甕	—	7.4 2.9	(7.2)	つまみ部	7.5YR 7/1 灰白色	ハケ→磨き	磨き	
36-7	内付甕	25.8	—	13.7	欠	7.5YR 7/1 褐色	胴部：ハケ調整→磨き・赤彩 口縁・胴部：磨き・赤彩	磨き	
36-8	甕	24.5	—	(12.1)	口縁→胴部	10YR 7/1 明赤褐色	11編・胴部：磨き・赤彩 頸部：磨き・赤彩	ナデ	
36-9	甕	—	7	(6.7)	底部	10YR 7/1 灰白色	ハケ→磨き	摩滅	
36-10	甕	—	7.4 3.5	(4.6)	欠	7.5YR 7/1 灰白色	磨き 指痕	ナデ	
38-1	高坏	25.5	—	(9.1)	坏部	10YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
38-2	高坏	—	—	(6.9)	坏部→胴部	10YR 7/1 灰白色 5YR 7/1 褐色	磨き	11編・磨き・赤彩 磨き・赤彩	
38-3	高坏	—	—	(6.5)	坏部→胴部	7.5YR 7/1 灰白色	磨き→赤彩	磨き	
38-4	甕	17.2	—	(15.5)	口縁→胴部	10YR 7/1 灰白色	胴部：磨き・赤彩 (3通止め) 頸部：磨き・赤彩	ナデ	輸入品
38-5	甕	21.1	—	(18.3)	口縁→胴部	7.5YR 7/1 褐色	胴部：磨き・赤彩 (3通止め) 11編：磨き・赤彩	ナデ	
38-6	甕	28	—	(26)	口縁→胴部	5YR 7/1 明赤褐色	摩滅 磨き・赤彩 胴部：磨き・赤彩 (2通止め) 11編・胴部：磨き・赤彩	摩滅	
38-7	甕	22.1	—	(25.2)	11編→胴部	7.5YR 7/1 褐色	胴部：磨き・赤彩 (3通止め) 11編・胴部：磨き・赤彩	ナデ ハケ	
38-8	甕	22.1	—	(28.1)	口縁→胴部	10YR 7/1 灰白色	胴部：磨き・赤彩 (3通止め) 11編・胴部：磨き・赤彩	ナデ→磨き	
38-9	甕	19.6	—	(7.6)	口縁部	7.5YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	ハケ	
40-1	甕	37	—	(13)	口縁→胴部	7.5YR 7/1 灰白色	11編・磨き・赤彩 胴部：磨き・赤彩 (2対)	赤彩	
40-2	甕	—	7.4 3.3	(3.3)	つまみ部	5YR 7/1 褐色 10YR 7/1 灰白色	ナデ	ナデ	24出土
41-2	甕	—	13.9	(16.5)	胴部→赤彩	7.5YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	摩滅	赤彩出土
44-1	壺	30	—	(13.9)	口縁部	7.5YR 7/1 褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
44-2	高坏	25.8	—	(5.6)	坏部	10YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩 口縁突起を有する (4年)	磨き・赤彩	
44-3	甕	—	—	(16.6)	11編→胴部	10YR 7/1 明赤褐色	胴部：ハケ・赤彩 磨き・赤彩 (2対)	摩滅 11編・赤彩	
44-4	甕	—	5	(8.2)	胴部→胴部	2.5YR 7/1 褐色	ナデ→ハケ	ハケ	赤彩出土 (早期)
44-5	広口壺	12.6	—	(5.5)	口縁→胴部	10YR 7/1 灰白色	ナデ・赤彩 胴部	摩滅 ナデ	
44-6	高坏	—	16.7	(16.1)	坏部→胴部	10YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	胴部：磨き・赤彩	
44-7	高坏	—	6.7	(6.1)	胴部	10YR 7/1 灰白色	摩滅 ナデ	ナデ	
44-8	高坏	—	7.5	(7.4)	胴部	10YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	摩滅 ナデ・赤彩	
44-9	甕	12.2	4.3	5.8	欠	7.5YR 7/1 灰白色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
44-10	甕	11.6	3.9	5.5	欠	7.5YR 7/1 褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	

表12 出土土器類病表 ①

番号	器種	法 量 (cm)			残存度	胎 土	成形・成形・文様		備考
		口径	底径	器高			外 形	内 面	
44-11	甕	—	—	(23.8)	腹部	5YR% 明赤褐色	輪締き同文(原文)(輪底形状)	ナデ	
44-12	甕	14.2	7.1	17.1	%	10YR% におい黄褐色	摩滅 口縁・胴部: 輪締き染状文 頸部: 輪締き染状文(2連止め)	摩滅	床面出土 (埋蔵)
44-13	甕	—	8.2	(23.7)	%	10YR% におい黄褐色	摩滅 胴部: 輪締き染状文 磨き	磨き	
45-14	甕	16.9	—	6.9	口縁部	10YR% におい黄褐色	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	床面出土 (埋蔵)
45-15	甕	24.8	—	(7.6)	口縁→胴部	7.5YR% 褐色	胴部: 輪締き染状文(2連止め) 口縁: 輪締き染状文	ナデ→磨き	
45-16	甕	15	—	12.8	口縁→胴部	5YR% 赤褐色	胴部: 輪締き染状文(2連止め) 口縁: 輪締き染状文	ハケ→ナデ	床面出土
45-17	片口鉢	10.5	7.2	15.5	底部	10YR% 灰青色	ハケ→磨き		
45-18	甕	17.4	—	18.2	口縁→胴部	5YR% 褐色	摩滅 口縁: 輪締き染状文 胴部: 輪締き染状文(2連止め)	摩滅 ナデ	
45-19	小型甕	12.4	5	14.2	%	7.5YR% におい褐色	胴部: 輪締き染状文(2連止め) 口縁 口縁: 輪締き染状文 磨き→ナデ	ハケ 磨きナデ	
45-20	小型甕	10.4	4.1	11.9	底部	10YR% におい黄褐色	胴部: 輪締き染状文 頸部: 輪締き染状文(2連止め)	磨き	
45-21	白付甕	11.7	—	(11.8)	%	5YR% 明赤褐色 10YR% におい黄褐色	口縁・胴部: 輪締き染状文 頸部: 輪締き染状文(2連止め)	ハケ	P9出土
45-22	白付甕	13	—	(11.4)	%	10YR% 明赤褐色	胴部: 輪締き染状文(帯状開止め) 口縁・胴部: 輪締き染状文	磨き	
45-23	甕	18.9	4.7	10.8	底部	7.5YR% 褐色	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
45-24	甕	18.5	4.2	11.8	底部	10YR% におい黄褐色	磨き	磨き	
46-1	高杯	23.9	—	(9.6)	底部	10YR% 灰青色 10YR% におい黄褐色	摩滅 ナデ・底部 山形突起を考する	摩滅 ナデ・底部	
46-2	高杯	—	—	(3)	接合部	7.5YR% 褐色	赤影	底部・赤影	
46-3	高杯	20.5	—	(11.4)	底部	10YR% におい黄褐色	磨き・赤影	磨き・赤影	床面出土 (埋蔵)
46-4	甕	18.2	—	(16.2)	口縁→胴部	10YR% におい黄褐色	摩滅 胴部: 輪締き染状文 口縁・胴部: 輪締き染状文	摩滅 ナデ	
46-5	甕	32.4	—	(11.5)	口縁→胴部	5YR% 褐色 7.5YR% 褐色	口縁: 輪締き染状文 胴部: 輪締き染状文(2連止め)	ナデ	
46-6	甕	22.5	—	(10.7)	口縁→胴部	5YR% 褐色	胴部: 輪締き染状文(2連止め) 口縁・胴部: 輪締き染状文	ナデ→磨き	
46-7	甕	—	8.1	(12.3)	胴部→底部	10YR% 褐色	ハケ・底部染状文	ナデ	
46-8	鉢	17.2	—	(7.1)	口縁→胴部	7.5YR% におい褐色	ナデ・磨き・赤影 片口を有する	ナデ・磨き・赤影	
50-1	高杯	21	—	(8.9)	底部	5YR% 明赤褐色	ナデ・赤影	ナデ・赤影	
50-2	甕	18	—	(6.2)	口縁→胴部	7.5YR% 褐色	頸部輪締き丁字文(2対)	ナデ	
50-3	甕	—	10.23	(11.7)	胴部→底部	10YR% におい黄褐色 10YR% 灰青色	ナデ	ハケ→ナデ	
50-4	高杯	—	—	(10.9)	底部	5YR% 明赤褐色	摩滅 赤影	ナデ	
50-5	甕	4.7	—	(3.2)	%	20YR% 灰青色	ナデ	ナデ・ハケ磨き	
50-6	小型甕	8.6	4.3	9.7	底部	10YR% におい黄褐色	摩滅 胴部: 輪締き染状文(2連止め) 胴部: 輪締き染状文	摩滅 ナデ	
50-7	高杯	—	—	(6.9)	%	10YR% 褐色 7.5YR% におい褐色	ナデ	ナデ	
50-8	手摺 甕	4.5	3.9	6.6	%	5YR% 明赤褐色 7.5YR% 褐色	ナデ 指環痕	ナデ	
50-9	甕	16.6	6.6	24.1	%	10YR% におい黄褐色	磨き	ナデ	
50-1	甕	—	5.3	(6.6)	底部	7.5YR% におい褐色	摩滅 ナデ・赤影	磨き・赤影	
50-2	甕	—	4.9	(5.6)	底部	7.5YR% 褐色	摩滅 ナデ・赤影	摩滅 ナデ・赤影	
50-3	甕	15.5	—	(11.8)	口縁→胴部	7.5YR% 褐色	口縁・胴部: 輪締き染状文 胴部: 輪締き染状文(2連止め)	摩滅	
50-4	甕	—	6	(10.4)	胴部→底部	10YR% 灰青色	ナデ・磨き・赤影	ハケ→ナデ	
54-1	高杯	—	—	(6.2)	底部	7.5YR% 褐色	磨き・赤影	磨き・赤影	
54-2	高杯	—	—	(6.2)	底部→接合部	7.5YR% 灰青色	磨き・赤影	ナデ・赤影	
54-3	小型甕	13.6	—	(7.1)	口縁→胴部	10YR% におい黄褐色	摩滅 胴部: 輪締き染状文(帯状開止め) 口縁: 輪締き染状文	ナデ	

表13 出土土器調査表 ⑦

番号	器種	法 量 (cm)			残存度	胎 土	成形・製作・文様		備考
		口径	底径	高さ			外 形	内 面	
54-4	甕	22.1	-	(2.3)	口縁→胴部	7.5YR 5% 明褐色	厚縁 胴部: 横線と縦線文 (2道止め) 口縁: 横線と縦線文	ナデ	P4山土
54-5	小型甕	12.8	-	(7.5)	口縁→胴部	10YR 5% 灰青褐色	厚縁: 縦線と横線文 口縁	ナデ	
54-6	甕	-	7.9	(25.0)	底	7.5YR 5% 褐色	厚縁 ナデ	ナデ	
55-1	山口甕	14.8	-	(9.9)	口縁→胴部	7.5YR 5% によひ褐色	胴部: 横線と山線文 赤彩 一部白色化	口縁: ナデ・赤彩 一部黒色化	
56-1	甕	24.8	12	(52.9)	底	7.5YR 5% 褐色	口縁: 胴部: 縦線と山線文 胴部: 横線と山線文 (2道止め)	黒色を塗する	
56-2	甕	-	-	(13.9)	胴部	10YR 5% 褐色 10YR 5% 黄褐色	赤彩 胴部: 横線とT字文 (2列) 口縁: 赤彩	厚縁 赤彩	
56-3	甕	25.1	-	(9.5)	口縁→胴部	5YR 5% 褐色	胴部: 横線とT字文 (2列) 口縁: ハケ	厚縁 ナデ・ハケ	
56-4	小型甕	8.8	4.2	8.5	完形	10YR 5% によひ黄褐色	厚縁 胴部: 横線と山線文 (4道止め) 口縁: 胴部: 横線と山線文 胴部: 山線とT字文 (2列)		
56-5	甕	14	-	5.8	口縁→胴部	10YR 5% によひ黄褐色	厚縁 胴部: 横線と山線文 (2道止め) 口縁: 赤線と山線文		
56-1	高坪	-	-	(6.4)	底部	7.5YR 5% 褐色	厚縁 ナデ・赤彩	厚縁 ナデ・赤彩	
56-2	高坪	-	-	(8.7)	胴部	5YR 5% 明赤褐色	厚縁	厚縁	
56-3	鉢	11.8	5.7	8.2	口縁→胴部	7.5YR 5% 褐色	厚縁 ナデ	厚縁 ナデ	
56-4	鉢	-	-	(16.5)	胴部→胴部	7.5YR 5% によひ褐色	厚縁 胴部: 横線と山線文 (2道止め)	ナデ	
56-1	甕	-	-	(25)	胴部→胴部	7.5YR 5% 褐色	厚縁 胴部: ハケ・横線とT字文 (1列) 一部山線と山線文	厚縁 胴部	
56-2	甕	-	-	(11.2)	胴部	10YR 5% 灰青褐色 10YR 5% 褐色	縁: 横線とT字文 (2列)	ナデ	
56-3	高坪	25.8	-	(10.8)	底部	5YR 5% によひ赤褐色	厚縁 ナデ・赤彩	厚縁 ナデ・赤彩	
56-4	鉢	20.1	7.1	11	底	10YR 5% 褐色 10YR 5% 灰白色	厚縁 ハケ	厚縁 ハケ	
56-5	鉢	15.3	6.7	8.5	底	10YR 5% によひ黄褐色	ナデ	磨き	
56-6	鉢	17.8	6.1	7.3	底	10YR 5% 灰青褐色	磨き・赤彩	厚縁 磨き・赤彩	
56-7	山口甕	15.9	-	8.8	底	10YR 5% 褐色	磨き・赤彩	口縁: 磨き・赤彩 胴部: ナデ	
56-8	甕	-	つよみ 4.5	5.3	底	10YR 5% によひ黄褐色	ナデ・磨き	ナデ	
56-9	甕	18.9	つよみ 2.3	4.3	底	10YR 5% 灰青褐色	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
56-10	甕	-	つよみ 5.7	(8.6)	底	10YR 5% によひ黄褐色	ナデ・ハケケズリ	ナデ	
56-11	甕	29	6	28.4	底部	10YR 5% によひ黄褐色	ハケ・磨き	ハケ・磨き	
56-12	甕	16.2	-	(10)	底	5YR 5% 明赤褐色 10YR 5% 褐色	口縁: 胴部: 横線と山線文 胴部: 縦線と山線文 (2道止め)	ハケ・磨き	
56-13	甕	15.0	-	10.5	底	10YR 5% 褐色	胴部: 縦線と山線文 (2道止め) 口縁: 磨き・横線と山線文	ナデ	
56-14	甕	13.6	-	(9.4)	口縁→胴部	7.5YR 5% によひ褐色	厚縁 胴部: 横線と山線文 (2道止め) 口縁: 磨き・横線と山線文	厚縁	
56-15	高坪	-	(10.5)	(8.8)	接合部→胴部	7.5YR 5% によひ褐色	磨き・赤彩	厚縁 磨き・赤彩 胴部: ハケナデ	
56-16	甕	-	つよみ 4.8	(8.4)	底	10YR 5% によひ黄褐色	厚縁 磨き	厚縁 磨き・ハケ	
57-1	甕	13.9	つよみ 3	7.8	底	10YR 5% 灰青褐色	北原庄山→ハケ	ハケ	
57-2	甕	16.5	7.7	24.7	底	7.5YR 5% 明褐色	胴部: 横線と山線文 (4道止め) 口縁: 胴部: 縦線と山線文	厚縁	
58-1	甕	-	8	(12.8)	底部	7.5YR 5% 褐色	磨き→ハケ	ハケ	
71-1	甕	22.8	-	(16.9)	底	7.5YR 5% 褐色	胴部: 磨きと山線文 (2道止め) 口縁: 胴部: 横線と山線文	厚縁 ナデ	東国出土
71-2	甕	-	5.4	19.6	胴部→底部	10YR 5% 明赤褐色	胴部: 磨きと山線文	ナデ→磨き	
72-1	高坪	-	11.5	11	底部	7.5YR 5% によひ褐色	厚縁	厚縁	
72-2	甕	17.9	-	(15.7)	口縁→胴部	7.5YR 5% 褐色	胴部: 磨きと山線文 (2道止め) 口縁: 磨き・横線と山線文	磨き・赤彩	P5山土
72-3	甕	29	-	(22.7)	口縁→胴部	7.5YR 5% 褐色	厚縁 口縁: 胴部: 磨きと山線文 胴部: 磨きと山線文 (2道止め)	厚縁	

表14 出土土器観察表 ⑧

番号	器種	法 量 (cm)			積存度	胎 土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	式 型	
72-4	甕	19.6	7.4	25.9	底部	7.5YR 褐色	頸部：横線と縦線文(2道止め) 口縁・胴部：横線と縦線文	磨き? ハケ?	
77-1	瓶	—	6.7 (6.3)	—	底部	7.5YR 褐色	厚縁 磨き? 赤彩	厚縁・ナデ	
81-1	高杯	—	2.1 (7.6)	—	胴部	7.5YR 白色	磨き・赤彩 二角形穿孔を有する	厚縁・赤彩 ナデ	
81-2	手拭袋	—	3.6 (6.7)	—	口	7.5YR 褐色	厚縁：横線と縦線文+ケズリ→横線と縦線文	厚縁	
81-3	甕	—	10.1 (9)	—	胴部	7.5YR 土っぽい褐色	ハケ	ハケ	
81-4	甕	20.8	—	(7.4)	口	7.5YR 淡黄褐色	厚縁：横線と縦線文(2道止め) 口縁・胴部：横線と縦線文	ナデ	
81-5	鉢	18	5.8	21	口	7.5YR 褐色	厚縁 胴部：如何き縦線文(2道止め) 口縁部：割目 口縁：横線と縦線文 胴部：横線と縦線文	厚縁・ハケ	
81-6	鉢	—	—	(20.2)	口	7.5YR 褐色	厚縁：横線と縦線文(2道止め) 口縁・胴部：横線と縦線文	磨き	
81-7	甕	12.4	—	(7.5)	口縁→胴部	5YR 土っぽい褐色	厚縁 胴部：横線と縦線文(等間隔?) 口縁・胴部：横線と縦線文	磨き	
81-8	甕	—	5.4 (9.8)	—	胴部→底部	10YR 土っぽい黄褐色	厚縁 横線と縦線文	ナデ	
84-1	壺	—	13.2 (11)	—	胴部	10YR 黄褐色	厚縁・赤彩	ハケ	
84-2	甕	15.9	—	(14)	口	10YR 土っぽい黄褐色	厚縁：ハケ?→横線と縦線文(3道止め) 口縁・胴部：横線と縦線文	磨き	
84-3	甕	40.5	—	(8.1)	口縁部	7.5YR 褐色	ハケ・赤彩	厚縁・赤彩	
84-4	鉢	20.5	—	(17.8)	口	10YR 土っぽい黄褐色	厚縁 口縁・胴部：横線と縦線文 胴部：横線と縦線文(3道止め)	磨き	
84-5	甕	—	7.4 (5.2)	—	口	7.5YR 土っぽい褐色	ハケ・指紋印痕 つまみ型に穿孔を有する	ハケ	
84-6	甕	—	12.1 (6.6)	—	底部	7.5YR 褐色	ナデ	ナデ・ケズリ	
84-7	甕	—	5.8 (11.1)	—	胴部→底部	7.5YR 褐色	ナデ・赤彩	磨き・ハケ	
84-8	小壺	—	3.9 (8.5)	—	口	10YR 土っぽい黄褐色	厚縁・胴部：横線と縦線文 胴部：横線と縦線文(2道止め)	磨き・ナデ	
84-9	甕	34.2	—	(8.8)	口縁部	10YR 土っぽい黄褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
84-10	高杯	24.8	—	(8.4)	厚部	7.5YR 淡黄褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
84-11	小壺	14.1	—	(10.3)	口	5YR 明赤褐色	口縁→胴部ハケ 胴部：横線と縦線文(2道止め) 口縁・胴部：横線と縦線文	ハケ・磨き	
84-12	高杯	—	9.4 (9)	—	胴部→胴部	5YR 土っぽい褐色 明赤褐色	ハケ・磨き	磨き	
84-13	高杯	—	18.5 (17.5)	—	胴部→胴部	7.5YR 褐色	磨き・赤彩 二角形穿孔を有する	厚縁・磨き・赤彩 胴部・ハケ	
84-14	壺	—	—	(15.7)	胴部	10YR 土っぽい黄褐色	磨き	ハケ	
84-15	鉢	21.9	9.7	32.1	底部	10YR 土っぽい黄褐色	口縁→胴部：横線と縦線文 胴部：磨き	磨き	
84-16	甕	25.9	—	8.2	口縁→胴部	7.5YR 土っぽい褐色	厚縁：横線と縦線文(2道止め) 口縁・胴部：横線と縦線文	磨き	
84-17	壺	16.8	—	(4.8)	口縁→胴部	10YR 灰白色	厚縁 ハケ	ハケ	個人品
84-18	甕	—	7 (4.8)	—	底部	10YR 明赤褐色	磨き・赤彩	ハケ	
84-19	甕	—	7 (3)	—	底部	7.5YR 褐色	厚縁 赤彩	磨き・赤彩	
84-20	土器片	長さ 1.9	幅 0.9	厚さ 1.0	重さ 1.2g	—	つまみ型に穿孔を有する	—	
90-1	甕	—	7.1 (28.4)	—	口	7.5YR 淡黄褐色	磨き・赤彩	ハケ	
92-2	甕	21	7.3	28.8	底部	7.5YR 土っぽい褐色	厚縁：ハケ→横線と縦線文(等間隔止め) 口縁・胴部：横線と縦線文	ハケ	
93-3	鉢	13.8	5	6.4	口	7.5YR 淡黄褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
93-4	鉢	11.9	3.8	5.4	底部	7.5YR 褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
93-5	鉢	18.1	5.1	8.8	底部	5YR 褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
93-6	高杯	—	8.3 (8.5)	—	胴部→胴部	7.5YR 褐色	厚縁 ナデ	厚縁 ナデ ハケ	
93-7	甕	—	7.6 (22.9)	—	口	7.5YR 褐色	厚縁：横線と縦線文 胴部：ナデ・赤彩	厚縁 厚縁	

表15 出土土器観察表 ⑤

番号	器種	規 量(二)			残存度	胎 土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外 面	内 面	
90-9	高杯	23	-	(7.4)	ほぼ	7.5YR5/6 褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
90-9	盤	-	12.5	(8.9)	底部	7.5YR5/6 淡灰褐色	磨き・赤彩	摩滅 ハケ	
90-10	皿	-	11	(12.3)	胴部-底部	7.5YR5/6 淡灰褐色	摩滅 磨き・赤彩	摩滅 ハケ	
90-11	高杯	-	14.5	(9.5)	胴部	7.5YR5/6 褐色	磨き・赤彩 一部黒色化	摩滅 ハケ	
90-12	高杯	-	10.4	(17.1)	胴部	10YR3/6 に近い黄褐色	磨き・赤彩	ハケ	
90-13	甕	-	つよみ 3.8	4.7	口	5YR5/6 褐色	摩滅・ナデ	摩滅・ナデ	
90-14	甕	25.8	-	24.2	口	10YR5/6 明黄褐色	胴部：磨き輪状文(3道止め・2列) 口縁・胴部：磨き輪状文	ハケ	
90-15	甕	15.2	-	(12.4)	口縁-胴部	10YR5/6 に近い黄褐色	摩滅 胴部：磨き輪状文(等間隔止め) 口縁・胴部：磨き輪状文	磨き	
90-16	皿	-	6.1	(6.5)	底部	7.5YR5/6 褐色	磨き	摩滅 ナデ	
90-17	甕	15.4	-	(10.4)	口縁-胴部	7.5YR5/6 に近い褐色	胴部：ハケ・磨き輪状文(4道止め) 口縁・胴部：磨き輪状文	摩滅	
90-18	古存甕	9.8	-	(11.5)	口	10YR3/6 黒褐色	胴部 胴部：磨き輪状文(2道止め・2列) 口縁・胴部：磨き輪状文	ナデ	
90-19	二輪片 同型	最大径 4.1	重量 19.1g						
94-1	高杯	25.7	-	(8.1)	ほぼ	7.5YR5/6 褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
94-2	高杯	25.8	-	(8.2)	ほぼ	7.5YR5/6 褐色	磨き・赤彩	磨き・赤彩	
94-3	盤	-	6.4	(15)	口	7.5YR5/6 褐色	磨き・赤彩	ハケ・ナデ	
94-4	瓶	-	4.1	(3.5)	底部	7.5YR5/6 褐色	摩滅 ハケ	ハケ	

表16 住居址観察表

遺構名	検出位置	平面形態	礎長	礎幅	面積 (㎡)	壁厚 (cm)	長軸方位	方位	中心位置	柱穴ピット	その他の付属施設	備考
Y 1	F<6.7 F16.7	隅丸長方形	5.74	4.52	24.43	12.5-33.5	(N-8°-W)	なし	なし	柱穴4	階段下 穴溝	Y7、3位に切られる
Y 2	F<6.6 F<5.6	隅丸長方形	5.48	3.35	17.93	2-11	N-87°-E	中央付託 2基 主柱穴1	7基 主柱穴4	入口施設	Y15、22位を切る	
Y 3	F<6.6, 6.7 F<5.5, 5.7 F<5.7	隅丸長方形	7.79	5.22	37.11	11-25.5	(N-56.5°-E)	主柱穴1	16基 主柱穴4 礎石4柱1	入口施設? (南壁?)	Y2、15、17位に切られる	
Y 4	G1<8.10 G2<9.10 G3<9.10	隅丸長方形	6.6	4.5	26.97	2-34	N-4°-E	主柱穴1 (土器敷?)	7基 主柱穴4 礎石4柱1	入口施設	D12位に切られる	
Y 5	G2<6.7 G2<6.7 G2<6.7	隅丸長方形?	-	5.34	36.72	12-25.5	(N 73.5° W)	中央付託	5基 主柱穴2		Y5位に切られる D22を切る	
Y 6	G1<8 G2<6.7, 8 G2<7.8, 8.9 G2<7.8, 8.9	隅丸長方形 (大形)	10.18	6.24	62.99	11-37.5	N-22°-E	主柱穴1 中央付託 中央礎石	15基 主柱穴4 礎石4柱1	入口施設	D11に切られる Y5位を切る	
Y 7	G1<6.7 G2<6.7	隅丸長方形	6.18	5.14	28.25	18.5-40.5	N-17°-E	主柱穴1 (土器敷?)	8基 主柱穴3	入口施設	Y5、34位、D13位に切られる	
Y 8	G1<5.6 G2<5.6	隅丸長方形	5.1	3.68	17.52	3.5-14	(N-6.5°-W)	主柱穴1	主柱穴4		Y34位に切られる Y7を切る	
Y 9	F<7.8, 8.9 C<7.8, 8.9	隅丸長方形	5.34	4.06	21.89	9-18	N 73° E	中央付託 中央礎石	5基 主柱穴4 礎石4柱1		Y19、16位を切る	
Y 10	F<7.7 F<7.7, 8.9 G<7.7, 8	隅丸長方形	(6.50)	(4.52)	(28.24)	6-12	(N-71°-E)	中央付託	主柱穴4		Y9、16位、D5位に切られる 礎石4基	
Y 11	F<8.9 F<8.9 F<8.9	隅丸長方形 (小形)	3.7	3.22	11.47	22-35	N-48°-W	中央北寄り 中央礎石	11基 礎石9 基石1	入口施設	Y35位を切る	
Y 12	G1<3.4, 5 G2<3.4, 5	隅丸長方形	5.76	4.68	22.98	0-34	(N 45° W)	主柱穴1 中央北寄り	7基 主柱穴4	入口施設	D11、12、P4、P39に切られる	
Y 13	F<5 F<4.5, 6 G<5.6	隅丸長方形	7.96	4.98	37.27	0-34	N-51°-E	主柱穴1 中央北寄り	8基 主柱穴4		Y7、15位、D13、15、16位に切られる Y11、12位、D22を切る	
Y 14	F<10 F<10 F<10	隅丸長方形	-	4.98	-	0-31		中央付託	4基 主柱穴3		M1に切られる M7を切る	
Y 15	F<5.6 F<5.6	隅丸長方形	6.32	4.62	25.64	5-13	N 87° E	なし	2基 主柱穴2		Y25位に切られる Y22位を切る 礎石4基	
Y 16	F<8.9 G<8.9	隅丸長方形	5.6	3.74	17.78	6-30	N-69°-E	主柱穴1 中央付託	12基 主柱穴6	入口施設	Y8位に切られる Y10位を切る 礎石4基	
Y 17	F<7 F<6.7, 8 F<6.7, 8	隅丸長方形	6.1	4.64	21.49	14-35	N 33° E	主柱穴1 中央北寄り (土器敷?)	7基 主柱穴4		Y3位を切る 礎石4基	
Y 18	F<8.9 F<8.9	長方形	5.2	3.84	15.64	12-33	N-25.5°-E	中央	3基 主柱穴2		P39に切られる	
Y 19	F<1.2 G<1.2	隅丸長方形 (小形)	3.42	3.0	10.20	3-30	N-2°-E	主柱穴1 中央北寄り	6基 主柱穴4			
Y 20	F<4.5 F<4.5 F<4.5	隅丸長方形 (小形)	3.18	2.7	7.87	6-23	N-17.5°-E	中央北寄り 2基	4基	入口施設	M1に切られる	
Y 21	G<8.10 G<8.10 F<1-G<8.10	隅丸長方形	7.34	4.2	29.73	30-37	N-54°-E	主柱穴1 (礎石?)	5基 主柱穴4 礎石4柱1		Y28、30位を切る	
Y 22	F<8.9 F<8.9	隅丸長方形	5.1	3.62	(17)	0-25	N-18°-W	主柱穴1 中央	6基 主柱穴4	入口施設?	Y7、13、15位に切られる	
Y 23	F<8.9 F<8.9	隅丸長方形?	6.5	-	-	20-25	(N-72.5°-E)	主柱穴1 中央	10基 主柱穴4 礎石4柱1		Y29、30位を切る	
Y 24	F<8.9 F<8.9	不規則の隅丸長方形	3.95	3.28	10.25	24-32	N-29°-W	なし	なし		K3、M3を切る	
Y 25	G<1.2 G<1.2	隅丸長方形	5.78	4.34	24.83	28-40	N-84°-E	主柱穴1 中央付託	24基 主柱穴4 礎石4柱1		Y26、27位を切る	
Y 26	G<1.2	隅丸長方形?	(5.9)	-	8-16			なし	2基 主柱穴2		Y28位に切られる Y25位との切り合い不明	
Y 27	G1<2.3 G2<2.3	隅丸長方形?	5.3	(4.06)	(21.28)	12-23	(N-0°-E)	主柱穴1 中央付託 (土器敷?)	5基 主柱穴4?		Y25位に切られる Y28位との切り合い不明	
Y 28	A<4.9 A<4.9 A<4.9	長方形?	(4.4)	-	-	12-19	(N-75°-E)	主柱穴1	3基		M3に切られる Y31位との切り合い不明	
Y 29	A<4.9 A<4.9 A<4.9	隅丸長方形?	(6.4)	-	-	16-26	(N-16°-W)	中央付託 2基 主柱穴1	6基 主柱穴4		Y31、23位 M3に切られる	
Y 30	A<8.9, 10 B<9, 10 B<9, 10	隅丸長方形?	-	(5.50)	-	15-19	N-23.5°-W	主柱穴1 主柱穴2 主柱穴4	7基 主柱穴3		Y2、23、29位に切られる	
Y 31	A1<8	隅丸長方形?	-	(2.60)	-	9-22		なし	なし		M3に切られる Y28位との切り合い不明 一部の基礎	
Y 32	G<1 G<1	隅丸長方形?	-	-	-	20-28		なし (礎石区外?)	なし (礎石区外?)		一部の基礎 礎石4基	
Y 33	C<6.7	方形?	-	-	-	22-33		なし (礎石区外?)	なし (礎石区外?)		一部の基礎 礎石4基	
Y 34	G1<6.6 G2<5.5	不規則 (小形)	(5.0)	(4.32)	-	6	(N-6°-W)	中央付託?	なし		Y7、8位を切る D11、P39に切られる Y11位に切られる P39に切られる	
Y 35	F<8.9	隅丸長方形?	-	-	-	0-16		なし	3基			
Y 36	F<4.5 F1<4	隅丸長方形 (小形)	3.42	3.02	(9.86)	5-11	(N-40.5°-E)	中央付託	7基 主柱穴4		Y15位に切られる	



Y1号住居址 西より



Y2号、Y15号住居址 南より



Y3号住居址 西より



Y4号住居址 南より



Y5号住居址 南より



Y6号住居址 南東より



Y7号住居址 西より



Y8号住居址 東より



Y8号住居址 鉄弁出土状況 東より



Y8号住居址 南より



Y10号住居址 西より



Y11号、Y35号住居址 東より



Y12号住居址 東より



Y13号住居址 南より



Y16号住居址 南より



Y17号住居址 北東より



Y18号住居址 南西より



Y19号住居址 南より



Y20号住居址 南より



Y21号住居址 北より



Y22号住居址 西より



Y23号住居址 北東より



Y24号住居址 西より



Y25号住居址 北より



Y27号住居址 南より



Y28号住居址 北より



Y29号住居址 南より



Y30号住居址 北より



Y31号住居址 北より



Y32号住居址 北東より



Y33号住居址 北より



Y36号住居址 南より



D 1号土坑址 南西より



D 2号土坑址 東より



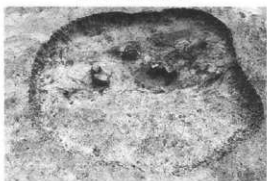
D 3号土坑址 南西より



D 4号土坑址 東より



D 5号土坑址 北より



D 6号土坑址 東より



D 7号土坑址 西より



D 8号土坑址 北より



D9号土坑址 北西より



D10号土坑址 東より



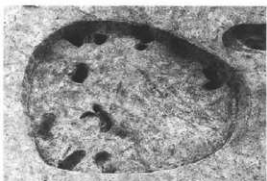
D11号土坑址 東より



D12号土坑址 東より



D13号土坑址 東より



D14号土坑址 東より



D15号土坑址 南より



D16号土坑址 北西より



D17号土坑址 東より



D18号土坑址 北より



M1号溝状遺構



M2号溝状遺構



Q1号特殊遺構 西より



上層水田址セクション 北西より



完掘状況 南東より



作業風景 南東より



Y10缶, 7-1 (1:7)



Y11缶, 8-14 (1:3)



Y2缶, 11-4 (2:5)



Y11缶, 9-24 (2:5)



Y5缶, 18-1 (1:7)



Y5缶, 19-13 (1:6)



Y5缶, 19-20 (1:3)



Y6缶, 22-19 (2:5)



Y 5 ft., 18-3 (2 : 5)



Y 6 ft., 21-10 (2 : 5)



Y 6 ft., 22-13 (2 : 5)



Y 6 ft., 21-9 (2 : 5)



Y 6 ft., 22-18 (1 : 5)



Y 7 ft., 26-16 (1 : 6)



Y 7 ft., 25-4 (1 : 5)



Y7住, 25-1 (1:5)



Y9住, 30-6 (1:4)



Y10住, 32-1 (2:5)



Y10住, 33-8 (1:6)



Y10住, 32-2 (2:3)



Y10住, 33-9 (1:6)



Y13住, 38-4 (2:5)



Y13住, 38-8 (1:5)



Y16住, 44-6 (2:5)



Y16住, 44-10 (2:5)



Y16住, 45-17 (2:3)



Y16住, 44-12 (1:3)



Y16H. 45-19 (1:3)



Y18H. 50-6 (2:5)



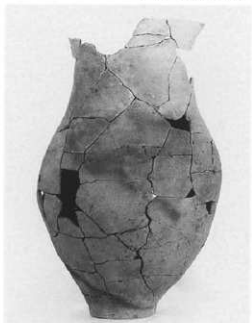
Y23H. 60-4 (2:5)



Y25H. 67-1 (2:5)



Y17H. 48-3 (1:3)



Y23H. 58-1 (1:7)



Y25H. 64-11 (2:5)



Y27世, 67-2 (1:5)



Y29世, 71-1 (1:4)



Y30世, 72-1 (2:5)



Y30世, 72-3 (1:4)



Y36世, 81-5 (1:4)



D13, 84-8 (2:5)



D13, 84-11 (2 : 5)



D13, 87-15 (1 : 6)



M2, 90-2 (1 : 5)



M2, 90-1 (1 : 5)



M3, 90-6 (2 : 5)



M3, 90-5 (2 : 5)



M3, 92-12 (1:3)



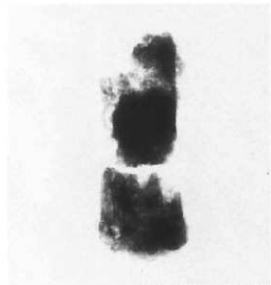
M3, 92-18 (2:5)



Ft 4, 97-4 (2:5)



Ft 4, 97-5 (2:5)



Y 8住, 101 (1:2) X線写真

報告書抄録

ふりがな	みなみじょういせきぐん つかだいせきに							
書名	南条遺跡群 塚山遺跡II							
題名	長野県埴科郡埴田町埴田工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	埴田町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第3巻							
著者名	高嶋勉・勝川明彦							
編者機関	埴田町教育委員会							
所在地	〒389-06 長野県埴科郡埴田町大斗中之島2468番地 TEL 0268-82-2060							
発行年月日	1995年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南条遺跡II	長野県埴科郡 埴田町 大字 南条	1521	—	36° 25' 08"	138° 11' 26"	1993年7月21日～ 1993年10月27日	2,834㎡	埴田工業団地造成事業に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
南条遺跡II	集落址	弥生中期～ 中世	竊穴住居址 溝状遺構 土坑址 水田址	36棟 5穴 21基	赤生土器 鉄片 石器 土製品 打製石斧 打製石鏃 打製石包丁 凹石	赤生時代後期後半の集落が検出され 箱清水期の集落が竊穴副に分けら れる。また土器丁の製作工房址でも ある。		

あとがき

弥生時代の集落を、いわば一村分調査するということは千曲川流域ではなかなか出来がたいことである。自然堤防上、あるいは中流上の集落となればなおさら一単位を探りつくすことは可能でない。その中であって塚口遺跡は、中洲上の集落であって、主体を弥生時代後半におき、四世紀初頭に及ぶかとするような単一に近い時期の集落であった。36棟の竪穴式住居址はほとんど弥生後期に属するものであったのである。したがって調査は密度の高さを要求されることとなったが、①土器における一形式内の住居址の新旧切り合い、②集落構造の仮定などの思考を可能とした。①は土器の一形式における変遷を示唆しているし、住居址構造の変遷をも示唆している。②は一単位時期における集落規模の変遷の仮定を可能とし、集落の構造、竪穴住居址の構造の変遷ばかりか一遺跡の認識の在り方をも示唆するものであろう。また生産址の水田遺構も、社会の構造化に伴う墳墓址も恐らくは隣接する地域に眠っているであろうことも示唆しているものである。

長野盆地最南端に位置するこの地域は、地理的には小果や生久に近くその影響下にあるものも検出されたばかりか、北まわりの資料も検出される。在地系の土器のあり方や非在地系の土器のあり方も又ないがしろには出来ない。しかしこのような様々な問題提起が可能な調査がたとえ2843㎡と小さくはあってもなし得たことを至上の喜びとするものである。

関係の皆様、又関係機関の御努力が、実を結びつつあることを思うと幾重にも感謝を表さずにはおれない。地方文化の一步一步を地道に築くことの速さと共に、本報告書の上梓を心から慶びたい。

1995年3月20日

調査団長 森 嶋 稔

坂城町の埋蔵文化財発掘調査報告書

	「開畝製鉄遺跡—第1次調査報告」	1978
	「開畝製鉄遺跡—第2次調査報告」	1978
	「東裏遺跡」	1984
	「中之条遺跡群 宮上遺跡II」(概報)	1993
	「南条遺跡群 塚田遺跡」	1993
	「南条遺跡群 東裏遺跡II・青木下遺跡」	1994
	「町内遺跡発掘調査報告書」	1994
第3集	「町内遺跡発掘調査報告書」	1995
第4集	「南条遺跡群 塚田遺跡II」	1995

発行日 1995年3月30日

編集者 坂城町教育委員会

発行者 坂城町教育委員会

〒389-06 長野県埴科郡坂城町大字中之条2,468番地
TEL 0262(82)2069

印刷者 信毎書籍印刷株式会社

〒580 長野市西町1E470
TEL 0262(43)2105

